

SEIJU

# 成·壽·秋

号

1996 年  
第 26 卷



残暑お見舞申しとぐす

平素善光寺の寺門興隆に格別

の由尽力を賜り厚く仰礼申しとぐす

成書二十六号とお届けいたしす

この度は当育英会が縁をいたごいる

名古屋の愛知学院大学を訪問した

又、無上菩提のために清浄の信心を

おこしで袈裟を著せんと云われて

おる尊いお袈裟について著者の先生方

に執筆をいたごの特集号といたしす

山高見 仰さすれば幸甚です

合掌

善光寺

黒田武志おじ

おのがため

はた他人ひとのためにも

子をも 財たからをも

領土くにを願ねがわざれ

不法ふちうふぎによりて

おのが繁榮さかえて願ねがわざれ

かの人こそ

戒いましめあるもの

智ある者

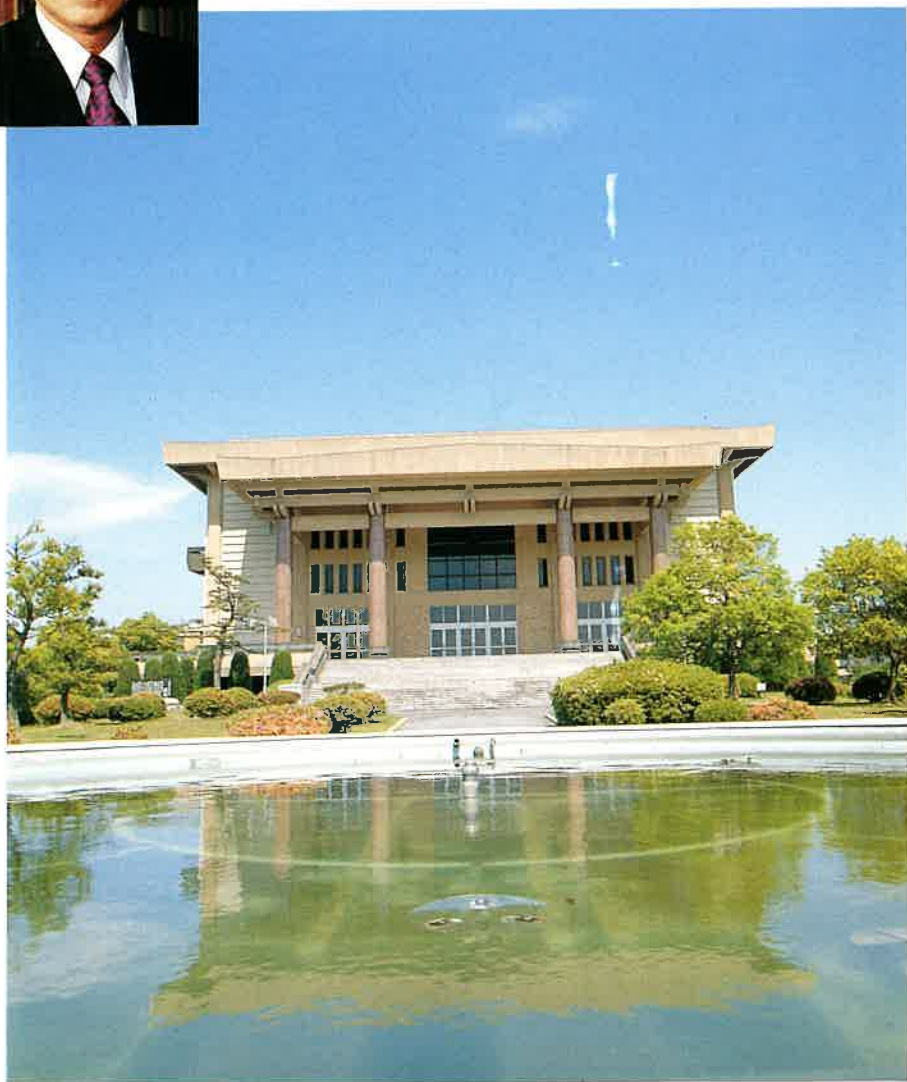
法にそえるなり

# 行学一体・報恩感謝



学長 医学博士  
小出 忠孝

愛知学院大学  
愛知学院短期大学



日進キャンパスのシンボリック建物である100周年記念講堂。  
入学式や卒業式はここでこなわれています。





愛知学院大学のメインキャンパスである日進キャンパスは、名古屋市の東に隣接する日進市にあります。敷地面積は約50万平方メートル。



坐禅風景



坐禅堂正面







禅研所長 文学部教授・理事

中 祖 一 誠

坐禅堂全景







講義用の教室や研究室がある6・7号館。  
最上階の6階には大学院事務室や大学院専用図書室などもあります。



名古屋市千種区にある楠元キャンパスの1号館。楠元キャンパスでは歯学部の特設教育課程、ならびに短期大学、専門学校の特設授業がおこなわれています。



楠元キャンパスから徒歩5分のところにある歯学部附属病院。  
中部地区歯科医療の中心的存在です。

カラ	—	■愛知学院大学		
巻頭言	●	……		10
特別読物	●	足るを知る	黒田	12
学園めぐり	●	愛知学院大学と建学の精神	小出	18
	●	仏教よりみた日中文化交流	鎌田	20
	●	仏教は誰のもの―国際仏教交流センターの確立―	引田	27
	●	アジアの仏教―留学僧座談会―	弘道	37
追悼	●	伊藤三毘庵先生追悼	東郷	51
特集・お袈裟	●	曹洞宗の「服制規定」	川口	52
	●	「お袈裟功德」巻撰述の真意	水野弥穂子	77
	●	糞掃衣	山田	96
	●	母親の一念	池沢	102
カラ	—	■母親の一念 糞掃衣		105
	●	お袈裟の意義、現状、その将来	東	109
	●	ソムデット就任祝う祝賀会	隆真	126
カラ	—	■ワットパクナム住職がソムデットに		129
	●	横浜善光寺留学僧育英会・第十回総会を開催、育英生七人に辞令交付		133
	●	第12回育英生の論文(要旨)		141
旅行記	●	ロンドン・ケンブリッジ・パリ 宗教文化の旅	阿部	149
	●	『ダナ・パーラミター』	遠藤	160
	●	育英生論文集の第二集を発行 論文集発刊に寄せて	博因	163
読者のための		留学育英生からのための	題字・イラスト	175
			伊藤三喜庵	



## 卷 頭 言

此の夏は、雨期に降水量が少なく、一時は水不足が心配されました。その大きな原因の一つに環境破壊が考えられるのではないかと思われます。人類共通の財産でもある地球をもつともつと優しく、大切にしてゆかなければならない。そのため、我々は地球環境保全に積極的に取り組まねばなりません。

環境破壊は、全て人々の日常の暮しの生活の中から生まれるものであります。その点を大いに反省して二十一世紀を眼前にしてその保全に世界の人々と共に国際協力をもつて推進してゆくべきです。

永平寺正門には、熊澤禅師の筆による『杓底の一残水、流れを汲む千億人』の句があります。多くの人々の心と身の渴きをいやしてくれる一滴の水をも無駄にせず、自然界の恵みに感謝して生きたいと思ひます。

『成寿』創刊以来表紙、文中のカット等、お書き下さった伊藤二喜庵先生が、

二月に逝去されました。

先生は至誠を以つて衆機を導かれ、心力を以つて万事を処され、建築界の重鎮でありました。又、日本南画界にあつては、新しい南画の開拓者として作風創意の工夫は誠に多くの方々より高い評価を受けました。先生に厚く御礼を申し上げますと同時に心よりご冥福をお祈り申し上げます。

今回は、名古屋の愛知学院大学とお袈裟の特集にいたしました。

愛知学院大学は、曹洞宗の僧侶・教師の養成機関として、『行学一体、報恩感謝』の建学精神で、人格の形成に日々精進し、東の駒澤大学、西の愛知学院大学と称されている名門校であります。

又、お袈裟は我々の僧侶の最も大切なものの一つであります。

——お袈裟は仏様の心であり、仏様のお体であります。——  
『大いなる解脱服、無相福田の衣、如来の教えを身につけたてまつり、広く諸々の衆生を渡さん。』

この誓願を心に堅持して仏法興隆・世界平和の為に、精進努力してゆきたい。

# 足<sup>た</sup>るを知る

善光寺住職

黒田武志



昨年、私たちの国は戦後五十年を迎えました。まったくの廃墟<sup>はつきよ</sup>と化した状態からコツコツと努力を積み重ね、とうとう世界でも有数の「豊かな国」を築き上げた日本…。しかし、五十年という節目にあたる年に起こった数々の事件は、近年まれにみるほどショックなことが多すぎました。阪神大震災―それによって生きる希望を失った老人の自殺、オウム真理教事件、住専問題、イジメによる子どももの自殺の多発、若い母親の幼児虐待<sup>ぎやくたい</sup>…。毎日毎日の新聞には、暗

いニュースがこれでもかこれでもかとはかりに掲載され続けました。これが、「豊かな国」となったはずの日本の、戦後五十年目の姿だったのです。

たしかに日本は物質的には「豊かな国」になつたかもしれませんが。テレビ、冷蔵庫、洗濯機なんでもちろんのこと、ビデオ、オーディオ、電子レンジ、乾燥機などが一般家庭にもずらりと並び、自家用車を持ち、長い休日には海外旅行という家族もそれほど珍しくなくなりました。

国民の中流意識は、今や九十パーセントを越えています。飢餓で幼い子が次々と死んでいく国から見れば、贅沢この上なく、幸せな国に見えることでしょう。それなのになぜ、私たちの国には、こうも暗く悲惨なニュースばかり流れるようになってしまったのでしょうか。私には、今の日本がどうしても「本当に幸せで豊かな国」だとは思えないのです。

### 心をないがしろにしてきた日本

「今、あなたは幸せですか？」と問われて、胸を張って、「はいっ。とても幸せです」と答えられる人が、今の日本には何人くらいいるでしょうか。「豊かな国」に暮らしていながら、なぜか、自分が豊かだとは実感できずに、逆に悩み、苦しみ、不平不満の気持ちばかりで生きている人が少なくないのが現状です。戦後、ゼロからのスタートを余儀なくされてきた日本は、必要

な物質を手に入れること、次いで、欲しい物質を手に入れることなど、物質的な豊かさだけを目標にして進んできました。その結果、大切なものを犠牲に：さらには、ないがしろにしてきてしまったのです。

それは、「心の豊かさ」です。

激しい競争社会の中、温かい心を育てることを忘れ、自分がどうすれば得するか、楽するかばかりを考えながら人と付き合い、だんだんと人間関係をゆがませ、人を苦しめ、そして自分も苦しむ。自分だけが大切に、相手を思いやる心を教えられず育つた子は、人の痛みや苦しみがわからずイジメに加担し、生命のぬくもりを欠いて育つた若者は、その尊さに気づかず、自分勝手な信仰のために人の命を奪う…。借りたお金はきちんと返さなくてはいけない」という、幼稚園の子でもわかりそうな道理を平気で無視する社会が生んだ住専問題。なにかもが、心





をないがしろにしてきた結果だと思えてならないのです。

人生の悩みや苦しみは、誰にでもあります。しかし、それを乗り越え、心から幸せになり、豊かさを実感することが、誰にでもできます。今からでも遅くはありません。心を大切に、次にお話しする心の法則を知ってもらいたいのです。自分のために、そして、自分の子や孫の未来のために…。

## 足りることを知る

お釈迦さまの遺言ゆいごんともいうべき最後の教えを内容とする経典『遺教経』ゆいきょうぎょうの中に、「知足ちちぞく」という言葉があります。

「知足」とは、「足りることを知る―足りることを知る」ということです。「多くの悩みや苦しみから逃れるためには、足りることを知りなさい。足りることを知れば、人はみな心豊かに幸せにな

れます」と、お釈迦さまはおっしゃっています。

「足りるを知る」というのは、今与えられている自分自身に心から満足し、自分を生かしているすべての恵みに感謝しながら生きている人のこと。逆に、「足りるを知らない」というのは、毎日何か不足に思い、不平不満をいながら生きている人のことです。同じ人生を生きていくにしても、両者の幸福感には天と地ほどの違いがあります。「幸せ」というものには、客観的な基準などありません。自分が「幸せだなあ!」と感じたときが、本当に幸せなときなのです。

たとえば、足りることを知っている人は、どんなに貧しくても、野宿をするような生活であっても、自分を照らしてくれる太陽や、とりまいてくれる空気にさえ感謝ができ、ありがたいと思うことができます。

足りることを知らない人は、どんなにすばらし

い高級住宅に住み、外車を乗り回し、地位や名譽があつたとしても、まだ足りない、まだ足りない」といい続け、満ち足りることがありません。常に満たされない状態というのは、とても不幸で憐れです。さらに独占欲、所有欲、財欲など限らない自己の欲望に振り回され、自分で自分の生まれながらの美しい心を汚していつてしまいます。足るを知らない人の人生は、かわいそうなものです。いつまでたっても、多くの悩みや苦しみから逃れられないのですから。

## 二十一世紀を見つめて

こんな話があります。事業に失敗し、世の中の何もかもに絶望し、死に場所を探し求めて歩いていたある人が、最後の宿代で木賃宿に泊まりました。暗い四畳半の部屋の中で、「明日こそ死ななければ」とため息をつき、ふと襦はすまを見るとき、破れを隠すために張りつけたであろう紙片

に、

「裸にて 生まれてきたのに 何不足か」

という小林一茶の句が書かれてあるのが目に止まりました。その人は何度も何度も心の中でその句を繰り返しているうちに、突然、心が百八十度轉換したのです。「そうだ！俺は正真正正銘丸裸めいぶで生まれてきたんだから、また裸一貫でがんばればいいんだ！」と。それからは情熱的に燃え続けて、ついに事業を再興し大成をおさめたのです。あの木賃宿で心が変わらなかつたら、その人の一生はどんなに惨めなものだつたでしょう。金も名譽も何の持ち物も持たなくても、この世に生を受けたということがまずすばらしいことだったのだ―そのことに気づき、「足るを知る」人になつた瞬間から、運命は好転していったのです。

このように、心のもち方次第で、すべての人が、「足るを知る」人になり、幸せになることが

できるのです。今抱えている悩みをちよつと横に置いておいて、日本という国をイメージしてみてください。春夏秋冬、美しい四季に恵まれ、自然―太陽・雨・風・山・川・草・木…は私たちに分け隔てなく、**生命**を生かす食べ物を与え続けてくれています。私たちは生かされているのです。でも赤ん坊だった私たちは、自然の恵みを手に入れ口にする手段を知りません。自分  
は口にしなくても子どもにだけは…と、食べ物を与えててくださったのは誰だったのか…。  
あなたが精神的・肉体的に苦しむ姿を、できるものなら代わってやりたいと一心に思ってくたさる人が、必ずあなたにはいるはずでず。たとえ、目に見えない姿となっていたとしても。

もし少しでも、「ああ、ありがたいなあ」という気持が芽生えたなら、私は、あなたはもう、「足るを知る」人になっているのだと思います。「足るを知る」人となった後の生活は、それは

楽しいものです。おいしいお茶を飲むだけしみじみと幸せを感じ、おいしいお菓子をいただけば心からありがたいと思え、瞬間、瞬間、毎日、自分が、自分にとって、最高・最良の時となるのです。暑ければ暑さを楽しみ、寒ければ寒さを楽しむことができるようになり、いつでもが好時節。世の中から辛いこと、不快なことが消えてくれるのです。

二十一世紀まで、あと四年。すばらしい世紀にするために、すべての人が、早く気づいてくれるといいなあと思います。恵まれている自分に。生まれながらに持っている、あなただけにしかないすばらしい宝に…。

こんなにも自分が幸せなのだから、人にも幸せを与えたいという気持を一人ひとりが持てば、きつと二十一世紀には世界中から暗いニュース・悲惨なニュースは消えていることでしょう。

『生きる力』神奈川・第二宗務所第五教区

特集・学園めぐり □ 愛知学院大学

# 愛知学院大学と建学の精神

学長・医学博士 小出 忠孝

明治九年に創立された愛知学院大学は、中部圏で最も古く、由緒ある学園として発展してきた。現在では、文学部の宗教学科・心理学科・

歴史学科・国際文化学科・日本文化学科の五学科の他、商学部・経営学部・法学部・歯学部それぞれ一学科を配し、五学部九学科、学生総数およそ一万三千名の総合大学となっている。

さらに平成六年四月、大学院経営学研究科と文学研究科日本文学専攻に博士課程（後期）が認可されたことにより、本学では全学部全学科の

上に大学院博士課程が設置され、文字通り大学院大学としての体制が完了した。

このように本学は社会の動きを的確に把握し、それに即応した教育活動を推進するとともに、時代が求める高い人間性の養成にも努めている。その背景となっているのが、仏教精神である。

曹洞宗の設立による愛知学院大学は宗祖道元禪師の教えにしたがい、『行学一体 報恩感謝』という建学の精神を教育の根幹として学生の人格形成に努め、さらに感謝の心を持った学生を世

に送り出してきた。

仏教の基本は慈悲と智慧の二語に凝縮するこ  
とが出来た。これを教育的に解釈するならば、  
慈悲とは他人を思いやる心であり、智慧とは豊  
かな知識をもとに、物事を正しく判断、処理す  
る能力を意味すると言えよう。すなわち、学業  
と人格形成とを教育の両輪として重視する点に、  
本学の特徴があるのである。慈悲の気持ちは、  
親族・縁者に限定されることなく、人類すべて、  
ひいては生きとし生けるものすべてに及ぶべき  
ものである。この気持ちこそ、真の意味での国  
際化や環境の問題に有効で明確な解答をもたら  
すのではないだろうか。さらに仏教の智慧とは、  
単なる知識の集積ではなく、悟りを直観する先  
天的な知力を意味する。この知力こそ、複雑で  
錯綜した情報社会にあって、真に必要な情報を  
取捨選択するに必要とされるものであろう。

現在、本学は大学院大学としての高度の教

育・研究の中心となっていると同時に、社会人  
教育・生涯学習に対する時代の要請に応え、公  
開講座や全国私学の中でも初めての取り組みと  
して注目を集めているラジオ放送講座の一層の  
充実にも努めて、社会全体に奉仕、貢献してい  
る。

さらに二十一世紀の超情報化社会に対する教  
育・研究をどのように行うべきか、その対策を  
検討し、体制を整えるべく教・職員一丸となっ  
て取り組んでいる。

(横浜善光寺留学僧育英会顧問)



特集・学園めぐり □ 愛知学院大学

# 仏教よりみた日中文化交流

愛知学院大学 教授  
中国社会科学院文献情報センター名誉教授

鎌田茂雄

## 日中仏教交流の歩み

日本と中国は地理的に一衣帯水の関係にある。そのため、日本と中国との文化交流は古代から現代に至るまで連続と継続している。

奈良・平安時代には多くの留学僧が中国に渡り、唐の仏教学を学び、新しく翻訳された經典を日本に伝えた。玄昉、道昭、智通、智達たちは法相宗を日本に伝えたが、とくに玄昉は在唐十九年にも及び、長安や洛陽で修得した唐の仏教文化を日本にもたらしたのである。

平安時代の始めには最澄、空海が入唐し、最澄は天台宗を日本に伝えて比叡山延暦寺を開いた。空海は、長安で恵果より真言密教の真髓を伝受されて、帰国すると東寺や高野山を開き、日本真言宗の開祖となった。さらに円仁、円珍、真如親王、靈仙、慧萼らが入唐した。そのうちの靈仙は日本人として初めての三藏法師となった英才であったが、五台山靈境寺で毒殺されてしまった。慧萼は舟山列島の観音靈場である普陀山を開いた僧である。

中国僧の来日もあった。鑑真は何度かの渡航



に失敗し、遂に失明しながらも来朝し、唐招提寺を開き、日本律宗の基礎を確立した。

鎌倉時代になると、多くの日本僧が留学して日本に禅宗を伝えた。栄西は臨済宗を、道元は曹洞宗を開いた。また中国僧である蘭溪道隆、無学祖元などが来朝し、宋代の禅を日本に伝え、鎌倉五山、京都五山などが生れたのである。このような古代においては大きな日中仏教交流が盛んに行われたのである。

引きつづき、元、明、清代にも多くの日本僧が中国に留学して中国の仏教を学び、日本に伝えていく。水野梅暁師は道元の師である天童如浄の墓塔を拝し、天童寺住持敬安と互に仏教興隆について論じ、日中仏教徒の提携の大切さを知り、意気投合したという。敬安のすすめによって梅暁は、翌年明治三十六年、湖南省長沙に湖南僧学堂という塾を開いて、中国僧の教育に貢献した。

その後梅暁は、中国僧、笠雲等三名を日本仏教視察のため来日させて、日中仏教の友好と交流に尽した。湖南省の南岳衡山に南台寺という古刹がある。文革で荒廃したが、今は立派な寺院として復興しているが、この南台寺に彼が、黄檗版の大藏経を寄贈したことは、日中文化交流の上に残した大きな功績であるといわなければならない。

学者の常盤大定博士は、中国全土の石窟や寺院を調査し、中国の仏教文物に関する大著『中国文化史蹟』（十五冊、法蔵館）を刊行され、中国仏教研究史上、不滅の金字塔を樹立された。それはどこまでも中国の仏教を愛し、中国仏教の文化遺産を後世に伝えるためであった。

敗戦後においても日中友好仏教協会が設立されて、中国仏教協会と密接な交流を行い、また、日本の各宗派独自の祖山参拝訪中団が山西省の玄中寺、長安の青竜寺、香積寺、浙江省の国清

寺、天童寺などを訪れ、寺塔の復興にも協力している。

## 日中仏教学術交流

私事にわたり甚だ恐縮だが、この度、はからずも中国社会科学学院より外国人として初めて、文献情報センターの名譽教授の称号を授与された。このことについて報道した『中外日報』紙（平成七年十一月二日号）の記事を引用して授与式の模様を紹介させて頂きたいと思う。

授与式には汝信副院長、センターの李恵国主任、黄長著副主任をはじめ学術会議に参加した中国の著名な学者や社会科学学院の研究者、職員ら多数が参加。また本間社長以下、中外日報社一行も全員参加した。汝信副院長は国際交流基金による企業シンポジウムへの参加予定を変更してまで出席し、この授与式をいかに重視しているかを窺わ

せた。

初めに挨拶した汝信副院長は「朋有り遠方より来る、また樂しからずや」という孔子の名言を引用し、日本の友人・鎌田教授授与の式典に臨む喜びを表明した。さらに「鎌田先生は日本の著名な仏教学の専門家であり、六十年を一日のごとく仏教学を研究されてきた」と紹介。その著書は身の丈にも達すると述べ、「先生の態度は我々学問研究者の見習うべき態度である」と敬意の念を表した。また「鎌田教授は中国学術会の古い友人であり、毎年、中国を訪問して中国のほとんど全土に足跡を残されている」として、中日の仏教学研究と相互交流に対する貢献を高く評価した。

「そればかりでなく、将来は自らの蔵書を中国社会科学学院の図書館に寄贈することを考えていると聞き、そのことに中国の学

者は驚き感動している」と述べ、「鎌田先生はセンターが外国人に授与する最初の名誉教授である」として心から祝意を表し、鎌田教授の長寿と健康と新たな研究成果を祈って感謝の言葉とした。

李恵国主任は「鎌田先生は東京大学の名誉教授で、六十年の研究生活の中で大量の研究成果を発表されている。学士院賞や仏教伝道文化賞も受賞している著名な仏教学者である」と業績の一端を紹介。センターが海外の研究機関と交流を図り、援助を受けていることを報告し、鎌田教授を「名誉教授第一号」の学者として迎えたことを光栄として、センターの図書管理と研究に対する指導を願った。

この後、世界宗教研究所の呉雲貴所長が挨拶し、「本間社長と同様、鎌田先生は我々の古い友人だ。互いに温かい友情をかわせ、

心と心で結ばれた緊密な関係にある。学術交流でこれほどの関係をもつことは少なく、この関係はもっと大切にしなければならぬ。先生は徳望の高い仏教研究者であり、その厳密な学問研究から世界宗教研究所はたくさん重要なことを学んできた。中国の学者は口を揃えて先生の学問業績を誉め称えている」と最大級の賛辞を贈り、「先生が日中友好のために新たな貢献をなさることを信じている」と結んだ。

以上、長々と引用させて頂いたが、この記事の要点は、中外日報社並びに中国社会科学院世界宗教研究所の共催による日中仏教学術会議が二年おきに北京と京都に於て開かれ、すでに昨年第六回の会議が行われたということは十年の密接な日中交流があったことを意味する。昔の十年とちがって現代の十年は昔の百年にも相当するかもしれない。日中の文化交流や学術



青面金剛

沙明三喜庵



交流はその長い年月の継続と積み重ねがあつて始めて信頼関係が生まれるといつてよい。だからこそ、その学術会議の開催のために労力と資金をつぎこまれた本間昭之助中外日報社長に対して、この十年の節目にあたって、世界宗教学研究所の名誉顧問の榮譽称号が授与されたのである。日中学術交流は、あらゆる障害を排除して継続することが一番大切なことなのである。

次に、私の蔵書をすべて私の死後、中国科学院文献情報センターに寄贈する件である。数年前、中国社会科学院世界宗教研究所の楊曾文教授が東京に來られた時、私の図書室に立ち寄られて蔵書を見て頂いたことがあり、その時、蔵書の寄贈と、それを明記した遺言の一部をコピーして差し上げたのであった。それをその後、種々検討した結果、中国社会科学院文献情報センターが受け入れを決定し、この度の授与式となったのである。

## 日中仏教學術交流と 善光寺留学僧育英会

最後に今後の課題について述べておきたい。中外日報との共催による日中仏教學術会議は今後十年間もまた継続することを本間昭之助社長は明言しておられるので、引き続き実施されると思う。中国の研究所、大学に所属している仏教研究者の数は著しく増加し、また若手の優秀な研究者の養成も目覚ましい。昨年の北京の学術会議の時には若い学者の質問が非常に多く、しかもその内容は極めて程度の高いものであり、中国の仏教研究の水準が高いレベルに達しつつあることを実感することができた。

日中仏教學術交流は、京都の仏教大学と中国仏教協会との間においても行われており、その他、鳩摩羅什生誕一千六百年記念学会、玄奘学会、法門寺討論会、禅関係の学術交流会など多

くの仏教関係の学会が開催されており、日本からも多くの研究者が参加している。今後、さらに仏教関係の学術交流が推進されると思う。

中国の若い仏教研究者や篤学の青年僧は、日本の国立大学のインド哲学研究室や、宗立の仏教系大学に留学して仏教を学びたい意欲と情熱を持っている。しかし、日本留学に要する費用や奨学金を授与してくれる機関もないのが現状である。中国仏教協会などの組織から派遣される場合もあるが、それはごく少数である。希望者は沢山いるが留学できないというのが現実である。

このような実情の中にあつて、善光寺留学僧育英会の果す役割は大きい。中国の留学生に対して善光寺留学僧育英会は従来からも留学費を供与して大きな貢献をされてきたが、今後また日中仏教交流という視点からさらに継続発展されることを望んでやまない。

一人の留学僧の生活を援助することは、日本政府の援助によって敦煌に、石窟美術を保護するセンターが設立されたようなことに比較すれば微々たることも知れない。しかし、この小さな善意を積み重ねることによって、山をも移すことができることを銘記しなければならぬ。中国の有名な格言に「愚公山を移す」という言葉があるが、どんな困難にあつてもねばり強く努力を続ければ、必ず大きな目的を成就することができるものである。善光寺育英会の留学費で育つた有能な研究者たちの力が結集され、大きな日中仏教交流の力となることを私は信じて疑わない。真の中国との交流は持続することによつて信頼が得られる。

今の留学僧育英会の制度を長く継続され、交流の絆を育てられんことを重ねて願つてやまなものである。

(横浜善光寺留学僧育英会顧問)

特集・学園めぐり □ 愛知学院大学

# 仏教は誰のもの

## ——国際仏教交流センターの確立——

愛知学院大学文学部助教授

引 田 弘 道

### 仏教の国際性

仏教は本来国際色豊かな宗教であった。これは同じ南アジアで起こった宗教であるヒンドゥー教がその民だけをその対象とするのと大きく異なる点である。仏教は民族・地域の枠を越えてアジア全体に広がり、それ故に「世界宗教」と呼ばれるようになったのである。仏教の伝播

の地域と聖典言語を問題にすれば、漢訳経典やチベット語訳経典を中心とする北方アジアに広まった大乘仏教と、パーリ語聖典を中心とする南方アジアに広まった上座仏教とに大別することが出来る。このうち、前者は信仰心に力点が置かれ、後者は戒律の遵守に力点が置かれた。即ち大乘仏教と信仰心、上座仏教と戒律という大まかなグループニングが可能なのである。



もちろん大乘仏教も戒律を無視した訳ではなく、上座仏教にも信仰心は重要な要素であるが、その力点の置き方を問題にすると、先のように分類出来るのである。

ところで、戒律はそれを個人レヴェルで遵守することが第一義であるが、同時にこの戒律の伝統を保持し後世に伝えていくこともまた仏教にとって不可欠な責務である。もしなんらかの社会的、あるいは僧団内の原因によって、戒律の伝統が破壊されてしまったならば、その教団は「死に体」に等しく宗教活動は大いに制限されてしまうのである。そこで南方の上座仏教はスリランカ・タイ・ミャンマーの国にある仏教教団が相互補完的に戒師を融通しあつて、全体として戒律の伝統を守り、ひいては教団の維持がなされてきた。たとえば現代スリランカの上座仏教の諸派のうち、アマラプラ派とラーマニヤ派はミャンマーから、そしてシャム派はタイ

から逆輸入されたものである。元来上座仏教はスリランカを中継地としてタイやミャンマーに移入されたにもかかわらず、戒律の伝統が途絶えた仏教を復興しようとする場合には、他国の戒師を必要としたのである。

このことは何も上座仏教に限ったことではない。わが国においても日本に正式な戒団を設置し、具足戒を受けた正式な僧侶育成をめざした栄叡や普照の懇願を受けて、鑑真和上は渡航の危険を犯してまでもやって来たのである。鑑真和上建立の唐招提寺は、「唐代の四方サンガ」を意味し、地域・空間に限定されない理想的な戒律中心の僧団を目指したものである。

このように、仏教は各地に伝播したという結果から判断して世界宗教と言うのではなく、寧ろ戒律を核にして、その伝統保持の為に国や地域のボーダーを越えて互いに助け合ってきたからこそ、そのような名前が冠せられたのだと結

論して良いのではなからうか。

## 国際化する日本の欠陥

現在の日本経済は間違いなく国際化の道をひたすら走っている。企業はその生産の拠点を次々と海外に移し、国内の空洞化が心配され始めているほどである。さらに円高は日本人の海外旅行を日常的なものへと変貌させている。ひと昔前、一部の特種階級の者だけに許された「洋行」という言葉は現在死語と化している。日本経済の発展は、交通や通信手段の格段の向上と相伴って我々をグローバルな人間へと変えてきつつあるのである。また日本にやって来る外国人の目的は単なる観光から、ビジネス、労働や留学へと多岐に亘り、しかもその数は年々増加する傾向にある。

さらに日本の経済力は「政府開発援助」(ODA)として多大な資金をアジア諸国等に援助し、



その使用方法の是非はともかくとして、戦後の荒廃から短期間にして世界有数の経済大国を實現した国という認識を彼らに植え付けるのには十分であったと思われる。つまり現在の日本は経済的面だけからすれば、アジアの優等生であり、アジアの星なのである。

ところが、先のODAも「ばらまき外交」ではないかという批判があるように、どのような原則をもつて行うのか、いま一つはつきりしない。留学生の受け入れについても同様である。技術以外の日本の何を彼らに理解してもらうのか、あるいは帰国した彼らに何を期待するのか、これもまたはつきりしないのである。元来、島国日本は異なる民族との交流が少なく、そのため自己の独自性を確立する必要もなかった。限られた集団内でどのように個性を殺しながら他者と協調していくかということには慣れていても、異なる文化や価値観を持つ人たちと接し

た際に、個性をどのように他者にアピールするかという点は全く不慣れた民族であると言える。

## 日本仏教の閉鎖性

日本仏教は江戸時代に成立した寺請制度により経済的基盤が確立されたが、それと同時に葬式や法事といった祖先供養の面のみに活動を限定され、必然的にダイナミズムが失われていった。それ以前の仏教は政治の中枢に接近することはあったが、それはまたその時その時の社会的・政治的要請に応える活動を行う必要もあつたわけで、その意味では非常に時の社会情勢に敏感であつたと言える。

寺請制度は同時に宗派のセクト性を増長させていった。江戸期に壇林等で盛んに研究されたのは、各宗派の宗祖の教義であつた。その教義を宗乗、その他の通仏教を余乗とはつきり分別

したのもこの項である。現在の宗学が宗乗の、そして仏教学が余乗の伝統を引き継いでいるの  
は言うまでもない。しかも鎌倉時代の宗祖たち  
が他宗から自らの宗の独自性を確立するため、  
只管打坐、専修念仏、唱題といった誰にでも出  
来る簡明な修行方法を標榜した為、自力と他力、  
禅と念仏には同じ仏教とは思えないほど大きな  
隔たりが生じた。これは韓国の仏教など禅をし  
ながら同時に念仏を修するといった東アジアに  
認められるものと大きく異なる。

ところでこの寺請制度は農村を中心とした人  
口移動の少ない時代にはそれなりに有効に機能  
していた。特に各寺はその地域の人々の戸籍調  
査等の役割を果たしており、時の中央政府の出  
先機関としての機能を持っていたのである。し  
かし、戦後急速に都市化が進み、農村の過疎化  
と人口の大都市集中が加速されると、この制度  
の持つ先の機能さえ失われていったのである。

都市に移り住んだ一世はともかく、二世、三世  
になると、彼らと出身地域との交流はなくなる  
と同時に先祖からの菩提寺への参詣の回数も少  
なくなっていく。寺請制度の束縛から離れた  
彼らは、今度は精神的支柱を求めて、新興宗教  
にも救いを求めるようになった。というのも都  
市の墓地や霊園は高く、容易に都市部の寺院の  
檀家になることは出来ないし、祖先供養を柱と  
した「家制度」の維持よりも個人的な利益を求  
める方が彼らの興味をひいたからである。

### 日本仏教の国際化

しかしながら、日本の仏教が現在寺請制度に  
のみ安住して、全く孤立化しているかといえ  
ば、そうではない。日本仏教の国際化はまず海外に  
移住した邦人を対象として、彼らの精神的拠  
り所、もしくは葬祭の用に利することを目的とし  
て、移住者の多い地域を中心に各宗派がこぞつ



て別院、または独立寺院を建立し彼らの布教の核とした。曹洞宗を例にとるならば、ハワイ、

北米のカリフォルニア、南米のサンパウロにこれらの寺院が集中している（寺院名鑑を参照）。

次に注目すべきは西洋人への積極的な布教である。これは鈴木大拙や弟子丸大仙らによって積極的に進められ、日本の仏教、特に禅仏教に興味を持つ西洋人が少しづつではあるが増えてきた。彼らは禅の持つ幽玄な境地を通して東洋の神秘に到達しようと考えたのであろう。あるいは実修的禅定がキリスト教の伝統的修行方法である瞑想と深く関連していたものとも推察される。最近示寂された前角博雄老師も弟子丸老師に劣らない布教師であった。師は昭和三十一年ロサンゼルス禅宗寺駐在開教師として渡米して以来、ロサンゼルス禅センター佛真寺、並びに陽光寺を開創された他、ニューヨーク、フランス等世界各地に禅道場を建立し禅の高揚に努め

られた。出家得度の弟子五十数名、授戒の弟子は八百余名にもものぼるといふ。

一方、当地で禅の教えを受けた彼ら西洋人たちのうち、本場の道場でより厳格な修行を實踐したいと思う者も出てくるようになった。そして彼らの熱意に応えるべく、日本にも彼らを積極的に受け入れる道場も出現した。福井県小浜の発心寺は数多くの外国人が修行していることで有名であるし、曹洞宗の本山にも国際部が置かれ彼らの受け入れを行っている。また浄土真宗では、本願寺派が中心となって浄土三部経を始めとする重要經典の英訳の出版を行い、国際語による浄土教の布教に努めている。これに関連して、国際伝道協会による仏典の英訳事業も見逃すことは出来ない。その他各宗派が現在取り組んでいる国際化は枚挙にいとまがない。

## 仏教の眞の国際化を目指して

ただこれらの各宗派の布教は、当然のことながら、自らの所屬する宗派に限定されている。

日本仏教全体とか、アジアを含めた仏教全体を西洋人を始めとするキリスト教徒に布教することとは、理論的に可能であるとしても、実際には荒唐無稽な発想であろう。少なくとも自身の宗派の素晴らしさを異教徒に理解してもらふことが重要なのであり、その他の宗派やましてやアジア仏教全体は彼自身の能力の範囲を越えたものである為、布教者が真摯であればあるほど、それは不可能なことになるのである。しかしこのような布教方法は、大ざっぱに言えば「外国人の日本文化理解に努める」ことに他ならないのであり、仏教が本来持つ国際性からはほど遠いように考えられる。先に述べたように、仏教は戒律の伝統の遵守を金科玉条として、南・東

南アジア各地で相互補助しあつて来た。日本でも最澄の大乗戒壇運動以前は四分律を中心とした中国・日本との交流は、戒律遵守という仏教文化の共有を背景としていた。

しかし現在の日本仏教はその多くが四分律ではなく、信仰心を主とした大乗戒に依拠しているため、これらのアジア諸国の仏教との積極的交流の必要性は感じていない。あるいは全く戒律の概念を放棄した宗派もある。それ故戒律を主にしたのでは、仏教の国際化は日本では無理のように考えられる。では日本仏教にとつて眞の意味での国際化とは何であるのか。それは上座・大乘の区別を超越したグローバルな仏教情報センターの確立であろう。少し前愛知学院大学に留学しているアジアからの留学僧と懇談する機会を得た。彼らに共通することは、我々が考える以上に上座仏教とか大乗仏教の区別をしていないことであり、さらには異なる聖典言語

の壁をも難なく飛び越え得る国際性を持ち合わせていることである。彼らにとって仏教とは「仏陀の教え」そのものであり、それ以上でもそれ以下でもないのである。仏・法・僧の三宝に帰依するのであれば、仏教徒どうしの連帯意識を持つことが可能になっている。彼らと比較すると我々日本人は余りにも些末なことに縛られて、大きな水平的な視線を失っているのではあるまいか。

彼らの持つおおらかさ、換言するならばダイナミズムに応えるには、ある特定の宗派意識を捨てることがまず第一に要求される。次に必要なのは、仏教情報の交換である。先にも述べたように、日本での仏教の国際化は宗派単位ではかなり積極的に行われている。しかし各宗派の情報を交換すること、さらにそれをアジア各地の仏教の拠点に提供すること、反対にアジアの仏教情報を日本の各拠点に提供すること、この

ような仏教情報の中継組織はまだないように思われる。あるいはあるかもしれないがその活動はまだまだ大規模ではないのであろう。従来仏教に限らず情報というものはストックするものと考えられてきた。なぜならばいち早くより有益な情報を得た者が勢力を伸ばすことが出来たからである。過去に製鉄の技術は強力な武器を發明し、それによって他の民族の侵略を容易せしめたし、現在でも企業や国は他の情報をいち早く入手しようとするようになっていく。それ故、価値ある有効な情報はなるべくストックして、他者に知られないよう秘匿するのが常識であった。

しかしマス・メディアの急速な発達、情報のストックからフロー（流れ）にその力点をシフトさせ始めている。情報をどのように対話的に流すのが、今後のメディア産業に課された大きな問題となっているのである。このことは

南無文聖不動的王  
斬悅懺悔  
大祖罪障滅除  
煩惱滅除業障



善光寺  
法印三光院  
印

また日本の仏教にも言えるであろう。島国日本は仏教伝播のどんづまり地域であり、中国からの最新の仏教情報は彼の他に留学した僧たちによって持ち帰られ、日本にストックされていった。しかし現代では日本は仏教情報の受信地域だけではなく、発信地域にもなっている。とすれば、そのような両機能を満足させ得るだけの情報センターの確立が必要になるであろう。このセンターを經由してアジア・ヨーロッパ・日本の仏教情報を双方向的にフローさせれば、必ずや仏教を総合的に発展させることが可能になるのではあるまいか。また日本各地で国際化に取り組んでいる寺院や団体をネットワーク化することによって「点から線へ」仏教の活動を展開させることが出来るのである。その意味で善光寺の黒田武志住職のやっておられる活動は注目に値しよう。宗派にとらわれず、さらに日本人ばかりではなくアジアからの留学僧にも育英

金を拠出しておられるのは、このセンター構想にとって一番基本的活動である。願わくば日本の志を同じくする個人や団体との連絡、アジア地域の寺院への積極的情報交換を今以上に進めて頂ければ、筆者の理想に近づくものと期待している。

今後、情報活動が盛んになるにつれ、今までとは異なる全く新しい形態の仏教組織が誕生するかもしれない。前田恵学博士も既にヨーロッパ人によるヨーロッパ人の為のヨーロッパ仏教の誕生とその活動を報告しておられる。このような現象はさらにもっと各地で起きる可能性を秘めている。しかしそれはそれでいいのではなからうか。

(横浜善光寺留学僧育英会第五回育英生)

特集・学園めぐり □ 愛知学院大学

# アジアの仏教

—— 留学僧座談会 ——

平成八年一月三十日、午後二時～四時

## 出席者プロフィール

### ◆司会者

引田・引田弘道

一九五三年生まれ。現在、愛知学院大学文学部助教授。博士（文学）。

### ◆出席者

鄭・鄭夙雯。法名・釈法性。比丘尼。

台湾高雄市生まれ。高雄女子高校卒業後出家。岐阜県にある正眼短期大学卒業後、愛知学院大学文学部に編入学。現在本学部四年生。台湾での所属する教団・寺院は、臨濟宗、日月山慈徳寺。

朴・朴鍵。法名・釈智観。比丘。

一九六二年韓国ソウル市生まれ。高校卒業検定試験合格後、愛知学院大学文学部に入學。現在本学大学院修士課程二年。韓国での所属する教団・寺院は大韓仏教曹溪宗、華嚴寺。

嘉木揚・嘉木揚凱朝。蒙藏仏学院教師。

一九六三年中国内蒙古生まれ。阜新蒙古自治県佛寺蒙古中学卒業後、一九八一年北京にある擁和宮で出家、一九九〇年中国蔵語高級仏学院を卒業、現在本学大学院修士課程一年。中国での所属する教団・寺院はチベット仏教、擁和宮。(第十回育英生)

ホアン・ホアン・トロン・ソー。法名・釈源心。比丘。

一九六〇年ヴェトナム承天省、化(HUE)市生まれ、越南高級仏学院卒業。現在本学大学院修士課程一年。ヴェトナムでの所属する教団・寺院は、臨済宗、竹林寺。

ギヤナ・ギヤナ・ラトナ・スローモン(Gyana Ratna Sraman)。比丘。

一九六八年バングラデーシュ、チッタゴン市生まれ。チッタゴン大学卒業後、タイのマハーチュラロンコン大学でパリ仏教を学ぶ。現在本学大学院修士課程一年。バングラデーシュでの所属する教団・寺院は、サンガラージャ・ニカーヤ (Sangharaja Nikaya)。(第十二回育英生)



## はじめに

引田・今日は皆さん定期試験の最中、この座談会に出席して頂き大変ありがとうございました。御存じとは思いますが、愛知学院大学の教員や学生諸君は、過去何度となく横浜の善光寺海外留学僧育英会のお世話になっています。私も平成元年度、本学の在外研究でイギリス・オックスフォード大学に行きました時、留学僧に加えて頂きましたし、翌年森祖道先生(文学部・国際文化学科教授)と大学院博士課程二年の浅井君、さらには宗教学科の大学院に在籍していたヴィマラ・ワンサ(Vimala wansa)君や、ディリッブ・クマール・バルア(Dilip kumar Barua)君もお世話になり、物価の高い日本、しかも私立大学の大学院で研究が続けることが出来ました。さらには今日ここに出席している嘉木揚凱朝君もそうですし、今年度は新しくギヤナ・ラトナ・

スローモン君が奨学生に選ばれたばかりであります。

今回善光寺さんが出しておられる雑誌『成寿』で愛知学院大学特集を行うことになりました。そこでこの機会に是非とも留学僧の皆さんの背景となっている仏教をお聞かせ願いたいと思います、このような座談会を企画したわけです。まず皆さんのそれぞれのお国の仏教事情について簡単に話しし



て頂きたいと思ひます。

## アジアの仏教の現状

朴・韓国の伝統的であり、しかも最大の宗派は大韓仏教曹溪宗です。この派には全国に二五の本山があり、寺院化数一六九四、信者数一五一三万人、僧侶数一万三千人以上と言われております。その他の主な宗派としては、韓国仏教太古宗、大韓仏教天台宗、韓国仏教法華宗等があります。四、五年前に宗教法人法の改正があり、一定の資金があればかなり自由に新宗派を創ることが出来るようになりましたので、現在では四〇以上の宗派や団体を数えるようになりました。これらの宗派をすべて含めて韓国の仏教徒は約人口の半数、二千万以上だろうと考えられます。ただ宗派と言ひしても、日本のようなセクト的なものではなく、学問的な違いを主としたものであり、その意味で私たちの仏教は通

仏教であると言ひます。

引田・海印寺に代表されるように、韓国のお寺は山の中にある印象を受けます。いっぽう町には数多くの十字架が認められますね。これはどうしてなんでしようか。

朴・もともと韓国の寺院は山中にあつたわけではありませんでした。慶州のようになり開けた平な場所に寺院跡が発見されています。これは政治と仏教とが密接な関係にあつたことを示すものです。ところが李氏朝鮮の時代になると仏教は迫害されるようになりました。仏教徒にとっては受難の時代であつたわけです。この時代は仏教に代わつて儒教が治世の精神的支柱となりました。僧侶たちは政治的弾圧を避けて、市中より山中に逃れるようになったのです。

一方、キリスト教はこの李氏朝鮮時代に中国を経由して私たちの国に伝わりましたが、先祖崇拜を無視する教義は先祖を重視する韓国の国

民性と相入れず、その為あまり広まりませんでした。広まったのは、朝鮮動乱以後でしょうね。

この時宣教師たちが多くやって来て、食料の援助の他、学校の建設を始めとする慈善活動を熱



朴鍵師

心に行った結果、自然とキリスト教に改宗するようになったのでしょう。

引田・鄭さんは、正眼短期大学を卒業後、三年間正眼寺の僧堂で修行されてから、愛知学院大学の三年生に編入学されたのですが、ここで台湾の仏教について少しお話しを伺いたいと思います。

鄭・台湾仏教の二大聖地は、北部の獅頭山と南部の仏光山です。特に仏光山は南部の高尾県にあり、国内最大の仏教道場ですね。私の所属する慈徳寺はこの仏光山より少し北の、台南にあります。慈徳寺の私の師匠も正眼寺出身なので、その法系を継いで私も正眼寺で修行したわけです。

ただ台湾の仏教はこの臨濟宗と曹洞宗とがあります。殆ど名前だけで、実際は念仏中心の浄土教だと言っていると思います。坐禅しながら南無阿弥陀仏と唱えていて、日本の臨濟宗の

ように「悟りとは何か」というようなことを考  
えることはありません。また台湾では修行より  
も学問が主流で、主要な寺院には仏学院が併設  
されており、僧侶や在家信者の教育に力を注い



鄭夙雯尼師

でいます。

また台湾の最近の寺院は巨大化する傾向にあ  
ります。仏像等も大きなものが多く作られてお  
ります。

引田…そうですね。二年程前、私がオーストラ  
リアのブリスベン市を訪れた時、クイーンズラ  
ンド州のこの市の近くに、市庁の時計台より高  
い仏像が台湾の寺院によって建立されたという  
どちらかと言えば批判めいた新聞記事を読んだ  
ことがあります。ところで、台湾の仏教は道教  
と深く結びついていると聞いておりますが。

鄭…そうですね。台湾では仏教と道教とがまっ  
たく一つに同化して民間信仰の対象となってい  
ます。寺に行き、仏前に額づき、占いのポエを  
落として、長寿や金運を願うといった現世利益  
を求める多くの人たちが台湾には見受けられま  
す。ただ最近では必ずしも仏教を現世利益の宗  
教として理解していないようになりました。特

に大学生などは仏教のクラブやサークルをキャンパス内に持ち、ヴォランティア活動等を行って、純粹な仏教精神に興味を抱き、卒業後出家する人たちもいます。さらに多分経済的繁栄の裏返しでしょうか。精神的拠り所を求める人たちが増え、それに応えるように新興宗教も目だつようになりました。

引田…経済的繁栄というのは結果的に個人主義や拝金主義をうみだしてしまうものですから、これは大家族主義に慣れ親しんできた我々アジア人にはかなりしんどいものですね。ヨーロッパ人が長年培ってきた個人主義は自由経済と一緒に急速にアジアに浸透してきました。経済的發展は大いに歓迎すべきなのですが、個人主義は不慣れな分、やはり面食らう文化だと思えます。都市化が進むと農村的大家族主義に代わるものとして、新興宗教の抱擁性・連帯性に期待する人たちが増えているのでしよう。

嘉木揚…モンゴルはチベット仏教です。遊牧社会のモンゴルでは、住居は移動式のゲル(包)でしたから、固定家屋の仏教寺院の出現は文化的に画期的出来事であったと想像されます。また寺院は学問の発信基地でもあった訳ですから、今でも寺院では最高の教育機関と考えられています。ところでチベット仏教の特徴として師僧(ラマ)の信仰があります。ラマは仏・法・僧の三宝と信者の仲介者と考えられ、モンゴル語仏典では三帰依文について「我らラマに帰依したてまつる」とあるほどです。もう一つの特徴として「転生活仏」の思想があります。高僧が亡くなると、その肉体から靈魂が分離し、他の新しい肉体に宿るといふ考えです。この活仏とラマへの信仰は融合しあい、活仏つまり「生き仏」こそ最高のラマであり、彼を崇拜することこそ最も悟りへの近道とみなされています。最近ノール平和賞を受賞された現在のダライ・ラマ

十四世も歴代のダライ・ラマ同様活仏です。引田・モンゴルの仏教の様子は少し分かりませんが、擁和宮とチベット仏教とはどういう関係なのですか。



嘉木揚凱朝師

嘉木揚・満州民族の国家、清朝の時代に作られた擁和宮は北京でのチベット仏教の拠点となりました。私はモンゴルの高校を卒業後この擁和宮で修行したのですが、この際試験があつてそれに受からないとこの宮に行けないのです。モンゴル各地から私を含めて二六人受かりましたが、この試験では百人に六人くらいしか合格しません。ここで十年くらい修行した後、同じ北京の黄寺にあるチベット大学（中国蔵語系高級仏学院）に入學しました。これは一九八七年に創立された大学ですが、程度は北京大学に匹敵するくらい高度なものと私は自負しております。またチベット仏教の活仏はチベットであれ、モンゴルであれ、各地で勉強した後、この高級仏学院に最終的に入學します。卒業すればパンチエン・ラマより真正の活仏である証明書を得ることが出来ます。もともとこの仏学院はパンチエン・ラマが中国政府に働きかけて作った大学

ですので、彼が証明書を発行するのは当然です。またここではチベット語・チベット仏教の他、中国語・中国仏教、さらには政治や経済を学ぶことも出来ます。

現在中国には各省にほぼ一つくらいの割合で仏学院が設置されており、北京にも中国仏学院がありますが、高級仏学院はこれらの上に位置するものです。

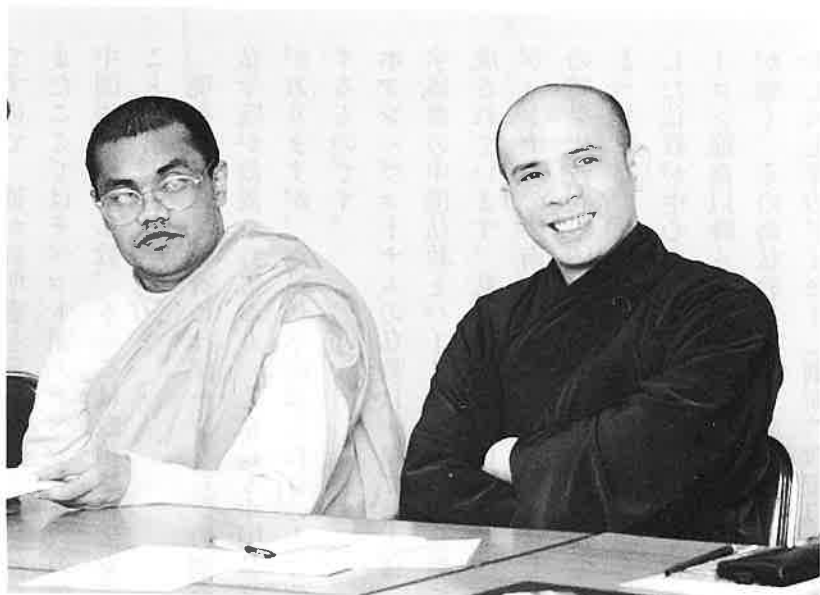
ホアン・ヴェトナムの仏教は一口で言えば、漢字経典の中国仏教とパーリ経典の上座仏教で構成されています。私自身臨済宗に属しています。ヴェトナムの中南部は多くの華僑が移住し、その結果比較的中国仏教、特に臨済系の禪宗が広まっていますし、北部は道教や在来信仰と習合した仏教が中心となっています。一九七五年サイゴン陥落以降八〇年代前半までは、社会主義が強くなり、その為仏教はふるいませんでした。しかし八七年のドイモイ（刷新）政策以降、多く

の寺院が開放され、仏教は往時の繁栄を取り戻しました。最近では「乞食宗」(The Mendicant Sec)が有名です。この宗は上座仏教系ですが、一九六六年から一九八〇年まであった乞食サンガ(the Mendicant Sangha)をミン・ダン・クアン長老(Patriarch Minh Dang Quang)が一九八〇年に再興、拡大したものです。

引田・社会主義が強い時は僧侶の方たちは大変苦勞されたのでしようね。ホアン・そうです。出家するのもままならず、私も政府に生まれながら、やっとの思いで僧侶になることが出来ました。

ギヤナ・バングラデーシュはイスラム国家ですが、チッタゴンを中心に約人口の一パーセントの仏教徒がおります。僧侶の数は一千名くらいでしょう。ただ寺院の数は遺跡を含めると僧侶の数より多いと言われています。もともと私の国にはネパールの金剛乘（ヴァジュラ・ヤーナ）





(左)ギャナ・ラトナ・スローモン師、(右)ホアン・トロン・ソー師

に似た仏教の派がありました。ダシヤ・マテ (Dasa Mate) / ティタ・マテ (Tita Mate) / ラームダシヤ・マテ (Rām Dāsa Mate) ですがその後統一されてマテ・ニカーヤ (Mate Nikaya) となりました。しかし現在は、ビルマから移入された上座仏教系のサンガラージヤ・ニカーヤ (Sangharaja Nikaya) が主流になっています。

## 出家の契機

引田：どうもありがとうございます。次に皆さんが出家されたきっかけをお話し頂きたいと思います。ご存じのように日本では親が寺の住職だから自分も僧侶になるんだという、世襲的出家が大半を占めています。これはある意味で仏教のダイナミズムが損なわれる大きな要因ではないかと危惧される現象です。そこで在家出家された皆さんの出家の契機を参考にさせていただきますと思います。

朴・私はもともとキリスト教徒だったんです。教会にも通っていました。ところがある日、一人のお坊さんと道で出会い、そのすがすがしい顔や姿に感動し、これが自分の生きる道だと決心したわけです。突然のことで両親は猛反対しました。それに私は朴家の長男としてこの家を守るように義務づけられておりましたから、両親から出家の許可を得るには大変苦労しました。

鄭・私の場合には父が熱心な仏教信者でしたから、むしろ私の出家を歓迎してくれました。馬祖信仰の影響もあって多くの尼僧がおり、そのことも私の出家は自然でした。

嘉木揚・私の場合には出家することは一族にとって名誉なことでした。叔父も立派なラマ僧でしたし、私の故郷からも多くの高名なラマ僧が輩出しています。

ホアン・ヴェトナムの当時の政治状況からすれ

ば、出家などとんでもないことでしたが、自分の人生をかけられるのは仏教しかないと感じ、出家しました。

ギヤナ・バンングラデーシユでも、現在仏教は迫害とまでは言わないまでも冷遇されていることは確かです。ですからどうして出家したかというより、どのようにして仏教を伝え広めるかのほうに関心がむきます。チッタゴンの大学を卒業してからタイの仏教大学に入ってみて、如何にこの国では研究者や文献が豊富であるかに驚かされました。

## 留学の目的

引田・確かに仏教が広く信仰されている国では、仏教を専門に研究する学者も多いし、文献も豊富に揃っています。日本はその意味で世界に誇れる質と量を備えた国と言えるでしょう。皆さんが愛知学院大学に入学されたのも、このよう

な理由なのでしょうが。

ギヤナ・そうですね。しかも日本は経済的に大きく飛躍しています。アジアから見たら羨望的的です。しかも日本は上座仏教ではなく大乘仏教の国ですから、この大乘仏教と経済発展に何らかの因果関係があるのか、前々から一度調べてみたいと思っておりました。

鄭・私の場合は、前にも申しましたように師が以前正眼寺で修行していましたので、自然に日本に行つて正眼寺で修行しようという気持ちになりました。ただ、正眼短期大学を終え、修行した後もう少し禅のことを勉強したいと思ひ、この大学に編入学したわけです。

嘉木揚・私は日本の密教に興味がありました。チベット仏教は「顕密双修」と言われますが、やはり密教の方が中心です。空海が請来したる密教が日本どのように展開していったのか調べたいと思ひ、留学を決意しました。幸ひ私の

知り合いが台湾におり、学費の援助もお願いできたので日本に来ることが出来ました。

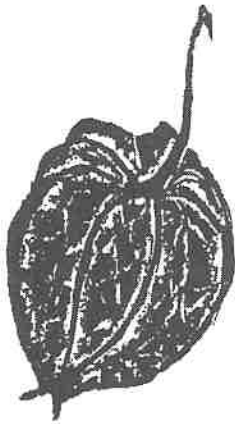
朴・韓国の仏教研究はどちらかと言えば漢訳仏典が中心でパリー仏教は余り発展していません。そこで私の友達数人となんとかパリー仏教研究を韓国で発展させようと、それぞれイギリスのオックスフォード大学、インドのプーナ大学、日本の東京大学と愛知学院大学に留学して、パリー語・パリー仏教の研修に努めようと決意しました。ですから鄭さん同様留学の目的はかなり明確で限定されたものでした。

ホアン・私の場合はもう少し漠然としています。社会主義が私の国の政治の中心にあった時、従来の仏教研究はかなり衰退しました。最近もう一度仏教研究を發展させたいという欲求が信者の中に起こり、大寺院の中のヴェトナム仏教研究などはかなり活動を開始しています。やはり海外に出て仏法の伝統を学ぶことが必要不可

欠であると考えられるようになりました。私は、その所属する教団の性格上、臨済系の禅宗の研究が進んでいる日本に留学したいと願うようになりました。

引田…それぞれ異なった動機で留学してこれたわけですが、仏教の勉強と言っても、どれか一つの分野に限定し、母国ではどうしても無理だから、専門の学者を頼ってたまたま日本に来

られた人と、もっと一般的に日本の仏教全般にわたって、言い替えればこちらの仏教学者と人的交流を深めることを目的として来られた人との、二種類に分類されるようです。何れの場合にしても、私たち日本の仏教学者は真摯な気持ちをもって、皆さんの情熱に応えなければならぬことを再認識いたしました。今後ともより一層の学問の研鑽を積まれることを期待します。



■伊藤三七庵先生追悼■

驚きと淋しさと残念さが重なり合って

ナリス化粧品 東郷 敏

伊藤先生の訃報に接し、驚きと、淋しさと、残念さが重なり合っています。黒田先生を知られた伊藤先生も、このことを終生のよろこびとされ、誇りに感じておいでだったことと思います。善光寺は、また伊藤先生の作品の発表、展示あまねく知っていたただく場として、伊藤先生の人生そのものが、善光寺と、黒田先生に関わっていたのかもしれない。伊藤総代の善光寺への影響も計り知れないものがあつたのではと察しております。いつも仲良く、ご円満な、ご夫人の悲しみと、御嘆きが観ぜられます。やはり年・月が経ってきているんだなアーと思ったりもします。ご冥福をお祈りいたします。



# 伊藤喜三郎（三喜庵）先生のご逝去

——善光寺檀徒総代——

善光寺檀徒総代・伊藤喜三郎（三喜庵）先生は、平成八年三月三日午後五時四十五分、逝去されました。（行年八十二歳）

葬儀・告別式は四月四日（木）午後一時から、築地本願寺第二伝道会館（東京都中央区）に於いて執り行なわれました。

茲に謹んでお知らせ申し上げます。

善光寺黒田方丈と故伊藤先生のご縁は古く、善光寺開創時から深く関わって来られ、私的には倫子夫人との結婚の仲人もされました。

『成寿』誌上へは毎号表紙絵や文中カット等、独特な絵筆で飾って頂き、読者の皆様からは賛嘆の声が寄せられていました。

伊藤先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。  
なお、次号に先生の特集を予定しております。

近代化が進められて生まれた

# 曹洞宗の「服制規程」

愛知学院大学教授

白鳥山法持寺

川口 高風

## 一 仏袈裟の教え

袈裟けさとは梵語ぼんごのKasavya(カシャーヤ)を音訳したものである。カシャーヤはもと加沙と書き、本来の意味は赤褐色のことで、衣の意味ではない。しかし、インドの僧団の衣が青黄赤白黒の五正色を避けて雑色ぞうじき、壞色えじきを用いたことから衣の意味となり、文字も「衣」をつけて袈裟と書

かれるようになった。

袈裟の種類は五―二十五条の奇数の条衣である。奇数は陽の数として発展化育のもととなるためであり、また、仏の教えは永遠に割り切ることができないものであるからである。そして小さい布を五筋つなぎ合わせたのが五条衣、七筋なのが七条衣といわれる。九条以上の大衣も同じようにして作られている。その形は、田んぼが整然あつらと畦あぜで仕切られた形と同じで、それに



ついでには『十誦律』卷二十七にある通り、釈尊が阿難陀に命じて作らせたのである。

このようにして細かい布をはぎ合わせて作った袈裟が、今日の僧が着ている袈裟である。大きな布があつても、いったん小さく切つてから縫い合わせる。そのため、どんな立派な布でも世間的価値がなくなり、これを見る人の欲心をそそらない。袈裟は世間的価値をなくすことによつて、人間の執著心や欲心を離れさせるものなのである。

袈裟の衣財についていえば、仏弟子は本来、財産をもたないものであるから、信者の布施を受けたら、世間の人がいらなくなつて道端やほきだめに捨てられた布を拾ひ、それをよく洗つてつづり合わせて作るものであつた。このほきだめから拾ひ集めた布の使える所だけとつてきれいに洗い、はぎ合わせ、刺し合わせて作った袈裟を糞掃衣ふんぼういといい、これが袈裟の中の最上の

ものとされる。その他に、信者から布施としていただいた布も清浄である。こうして得た衣財は、絹であるとか木綿であるとか麻であるとかという区別にこだわることはない。本来、ほきだめなどに捨てられたものを拾つてくるのであるから、衣財の世間的価値とは無関係なのである。

このように人間の執著心を離れ、人の捨てたものの良い所をとつて袈裟を作り、仏道を修行するといふ仏教者の生き方は、現代の世の中にも生かされるものである。使用にたえられるものはできるだけ手を加え、物の生命を生かすことが釈尊の教えである。また、現在あるものを最高に生かして使うということは、決して物の世界だけのことではない。この世に生きとし生けるもの、自他ともに長所あれば短所もある者どうしであるが、その良い所を生かして最高に立派な生き方をするようにというのが仏袈裟の

教えなのである。

## 二 袈裟研究書

江戸期において曹洞宗の最初の袈裟研究書は、元禄十六年(一七〇二)に常州の大雄院の徳巖養存とくがんようそんが著わした『仏祖袈裟考』である。その『仏祖袈裟考』の最初に、

頃日。見ニ苾芻著衣ノ者。有リ称シテ賜紫ト而披ニ紫衣ト者。有リ称シテ宗途ト而著ニ緋衣ト者。或号ニ修多羅ト背上ニ垂レ結ヲ。或ハ頂上ニ立ニ襟角ト及至蠶衣繪服華綺綾羅任セテ意ニ而著ス。是等之式。仏制依ニ宗途ニ而分カ乎。澆季依ニ妄習ニ而異ナルカ乎。僧儀彪ヒウタリ。請示セ一決ケツ。

と、当時の様子が記されている。すなわち元禄期の僧は、賜紫と称して紫衣を被着したり宗門の規則ということで緋衣を着ている。また、袈裟に房ふさをつけたり、襟えりを立てたり、絹物の華麗

さを誇っているという。

それに対し養存は、仏弟子はすべて釈尊、摩訶迦葉まかあせつ以来の規則に従った袈裟を搭かけるべきだといひ、そのために経典や律藏を始め中国における歴代諸家の袈裟に関する説を引用して答えている。

さらに明和五年(一七六八)には、江戸期を代表する宗学者の面山瑞方めんざんずいほうが『釈氏法衣訓しやくしほふうえくん』を著わし、その凡例はんれいに、

- 一 仏身ト同前ノ袈裟ヲツケナガラ小便スル僧ヲ見ル。誠ムベシ。
- 一 袈裟ヲ席ノ上ニテ展縮スルヲ見ル。福寿ヲ滅ズルコト雪ニ湯ヲソ、グガゴトシ。慎ムベシ。
- 一 暑ノ時。律僧ガ衣角ケサノスミニテ額ノ汗ヲ拭フヲ見ル。布トバカリ思フテ帨テヌグヒト同前ニ用フ。カナシムヘシ。

- 一 浴店ユヤニテ五条衣ト俗服ト内裙フシドシト一度ニ脱

デ打カサネテ裸形ニテ湯ヨリアガリテソ  
ノ上ニ坐セシ僧ヲ見ル。言語道断ナリ。



一 金襴ニテ五条衣ヲ製テ掛ル僧アリ。文旨ノ第一ナリ。

一 長キ緒ヲ附テ腰膝ヨリ下ニ著ル。非法ノ僧モアリ。

一 近年ハ洞家ノ僧ガ截交トテ斑襴ノ衣ヲ著ハ非法ハ云ニ及バズ。第一祖訓ヲ味ス。ツ、シムベシ。

とあり、「第九輕侮見」罰訓」にも

今時ハ法服ヲ輕賤スルコト諸宗通ジテコノ弊アリ。禪僧ハ五条衣カケナガラ途中ニテ小便ス。律僧ハ常ニ著タル袈裟ノ角ニテ。熱時ハ額ノ汗ヲ拭フ。京ノ売浴店ニテ見レバ衫ヲ著テ五条ヲ掛シ僧ガ卒ニ来テ先五条ヲ以テ席ノ上ニナゲテ。次ニ俗服ノ帶ヲトキ衫ト一度ニ脱デソレヲ重ネナガラ五条ノ上ニ置テ裸形ニナリ。浴室ニ入り了テ身ヲ拭ヒ直ニ裸形ニテ右ノ重シ衣服ノ所ニ来テ内裙モナシニソレヲ腰ノ下ニ布テ。両膝並テ足ヲフミ出シテ休息

ス。ソレヲ見ル間ニ幾僧モミナソノ通ナリ。といい、当時は諸宗通じて法服を輕賤していたことが述べられている。

では、現代をみてみると養存や面山の指摘されたことが行われており同じ状態といえる。養存、面山らの袈裟研究は現代に生かされていないといっても過言でないため、ここに少し考えてみよう。

### 三 「服制規定」

現在の曹洞宗が教団として成立している根本は『宗制』と『行持軌範』である。『宗制』では「服制規程」において袈裟、直裰、掛絡、帽子、行衣などの服制が規程せられ、被着が資格によって異なることをいう。『行持軌範』では「搭袈裟法」で、袈裟の搭け方、脱ぎ方を解説している。この両書が宗門の袈裟に関する規程であるが、『宗制』も『行持軌範』も明治期に近代化を

進めた政府の政策によつて生まれたものであり、両大本山の政治的争いを解決するための折衷案であつた。しかも短期間に編纂されており、時勢の進展によつて改定されつつ今日まで及んでいる。

明治期は江戸期の寺檀制度がくずれ、神道を中心とする国家を築くために廃仏毀釈が起つた。また、僧侶の肉食妻帯蓄髪<sup>みくしやく</sup>の禁が解かれ、法要以外には平服の着用が許され、苗字も称するこゝとになつた。こうして僧侶の規範を政府の管轄からはずし、各宗派で管長を選定して任職の任免や教師の等級などを行い、各宗派の教規や宗制を決定することになつた。

曹洞宗では明治以前より永平寺、総持寺の三衣紛争などの争いがあり、その解決のために政府は、明治五年三月に両本山の盟約の締結を勧告し、両本山はこれを受け入れて「両山盟約」が締結された。そして十月三十日には、両本山

の碩徳による會議の結果の七条を全国録司に示した。その最初に、宗門の衣体のことが、

一宗僧侶衣体ノ儀自今志趣次第タルベシ。兩本山拜登ノ節タリトモ同様ノ事其他国法山法扨卜唱ヒ一國一山限リノ異論申立間布事。

とある。これによれば志趣次第といひ、両本山拜登の際も同様で、各地方、各寺院の山風を認めて異論を出さないことが布達された。その後、同十二年三月には先の両山盟約の演達と要領を繼承し両本山一体の書面を交換して政府へ届け、さらに全国末派寺院へも布達し、その条約を永世格守すべしとした。その盟約書の第八条をみると、

衣体及行法ハ永瑩清規ノ内各自ノ志趣ニ任セテ遵守セシムルモノナレバ兩山々内ヲ除ノ外何レノ國何レノ寺ヲ問ハズ其制限ヲ立ツ可ラザル者トス。

但衣体行法ヲ異ニスル所以ニ因リ末派ヲ見



ルニ彼我ノ偏執アル可ラズ。

とあり。兩本山の協和的条件が規定されている。

明治十七年八月十日、政府は神仏教導職を廃し住職任免、教師の等級などを各宗管長に委任した。そして新たに、宗制を定めて認可を得るべく官達があり、宗門は宗制の編成に着手し始めた。翌十八年四月、管長の総持寺<sup>あまがみほだん</sup>上<sup>あまがみほだん</sup>棟仙<sup>あまがみほだん</sup>禪師より政府へ宗制を提出したが、この宗制は第一号兩山盟約、第二号本末憲章というように、宗門を統轄する宗務制度のため、具体的な行法は述べられておらず、仏教を布演するために各々の規式を遵守<sup>じゆんしゆ</sup>せよという概論的なものであった。衣体については第二号寺法条規の第十条に、

寺院ノ衣体行法ハ各自ノ志趣ニ任セテ制限ヲ立テザルコト兩本山盟約第八条ノ通りタルベシ。衣体トハ七条以上ノ袈裟ニシテ環紐ノ有無並ニ五条衣掛絡等ヲ云。

とあり、やはり兩本山別々の区々不統一であった。そのため曹洞宗として統一した宗制の衣体制度を作らねばならないところから、滝谷<sup>たきや</sup>琢<sup>たく</sup>宗<sup>しゆ</sup>禪師と畔上<sup>はなの上</sup>棟仙<sup>たけせん</sup>禪師は熟議し、各地方の碩学<sup>せきがく</sup>にも相談して成った諭告<sup>ゆこく</sup>をまとめてみると、

一、五条衣はすべて掛絡<sup>かけら</sup>、七条衣以上は環紐<sup>かんちゆう</sup>なきものを用いる。ただし、七条衣以上は各自の身体の大小に随つて肘<sup>ちゆう</sup>の長短を定め、掛絡は一尺を最小の量として、それより小さいものは受用してはならない。

二、歴代祖師、開山などの伝衣は各寺院伝承の宝物として、環紐があつても改整せず、にそのままよい。ただし、被着受用してはならない。

三、全国末派寺院の衣体改整期限は明治二十一年一月一日限りである。それ以後、改整しない者は、管長が教誡するといふ。ただし、六十歳以上の老僧は自己一身に



限り、曹洞宗務局へ願出れば、旧来のままでよい。

となる。そして同二十一年一月二十日に布達された特許者を見ると三十三名おり、世間用すなわち総持寺流の環付きの七条衣以上を受用することにした人は十三人、掛絡ではない五条衣を受用する者は二十人いた。この三十三人を除く人はすべて五条衣を掛絡、七条衣以上は環紐を廃した衣体となった。なお、歴代祖師の木像や画像にある環は従来そのままにもかかわらず、環を取り除くことが行われたようであった。

このように宗門の衣体は兩本山の合意により制定されたが、それは七条衣以上の袈裟が環紐を廃した永平寺の主張を、五条衣は環をつけた掛絡（絡子）とする総持寺の主張をとった折衷案であることが明らかになる。なお、それともに行持の統一も行われ、『洞上行持軌範』が成って同二十四年一月一日以後に遵行される布達

が出され、これにより衣体と行持法の兩本山紛議は終わったのである。

「服制規程」が制定されたものの、一方では当時の華美な莊嚴を装っている法衣に対し、本来の法衣に帰るべきであるという僧服改正論や洋服を取り入れた実用的な服と葬儀や法要などに着用する儀式服を区別して時機に適應したものに改良を進める僧服改良論なども唱え始められた。「服制規程」は兩本山の折衷案であるところから、本来の仏制とは異なっているものである。そのため本意と異なった宗制に仏制の袈裟の教えをとり入れ、仏制と同じ「服制規程」の実現されることを期待するものである。

(愛知県)



# お袈裟のミステリー

## 正傳衣と如法衣

大本山総持寺祖院單頭

関 口 道 潤

### 一、月に棲むのはウサギかカエルか

そのむかし、「月にウサギが棲んでいる」という説に対し、「いや月にはカエルが棲んでいるんだ」という意見が出て、久しく紛糾したことをご存じだろうか。もちろんこんなことを、現在の小学生に質問すれば、「月にはウサギもカエルも棲んでいないんだよ」という返答が返ってくる

るのに決まっている。このウサギとカエルの意見の対立は結局、科学技術が未発達段階に、予断や空想にしたがって起こされたもので、今日の科学的知識によって、両者ともに誤解であることがわかった。

ところで、これは多分に出家修行者の側からの心持ちだが、私たち佛教徒の信仰の中心には「髪を剃る、袈裟を搭ける、坐禪をする」

という三つの特徴が有る。私は先だって、ボランティア活動の一環でカンボジアのある片田舎に行ってきた。それは私どもの仲間で、カンボジアのある小学校に校舎建設の資金を贈呈したために、その贈呈式が行なわれたからである。

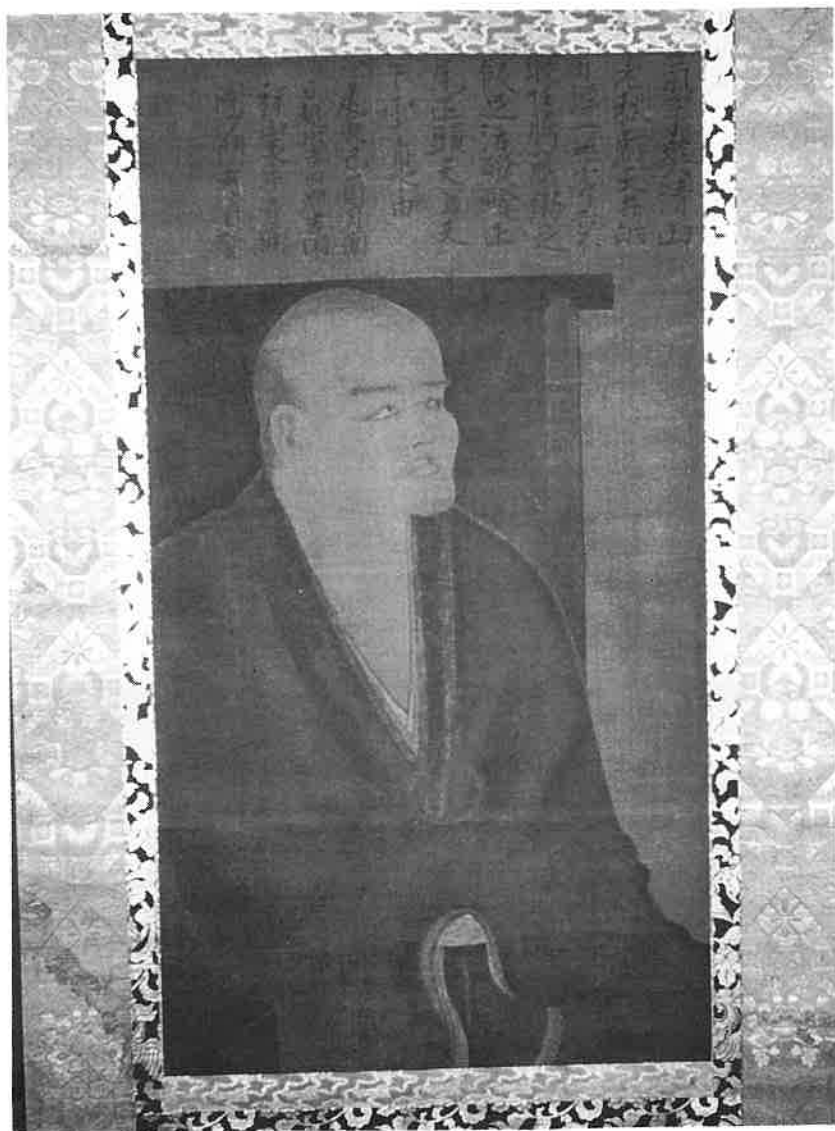
式は先ずカンボジアの僧侶四名が祈禱の読経をし、引き続いて私たち日本側十三人の僧侶も同じく読経した。私は麻地木蘭色の袈裟を、右肩をはだぬぐように搭けて読経したところ、カンボジア側の長老僧は同じように偏袒右肩で応対されたのを見て、特別な言葉こそは交さなかったけれど、日本とカンボジアという国の違い、大乘と上座部との系統の違いを超えた、「共通の佛教徒である」ことを実感したことであった。

## 二、お袈裟は自覚の命を生きるお守り

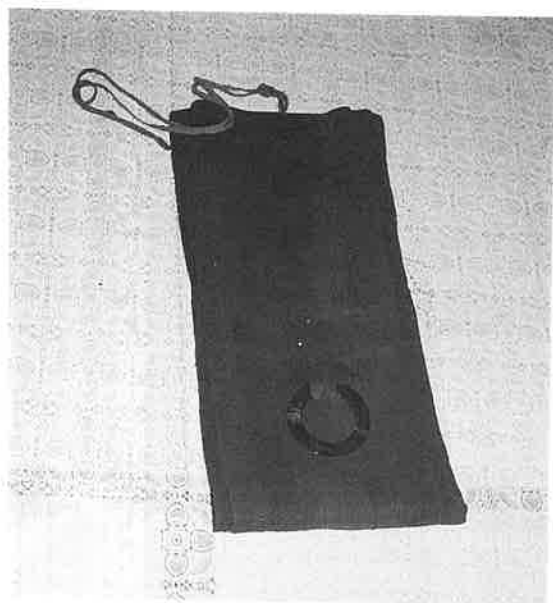
先ほど私は、へ私たち佛教徒の信仰の中心には「髪を剃る、袈裟を搭ける、坐禪をする」とい

う三つの特徴が有る」と言ったが、これは実は道元禪師の『正法眼藏袈裟功德』の巻の「あきらかにしりぬ、剃頭著袈裟よりこのかた、一切諸佛に加護せられたてまつるなり」という言葉を平たく言っただけで、もともと道元禪師の教えである。道元禪師という方は、日本佛教界の中でも異色なくらいに「佛祖正傳」の袈裟を強調し、これを大切にし、その意義を究明されておられる。その道元禪師の宗教的自覚の集大成として『正法眼藏袈裟功德』の著作がある。

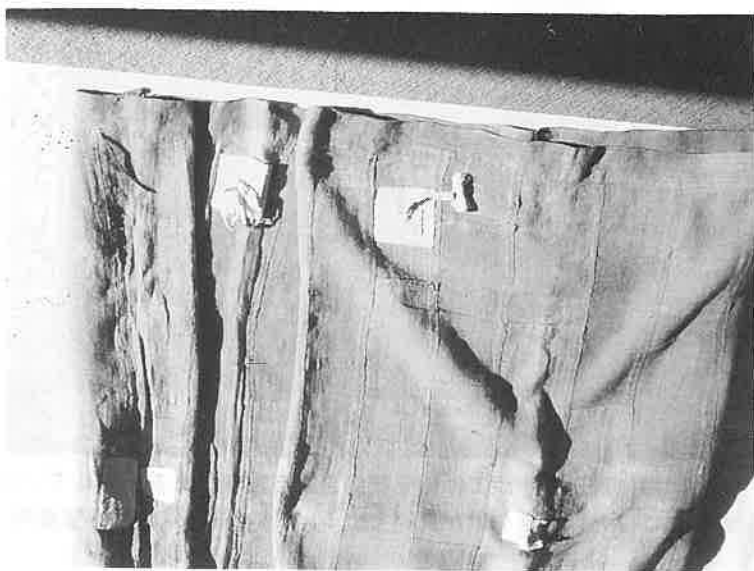
おほよそ、佛佛祖相傳の袈裟の功德、あきらかにして、信受しやすし。正傳まさしく相承せり、本様まのあたりつたはれり、いまに現在せり。受持しあひ嗣法していまにいたる、受持せる祖師ともにこれ證契傳法の師資なり。しかあればすなはち、佛祖正傳の作袈裟の法によりて作法すべし、ひ



この頂相は最近の学説では道元禪師自画自賛像であるとされているが、お袈裟には丸い大きな環が付いている。　（福井県大野市宝慶寺所蔵）



「道元禪師大法衣」と伝承されている二十五条衣  
(愛知県一宮町松源院所蔵)



環付きの袷袋から古規衣に改竄された袷袋  
(福井県大野市宝慶寺所蔵)

とりこれ正傳なるがゆゑに、凡聖人天龍神、みなひさしく證知しきたれるところなり。

この法の流布にうまれあひて、ひとたび袈裟を身體におほひ、刹那須叟も受持せん、すなはちこれ決定成無上菩提の護身符子ならん。  
〔正法眼藏袈裟功德〕

この言葉を一応平たく訳してみよう。

インドのお釋迦様から伝えられたお袈裟の功德は実は具体的であつて、これを信じて使わせていただくことは明解だ。なぜならば師匠から弟子へ、弟子からその弟子へと、贈与され伝えられてきたお袈裟の实物見本が現に存在しているからだ。そもそもお袈裟とは真劍に修行しあつた師匠と弟子が、その自覺の人生を同じく生きようと願ひ、その確乎とした信念が醸成されたとき

に、その証明として伝授されたのだ。それゆゑに、お袈裟はお釋迦様が直接示された作り方によつて、作らなければならぬし、そうでなければお釋迦様、歴代の祖師方から正しく伝えられたものと言ふことができないうし、その伝承の歴史については心あるものなら誰でも知っている。私たちは、現在そうしたお袈裟が伝承されている世界に生まれることができたのだから、たとえ東の間の、仮初の着用であつても、それを身に纏つたことそのものが、既にかげがないこの生命を、自覺の命として生きている、—いわゆる佛道の大切なお守りとなっているのである。

この翻訳は古典文法上はあまり嚴密なものではなく、多少私自身の理解を含めたものであるが、現代人にはそれなりに理解しやすい部分も

「道元禪師大法衣」と共に襲藏される孤雲懷奘禪師像（愛知県一宮町松源院所蔵本より複製）

永平二年懷奘自贊

永平二年懷奘自贊

未破草鞋見本身

從來赤脚學雲步

人中第一極非人

深業所感醜陋贊





袈裟の環が塗りつぶされた寂圓禪師頂相（孤雲懷奘禪師像とも言われている）  
（福井県大野市宝慶寺所蔵）



あるかも知れない。

月に棲むウサギとカエルの話から『正法眼藏袈裟功德』へと展開した私の文章は、誰がどう見ても飛躍が大き過ぎるし、まったく関係の無い話をしてるようにさえ見えることだろう。

しかしもう一度冷静に道元禪師の「佛祖正傳の袈裟」に就いて、その主張を眺めて行くと次第にその関連性が浮かび上がってくるものと思われる。先ほど私はカンボジアの僧侶が私と同じように木蘭色のお袈裟を偏袒右肩に搭けていたことを、同じ佛教徒共通の衣服として感激したことを述べたが、しかしよくそのお袈裟を較べてみると、私の袈裟が三五肘（肘の長さを四センチとして計算し、丈が三倍の百二十センチ、幅が五倍の二百センチ）程度のものであるのに、カンボジア僧の袈裟は五八肘程の、非常に大きなものであったし、またこちらが麻地に対して、あちらは木綿地、こちらは袈裟のほかに肌着や

下着類の上に纏っているのに対して、あちらは裙子（くんす＝腰ごろも）の上に直に袈裟を搭けていた。つまり、「共通の袈裟を着ている」と喜んだ割りには、「共通でない部分も多かった」のである。賢い読者は既にお気付のことと思うが、道元禪師が「佛祖正傳の袈裟」と呼んで、これこそ釋尊直伝のお袈裟だと信じて受持した道元禪師の信念は、「共通の袈裟を着ている」と喜んだ割りには、「共通でない部分も多かった」という私の体験に似通った部分があったように思われる。

### 三、古規復古運動と如法衣の問題

今までの記述を整理すると道元禪師が、非常に大切に、「これこそお釋迦様が示され、自身でも用いられた」と思っていたお袈裟は、実は必ずしもお釋迦様のお袈裟と同じではなかった。——ことに最近のように科学的な解明方法

が歴史の謎に深く挑む時代になると、従来の常識が音を立てて崩れていくのは、お互いの現代人が体験している通りである。

このように道元禪師のお袈裟そのものの歴史的な位置づけとは別に、我が国の江戸時代に、「道元禪師の用いたお袈裟と、現在の曹洞宗僧侶が用いているお袈裟は別なものであるから、道元禪師時代のお袈裟に戻さなければならぬ」という考え方と、そのための運動が展開されたのを思い出していただきたい。それは通常「袈裟復古運動」と呼ばれている。ここで「袈裟復古運動」の主張と推移に就いて少しばかり眺めてみよう。

『法服格正』という書物がある。これは江戸時代の半ばころ、尾張の黙室良要という僧侶が著した書で、少しでもお袈裟に興味を持つ人は、必ず目にするものである。その本の冒頭にある西有穆山禪師の序文は有名だ。

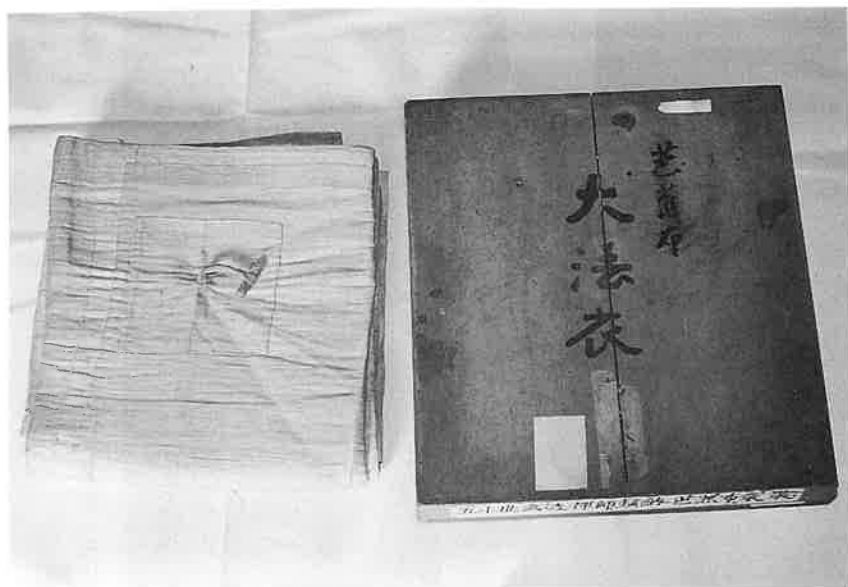
中古永平玄透禪師、古規の陵夷を慨き、之が恢復を圖るに、先ず三衣を格正せり。此の時に當り、一宗暮然として輒く隨はざる者、焉に多し。尾州萬松寺珍牛和尚、腕を扼ひて之を翼贊し、革弊論一冊を著すに、舉國稍や古に復せり。

という文章などは、青年時代の私を『正法眼藏』と袈裟の参究、そして永平寺五十世玄透即中禪師の研究へと誘ったことであつた。正直なところ、その頃のわたしは、道元禪師は如法衣を依用しており、宗門の袈裟は徹通義介禪師の頃から次第に変化してゆき、やがて道元禪師の袈裟は失われたという信念を抱いてたが、これは私に限らず、いわゆる宗門の「眼藏家」たちが等しく持った金科玉条でもあつた。ところが資料に基づいて冷静に考証して行くうちに私はとんでもないことに気が付いてしまった。

お袈裟を研究したり、あるいは実際に自分で

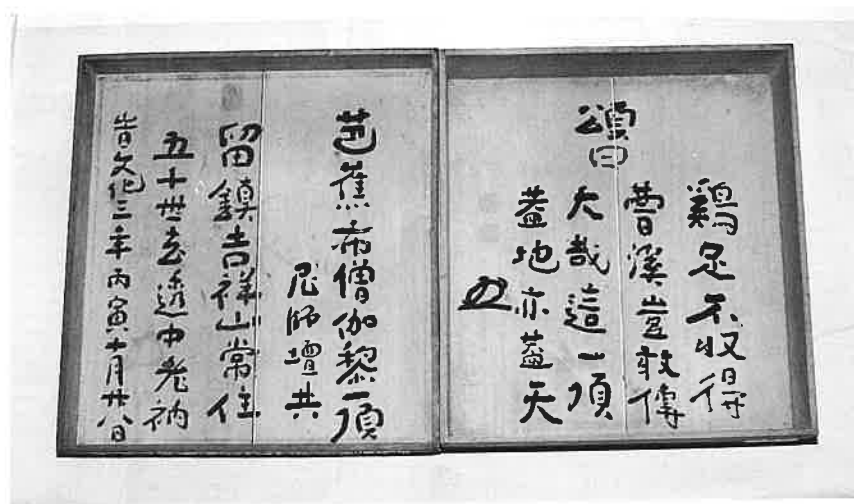
古規衣を搭けた玄透即中禪師頂相（福井県大野市宝慶寺所蔵）





古規復古の証として永平寺室中に留鎮された玄透即中禪師所持芭蕉布の九條衣

古規復古の証として永平寺室中に留鎮された玄透即中禪師所持芭蕉布の九條衣の箱書き





大徹宗令禪師傳衣（九條象鼻衣）を搭けた筆者（石川県門前町覺皇院所蔵）

把針して着用しているほどの人であれば、「如法衣」という言葉は誰でも知っている。これは釋尊が自ら制定されたと信じられている律に随って作られたお袈裟であり、中国宋代に流布した環付の、いわゆる「禪宗袈裟」——これを学問的には「流布衣」と呼んでいるが、——とは一線を画するものであると考えられている。だから青年時代の私は当然のことながら、道元禪師は「如法衣」を主張し、「如法衣」を着用していたと信じていたが、その後、地道に研究してゆくと、我が国の曹洞宗初期教団において如法衣は全く存在しなかつたのであり、道元禪師自身も有環の袈裟を着用していたという、意外な事実が明確となつてきた。如法衣とは律蔵になつた袈裟であり、佛教教団共通の袈裟であると信じられてきたものである。また道元禪師が『袈裟功德』『傳衣』の巻に佛祖正傳の袈裟を受持すべきことを示されているのも事実であるならば、法

孫の私たちはどのような袈裟を受持すべきなのか、これは大いに迷う所であり、そのために私の研究が始まつたのであった。

#### 四、正傳衣↓流布衣↓如法衣↓裁定衣

すでに十数年にわたつてこの研究を続けてきた私は、いくつかの結論を持つてゐる。それは宗門に袈裟の復古運動を始めたのは永平寺五十世玄透即中禪師であり、その主張にそつてやがて如法衣が着用されるようになったことも確認された。かつて宗門の袈裟研究家は『法服格正』の

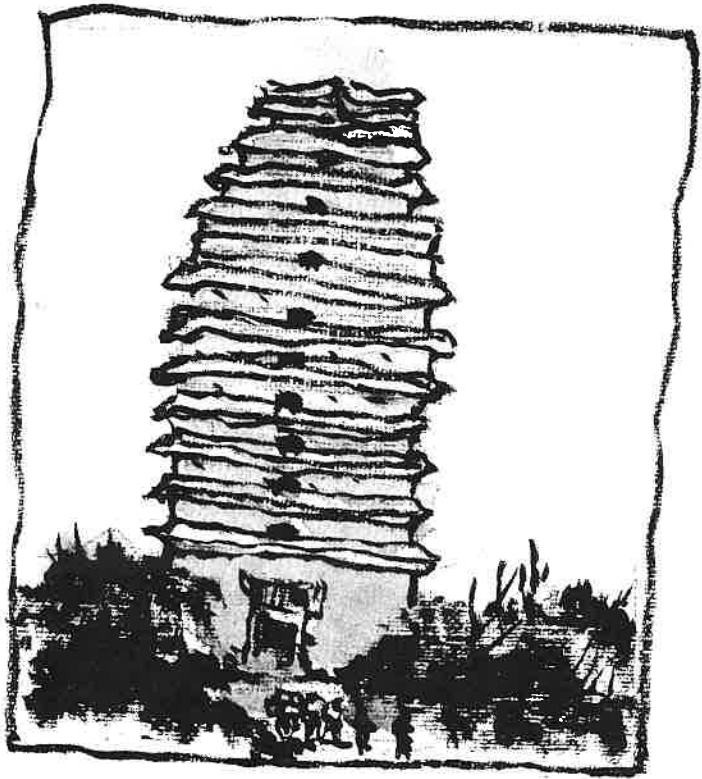
：世に刻画する地蔵や、羅漢や、祖師の像の袈裟に環あるものは、みな愚輩の無智妄作なり。：考るに趙宋の頃よりか一弊を生じて、象牙或は木をもて鉤に換へ：前鉤を右の角に施し、後鉤を中條に施し、鉤紐を改て前牌後牌と云に作るは訛替の甚き痛哭

すべきみ。

という主張に従い如法衣を佛祖正傳の袈裟と考えていた。それはたしかに筋が通っているが、歴史的事実はさらに不可解で、宗門室中の古袈裟を綿密に調査考証して行くと、いずれも環があり、いわゆる「流布衣」であることがわかってきた。ここに一つの興味深い事実がある。それは道元禪師が「佛祖正傳の袈裟」と呼んだお袈裟を、江戸時代における宗門袈裟研究家たちは「如法衣」と呼んだのだということである。しかしおそらくその流布衣の中に「佛祖正傳」を開悟したのが道元禪師であり、如法衣の中に「佛祖正傳」を開悟したのが袈裟研究家なのだと思えるのが妥当であろう。つまり「正傳衣」は道元禪師の大切にした袈裟で、「如法衣」は江戸時代における宗門の袈裟研究家たちの大切にしたお袈裟なのだ。これは余談になるかも知れないが、玄透即中禪師が袈裟復古運動の原点と

して主張した袈裟は、永平寺や、岐阜県関市の徳巖寺などに現存しているが、その作り方はほぼ「流布衣」の形態で縫われているが、袈裟の環だけは外されており、「如法衣」で用いられる鉤紐が付されている。つまり鉤紐の部分だけは「如法衣」であって、袈裟本体は「流布衣」なのである。これらの袈裟は「古規衣」と呼ばれたが、次第に「如法衣」に合流してしまつた過渡的なものであつた。もう一つ余談になるが、現在日本の曹洞宗門の僧侶が通常着用している袈裟は、幕末から明治初年にかけて、永平寺と總持寺の間において、袈裟環の有無に就いて激しい論争が有つたために、両山が協議の上裁定を下し、袈裟環は両山共に外すが、絡子には環を残すことにし、これは「裁定衣」と呼ばれている。

話を元に戻すが、「如法衣」と「正傳衣」には、共通の理念がありながら、具体的には大差





が有り、勢いこの逕庭が江戸時代安政期における永平寺と總持寺との三衣論争へと展開して行き、ついには由緒有る傳衣、開山祖師の木像、頂相にさえ容赦無い改作が断行されることになったのである。

## 五、結びとして

「道元禪師が信じて止まなかったお袈裟は、『正傳衣』なんだよ」という意見に対して、「道元禪師が大切にされたのは『如法衣』なんだ」という反対意見が出て、二百年ばかりの間、曹洞宗教団内で激しく展開された袈裟論争は、最近の科学的手法によって解明されて、「道元禪師は当時の禪宗僧侶が普通に搭けていたお袈裟を『佛祖正傳』と受け止めて搭けられた」のであり、江戸時代中期の袈裟研究家たちが信じていた「如法衣」ではなかった。ただ一つ明快な事実が有る。それは環付のお袈裟は中国禪宗の特

徴であるが、道元禪師の目指された佛道はインドのお釋迦様から正しく伝えられた法門であるとするなら、今日のように科学的手法で具体的なインドのお袈裟や中国、日本の古いお袈裟が解明できる時代にはどんなお袈裟が求められるのか、真剣に考えなければならぬのは事実だ。  
(平成八年三月二十九日總持寺祖院に書く)

### 参考資料

- 『道元禪師研究』伊藤慶道著 大東出版社刊行
- 『佛像圖彙』紀秀信著 国書刊行会刊
- 『畫像須知』中西誠應著 関口道潤所藏
- 『道元禪師傳の研究』大久保道舟著 筑摩書房刊
- 『道元禪師鏡の御影』岩井孝樹著 永平寺「傘松」
- 『玄透即中の思想とその誓願』関口道潤著 復古会
- 『法服格正』黙室纂集 西有穆山刊行
- 『日本曹洞初期教団における法衣の研究』  
関口道潤著

# 「袈裟功德」巻撰述の真意

前東京女子大学教授 水野 弥穂子

(一)

道元禪師が『正法眼蔵』の中に「伝衣」「袈裟功德」の二巻を撰述されて、正伝の仏法と切り離すことのできない袈裟の大切さを説かれたことは、徳川時代以来ひろく知られていました。但し『正法眼蔵』の書誌学的研究がまだ十分でなかったため、「仁治元年(一二四〇)開冬日(十月一日)」という同日の日付を持ちながらも、その内容においても、分量においても、両巻の間

には差があり、道元禪師としては「伝衣」巻は書き改め、多くの書き加えをして「袈裟功德」巻とされたというお気持ちをはっきり読み取ることはなく来てしまったようです。

道元禪師は永平寺へ移られてから、それ以前に撰述されていた『正法眼蔵』の巻々を「皆な書き改め」さらに新しく撰述された巻と合せて全部で「一百巻」にしようとしておいでになった、ということとは、十二巻『正法眼蔵』の最後の巻に当る「八大人覺」巻の奥書に懷持禪師が

書いていらつしやるとおりです。(注1)そして「仏性」巻とか「観音」巻とか「行持」巻とかは、同じ巻名のまま書き改め、書き加えられたものでした。それに対して「伝衣」巻は巻名をも改めて、新草(新しく稿を起こされたもの)とされます。これは「出家」巻のほかに「出家功德」巻があり、「出家」巻の奥書には、このあとに「出家功德」巻があるからこの巻は破棄すべき旨の記述がある(注2)のと同じく、「伝衣」とは別に「袈裟功德」が新しく書かれたものであるという趣旨を読み取るべきだと思ひます。

(二)

「伝衣」巻と「袈裟功德」巻を比べてみますと、「伝衣」巻の記述を全く改められた箇所があります。それは、大衣(九条以上二十五条に至る九種の裏付きの正式なお袈裟)において、長短の段隔の数を示したところです。

「伝衣」巻では、「嫡々正伝する仏訓にいはいは」として、

- |      |       |         |
|------|-------|---------|
| 九条衣  | 三。長一短 | 或。四。長一短 |
| 十一条衣 | 三。長一短 | 或。四。長一短 |
| 十三条衣 | 三。長一短 | 或。四。長一短 |
| 十五条衣 | 四。長一短 |         |
- とあります。

「袈裟功德」巻では『根本説一切有部百一羯磨』(卷十)を引いて、

- |                 |       |
|-----------------|-------|
| 九条、十一条、十三条は     | 両。長一短 |
| 十五条、十七条、十九条は    | 三。長一短 |
| 二十一条、二十三条、二十五条は | 四。長一短 |
- と示されています。(注3)

次に具体的に図(法服格正による)を掲げておきます。

道元禪師が中国に行かれた当時、禪門では九条や十一条、十三条を三長一短にしたり、四長一短にしたり、十五条を四長一短にしたりする

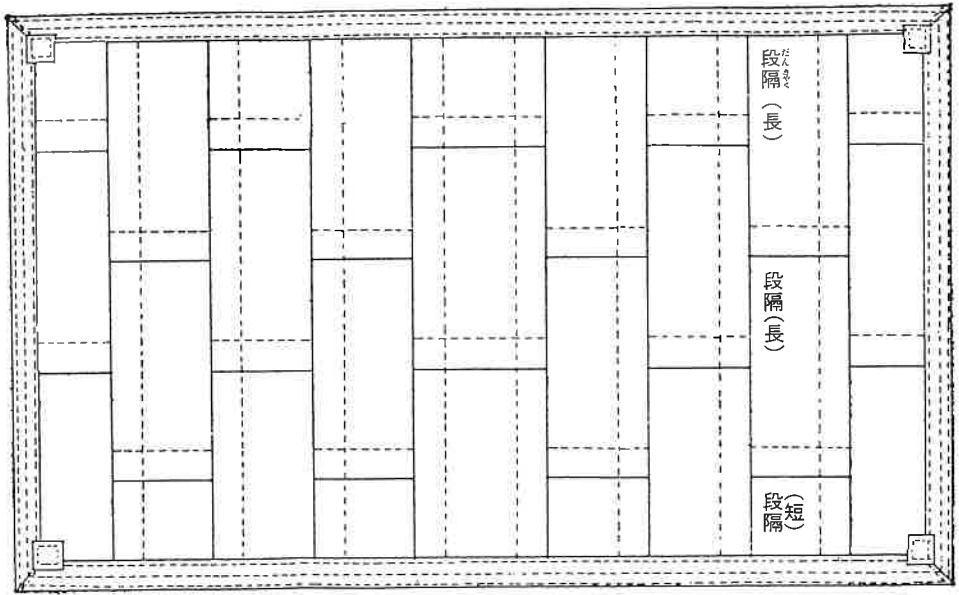


図1 九条衣 両長一短

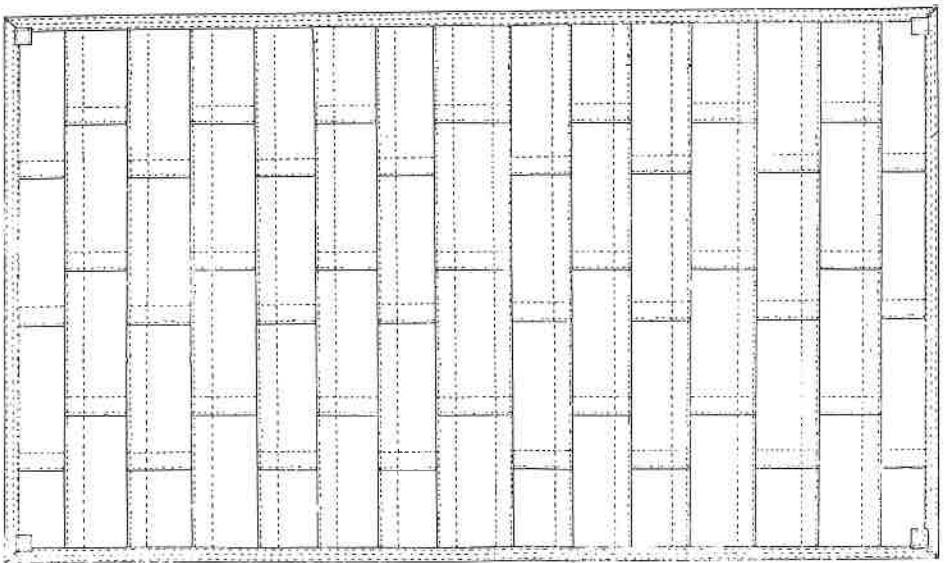


図2 十五条衣 三長一短

ことが行われていたようです。恐らく、禪門は  
両長一短の七条を搭けて坐禪するのが原則でし  
たから、九条以上の大衣は三長とか四長であろ  
うということになっていたのだと思われまます。

こういうことは律文にないことですから、律学  
の専門家元照がんじまう（二〇四八—一一一六）は、その  
著『仏制比丘六物図』（一〇八〇年成立）の中  
で、

今時の禪門、多く九条を披きるに、或いは三  
長四長、意に随つて而も作る。此れ非法な  
り。

と言つて非難しているのです。

元照は、唐の南山道宣（五九六—六六七）の  
律学を学び、道宣の『四分律行持鈔』の注釈『四  
分律行持鈔資持記』を著わしたのをはじめ、南  
山流の律学を伝える一方の大家として、中国で  
も日本でも大きな影響力を持つていました。特  
に袈裟に関しては、『仏制比丘六物図』の説が専

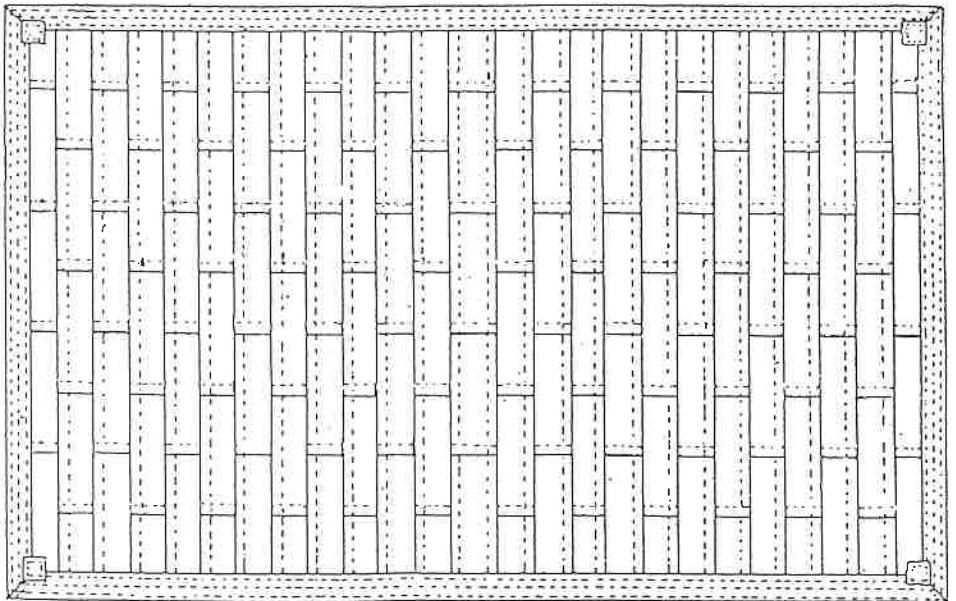


図3 二十五条衣 四長一短

ら行われていました。

『仏制比丘六物図』は、駒澤大学にも、「天正十八年（一五九〇）庚寅八月三日写功畢」という奥書のある写本がありますが、そのもととなつた本は、寛元四年（一二四六）泉涌寺の僧道玄が入宋して伝えた旨の跋（あとがき）がありますから、道元禅師が深草の興聖寺から永平寺へ移られたころには日本に伝えられていたかと思われれます。

多分、道元禅師が「伝衣」巻をお示しになつたころは、まだ『仏制比丘六物図』は御覧になつていなかつたのではないかと思われれます。永平寺に移られてから、この書を御覧になると、そのままには済まされなくなつたと思われれます。あたかも永平寺に一切経が施入され、道元禅師はかつて閻蔵二回の経験がおりになりましたから、水を得た魚のように、三蔵の記録と、正伝の袈裟との関係を探究されたと思われれます。そ

の結実が「袈裟功德」巻であり、袈裟の種類、条数等については『根本説一切有部百一羯磨』の説が、正伝の袈裟と一致することを発見されたと思われれます。「仏法は有部すぐれたり」（「供養諸仏」巻）というお言葉も、こういうところから出てきたと思われれます。

(三)

このようにして正伝の袈裟と三蔵の関係を確かめてみると、『仏制比丘六物図』の中に、仏法の本筋とかけ離れた説があり、しかもそれがひろく世に行われていることを見のがすことができなくなつたと思われれます。

「袈裟功德」巻には、次のお言葉があります。正伝の袈裟といふは、少林（菩提達磨尊者）曹溪（六祖慧能禅師）正伝しきたれる、如来の嫡々相承なり。一代も虧闕なし。その法子法孫の著しきたれる、これ正伝袈裟



なり。

唐土の新作は正伝にあらず、いま古今に西天よりきたれる僧徒の所著の袈裟、みな仏祖正伝の袈裟のごとく著せり。一人として震旦新作の律学のとものがらの所製の袈裟のごとくなるなし。くらきともがら、律学の袈裟を信ず、あきらかなるものは抛却する（なげすてる）なり。

——正伝の袈裟のほかに、「唐土（中国）」で新しくつくりはじめられた「律学の袈裟」があるが、それは信じてはならない、と言っていらつしやるのです。

このほかにも、  
……しかあるに、いたづらに西天（インド）を本（てほん）とせず、震旦国にして、あらたに局量の小見を今案して（思いついて）仏法とせる、道理しかあるべからず。しかあればすなはち、いま発心のともがら、

袈裟を受持すべくは、正伝の袈裟を受持す

べし、今案の新作袈裟を受持すべからず。

というお言葉があつて、中国で新しく考え出して作るお袈裟を受持してはならないと、くり返し言われます。

それでは、その「震旦国での今案の袈裟」とはどういうものだったのでしようか。その実は徳川時代以来の眼藏家も全く気がつかずに、最近まで来てしまつたのでした。

『仏制比丘六物図』には次のような記述があります。

次に重法を明かさん、然も重複の相、諸出不同なり。若し多論に準ぜば、重縫の三衣、縁有らば摘き分けて持ち行くべしと、此れに拠れば、但だ是れ全衣合せ綴せり。祖師の著たまふ所も亦た之に殊ならず。（原漢文、以下同）

——次に大衣の裏のつけ方を明らかにしよう。



しかし、この裏のつけ方は、文献によって同一ではない。若し多論(薩婆多毘尼毘婆沙第四卷)に準じて言えば、そこでは、「裏付きの三衣は、事情によつては裏をはがして、表だけ持つて行ってよい」と言っている。(多論の)この記述によれば、袈裟全体に一枚布の裏をつけて、とじ合せたものと考えられる。祖師(道宣)が著けていた袈裟もこれと同じである――。

仏弟子は三衣を受けたら必ず身から離さず持つていなければならぬことになっています。もし、三衣を離れて他所に一泊すると「離衣」(袈裟から離れて他宿した)という罪を犯すことになるのです。しかし、裏付きの大衣は重いので、年とつた比丘や、雨にぬれてしまった場合は、持ち歩くのが大変だったのです。そういう時は、特別に裏をはがして、表だけ持つて行けば、不離衣が守られるということになりました。そして、全面に一枚布の裏をつけると

いうことは、道宣もその通りにしていた――と言っています。

ところが次に、

感通伝に至つて、天人方て別製を示すに、人多く之を疑ふ。今為に具に引くべし。とあります。

『感通伝』というのは、道宣が唐の乾封二年(六六七)二月に撰述した書で、道宣時に七十二歳、その年の十月には世を去ります。『感通伝』からの引用が次の記事です。

彼れ(天人)云く「大衣の重作、師、比こひじょう之を行へり。然るに葉の下に於いては乃すなわち三重なり、豈に然ることを得んや。」

即ち其の所作を問ふに、便すなわち余が衣(袈裟)を執つて以て之を示す。此の葉相は稲田の脛じようきよう疆を表はす。割截せる衣段を以て裏に就けて之を刺す。葉を去ること麩麥こうばくばかりなり。

此れ則ち條の内は田を表はし、葉の上は渠の相を表はす。豈に然らざらんや。今は則ち通じて布縵を以てす。一には割截に非ず、二には又多重なり。既に本制に非ず、著々の失無きに非ず。

——「彼れ」というのが韋駄天の部下の天人です。その天人が、「大衣の重作(裏をつけること)は、あなた(道宣)がずつと行つて来たところでは、しかし、(一枚布の裏をつける)と葉のところは三重になります。それはいいことではありません。」と云うのです。

そこで道宣が「それではどうすればいいのか」と尋ねると、天人は、道宣の袈裟を手にとつて教えました。「この葉のところは稲田の膝疆を表わします。そこに小さく裁断した布を裏から当てて刺すのです。葉との間は麩麦ほどのすきまを置きます。こうすれば、葉条との間の細いすきまは灌漑水の流れる渠を表わします。そうで

はありませんか。現在は裏は布縵を縫いつけるだけです。それでは、袈裟は割截であるはずなのに、裏が割截になっていません。それから葉の下は三重になっていて、本来の制にあっていません。そういう袈裟を着ると、着るごとに本制に違反するという欠点が出てきます」——と、こんなふうに言つたといふのです。

この『律相感通伝』という本はどういう本かと言いますと、その成立年次は前掲の通りです。「感通」という言葉は、道宣の撰した『続高僧伝』に「感通編」があり、不思議な能力をあらわしたり、予言をしたりした僧の伝記を集めてあります。『律相感通伝』はいわば、道宣自らの感通編ともいふべきものです。七十二歳で亡くなる二月ごろから、天人がしきりに自分のところに現れるようになったと言つて、天人との問答が記されています。

この天人というのが、韋駄天の使者で、王蟠

とか、羅氏とか、費氏とか、陸玄暢とか、黄瓊とか、中国風の名を名のるのです。その中の陸玄暢が、さきに引いた大衣の裏に一枚布をつけるのはおかしいと言って、段隔の二コマごとに小さく切った布をつける方法を教えたのです。道元禅師の読書力はもちろん『律相感通伝』にまで及んだはずで、この段隔の一コマごとに小さい布の裏をつけることは、宋代すでに盛んに行われていたようです。

「伝衣」巻では、

あるいはいふ、天人のをしへによつて伝衣をあらたむと。しかあらば天仏をねがふべし、又天の流類（なにかま）となれるか。仏弟子は仏法を天人のため宣説すべし、道を天人にとふべからず、あはれむべし、仏法の正伝なきは、かくのごとくなり。

と強い言葉を使って居られます。

『六物図』の本文をよく読んでみますと、元

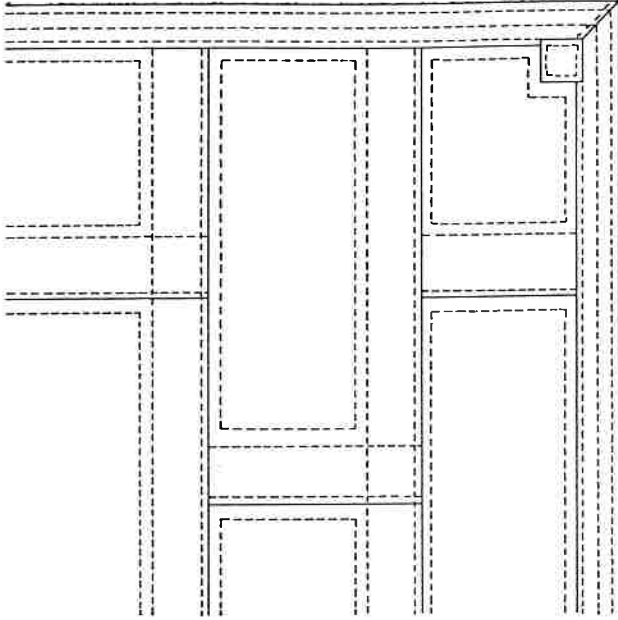
照自身、道宣の袈裟も『薩婆多論』の通りの裏のつけ方だったと言っていますし、天人の説と云うことは、中国でも「人多く之を疑ふ」と言っているように、すぐには信用されなかったのです。それが、いつのまにか、一番手のかかるものが一番尊いものということ、広く行われるようになったのです。

道宣のところには現われた天人が、中国風の姓名を名のったり、インドからやってきた天人と、インドに行ったことのない道宣が、どんな言葉で問答したのかということに疑問を持った人に、『仏門衣服正儀編』（享保十一、一七二六成立）の鳳潭があります。

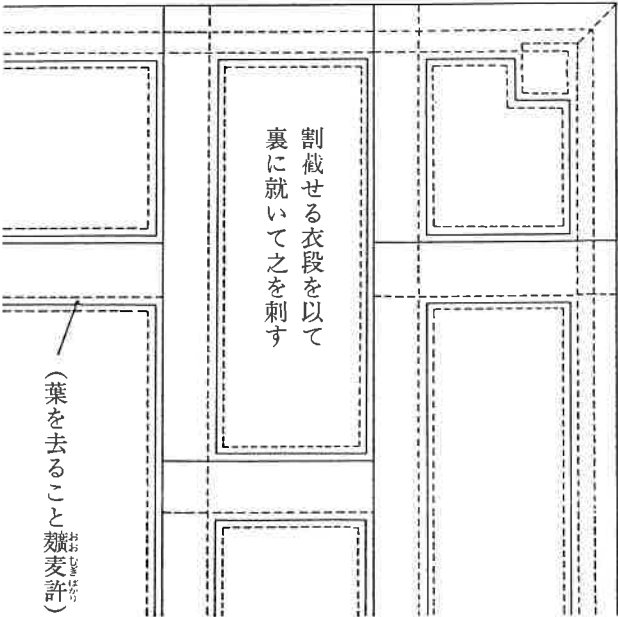
『僧服正檢』（享保十六、一七三一成立）の光国は、一枚布の裏をつけて葉の下が三重になるというのなら、葉との間に麩麦ほどの間をあけて裏をつけるとなると、そこは一重ではないか、大衣は事情があれば摘き分けて持って歩き、帰

「律相感通伝」に説く大衣の重法

〈表〉



〈裏〉



つてから又綴じつけておけばいいというきまりがあるのに、何十枚の小片を取りつけたりはずしたりすることは、不可能ではないか、田相は、一見して仏弟子であることがわかるために工夫されたものであるから、裏に田相がないのは何らさしつかえない、等のことを言っています。

しかし、道宣、元照の律学界での盛名は高く、『仏制比丘六物図』は袈裟の基本を説く書と見なされた結果、この大衣の重法は、そのまま黙室良要の『法服格正』（文政四、一八二二成立）に引き継がれることになります。

『法服格正』では次のように言っています。

然るに大衣の重作（裏のつけ方）、古今三の別あり。

一は通布縵（一枚布）をもて裏となす。縁あらば摘きき分けて遊行す。薩婆多云く、重縫の三衣、もし縁あらば摘きき分けて持ち行き、異処いこに到るを不離宿と名づく。

一は二衣相合して裏をして相著せしめ、両面ともに衣相をして現まぜしむ。

一は割き截せる衣段をもて裏につけて、これを刺し、葉はを去ること大麥ばくほど許ばかりに田渠を表はす。

これその儀なり。

原文は漢字カタカナ交り文で、改行もしてありませんが、ここではカタカナをひらがながに直し、読みやすく改行しました。

『法服格正』は、万仞道坦等の古規復古運動の一翼をにない、眼藏家の間で尊重されました。

大衣は九条でも二十七の段隔ががあり、十五条で六十、二十五条では百二十五あります。その一コマ一コマに裏から布をあて、葉との間を3ミリほどあけて却刺きやくするのは、時間もかかりませんし、又裁縫の技術にもすぐれていないとできません。そして事情があれば裏はとりはずして持つて歩くということもできるものではあります。

せん。

しかし、葛城かつらぎの慈雲尊者のお寺である高貴寺には、九品の大衣のすべてが見事にこの縫い方で伝えられています。慈雲尊者がお弟子に縫わせたお袈裟は千衣に上ったといわれますから、もっとたくさんの大衣がこの縫い方で縫われたと思われます。それは、そのお宗旨の祖師である道宣を尊び、元照の言葉に忠実であろうとした人々の真心が、このような気の遠くなるような手間のかかる大衣も実現させたのです。

そういうわけで、お袈裟なら律宗、律宗なら『六物図』の説と思込んでいた人々が、こういう作り方のお袈裟を一番ありがたいものと思つて取り組んだのも無理のないことなものでした。現在、由緒あるお寺で、大切に護持されている大衣の多くはこの作り方に依っています。それは何よりも、縫った人も、縫わせた人も、並み一通りでない道心があつて作られたことに間

違いありません。ただ、禪門は「衣鉢をつぐ」という言葉もあるように、釈尊以来、中国では菩提達磨尊者以来、正伝のお袈裟と応量器が伝わることによって正法が伝わってきたことになっていきますから、お袈裟は正伝の袈裟でなければなりません。

道元禪師が、

いま発心のともから、袈裟を受持すべくは正伝の袈裟を受持すべし。

と言われるように、これからお袈裟を受持しようとする時は、こういうむずかしい縫い方をする必要は全くないわけです。

おほよそ仏々祖々相伝の袈裟の功德、あきらかにして信授しやすし、正伝まさしく相承せり、本様（本来のありかた）まのあたりつたはれり。

というお言葉の通り、現在は正伝の袈裟の実体はほとんど明らかになっていますから、それに

従つて縫えばいいのです。

ついでに申しますが、道元禪師は正伝の袈裟を何よりも尊ばれますが、それ以外の袈裟を排除するようなことは言われません。袈裟は「仏弟子の標幟」ですから、

仏化のおよぶところ、三千界いづれのところか袈裟なからん。

というわけです。しかし、

……嫡々面授して仏袈裟を正伝せるは、ただひとり嵩嶽の曩祖（菩提達磨尊者）のみなり、旁出（正嫡でない人）のところには仏袈裟はさづけられず、二十七祖の旁出、跋陀婆羅菩薩の伝、まさに肇法師におよぶといへども、仏袈裟の正伝なし、震旦（中国）の四祖大師、また牛頭山の法融禪師をわたす（済度した）といへども、仏袈裟を正伝せず。

と正伝を強調しながらも、

しかあればすなはち、正嫡の相承なしといへども、如来の正法その功德むなしからず、千古万古みな利益広大なり。

と言われます。そして重ねて、

正嫡（として）正伝せらん（正伝している袈裟）は、相承なきとひとしかるべからずと言われるのです。

また、お袈裟は粗末な布が基本ですが、金襴等の豪華なものがふえているのも事実です。それについては道元禪師は次のように言われます。袈裟をつくるには麁布（そまつな植物繊維の布）を本（原則）とす。麁布なきがごときは細布（植物繊維の上等な布）を用ゐる。——そまつな布がなければ上等な布でもいいと言われます。さらに、

麁細の布（そまつな布も上等な布も）ともになきには絹素をもちゐる。

ここにはじめて絹織物が出ます。「絹素」は、絹





織物でも平織りのものです。

絹・布ともになきがごときは綾羅等りょうらをもち  
ある、如来の聴許なり。

——ここに至つて綾（あやおりもの）羅（うすもの）という上等な絹織物が出ます。豪華な袈裟も仏弟子なればこそ搭かけるので、そまつな布がないから、ああいう高価な織物をお袈裟にしていると思えばいいのだ——とおっしゃっているのです。

(五)

『正法眼蔵』「伝衣」「袈裟功德」の両巻ともに、その最後に、中国の天童山で、毎朝の修行の始まるたびごとに、堂内の修行僧が、頭に袈裟を載せて、

大哉解脱服 無相福田衣

被奉如来教 広度諸衆生

という偈を唱えて敬う姿を見て感涙を流した話

が語られます。

ときに予、未曾見の（未だかつて見たことのないものを見た）おもひを生じ、歡喜身にあまり、感涙ひそかにおちて衣襟えきんをひたす。その旨趣は、そのかみ阿含経を披閱ひろくせしとき、頂戴袈裟ちやうたいけさの文をみるといへども、その儀則いまだあきらめず。いままのあたりみる、歡喜隨喜し、ひそかにおもはく、あはれむべし、郷土（日本）にありしとき、をしふる師匠なし、すすむる善友あらず。いくばくかいたづらにすぐる光陰ををしまざる、かなしまざらめやは。いまの見聞するところ、宿善よろこぶべし。もしいたづらに郷間（日本国）にあらば、いかでかまさしく仏衣を相承着用せる僧宝に隣肩することえん。悲喜ひとかたならず、感涙千万行。

と言われます。そして、その次に、

ときにひそかに発願す、いかにしてかわれ  
不肖なりといふとも、仏法の嫡嗣ちやくしとなり、  
正法を正伝して、郷土の衆生をあはれむに、  
仏祖正伝の衣法を見聞せしめん。  
と言われます。

道元禪師が発願して、「仏法の嫡嗣」となり、  
「正法を正伝」しようと思われたのは当然です。  
そして「郷土（日本国）の衆生をあはれむ」に  
は、みんなに袈裟をかけた坐禪をさせようとお  
思いになったのかと、私は思いましたが、そう  
ではないのです。

仏祖正伝の衣法を見聞せしめん。

——この「衣法」という言葉が、袈裟と仏法と  
を切り放せないものとして表現した言葉です。

正伝の仏法は、正伝の袈裟を見たり聞いた  
するところから始まるとおっしゃるのです。

正伝の袈裟に出あい、正伝の袈裟を縫って坐  
禪するということは、日本中の人に望むわけに

はいきません。しかし、お釈迦様からまっすぐ  
に伝わり、歴代祖師れきだいそしが著けられたお袈裟は今現  
在もあるということ聞かせ、あるいは見せる  
ことはいつでもできます。そこから、正伝の仏  
法のあることを日本中に知らせることができ  
とお考えになったのです。

このあと、「伝衣」巻では、

かのときの正信、ひそかに相資することあ  
らば、心願むなしかるべからず。いま受持  
袈裟の仏子、かならず日夜に頂戴する勤修  
をばげむべし：

と言われます。ところが『袈裟功德』巻では、

かのときの発願いまむなしからず、袈裟を  
受持せる在家出家の菩薩おほし。

とあって、それから、

受持袈裟のともがら、かならず日夜に頂戴  
すべし：

という御文章になっていきます。

「伝衣」巻を書かれた興聖寺のころは出家のお弟子は、当然お袈裟をいただいたとしても、その数はそんなに多くなかったと思われれます。それが、永平寺に移られて、「袈裟功德」巻を書かれたころになりますと、波多野義重以下、在家の弟子も多くなり、みな菩薩戒を受けてお袈裟をいただくようになったことが知られます。それに対して「歓喜するところなり」と心から喜んでおいでになります。『正法眼蔵』の中でも、道元禪師がこんなにも手放して喜んで居られる所はほかにないと思われれます。七百年、八百年後の今日も、正伝の袈裟を正しく縫って搭けることは、道元禪師が一番喜んで下さることと私は信じているわけです。

## 後記

本稿で段隔の一コマごとに裏をつける道宣流の大衣と、正伝の袈裟とは別であるということ

を、始めてお知りになった方も多いのではないかと思います。これについてはすでに川口高風の『法服格正の研究』（一九七六、第一書房発行）にも指摘があり、筆者は『道元禪師のお袈裟』（二九八七、柏樹社）でも述べておきました。が、実際の形の上でどう違うのか、理解されるものが少なかったようです。今回、「成寿」誌でお袈裟の特輯をなさるとのことと、お袈裟の写真が多く集められ、お袈裟のさまざまな形が具体的に示されることと思えます。これを機会に、道元禪師の説かれる正伝の袈裟見聞の功德が日本のすみずみまで行われることを、心から慶賀する次第です。

注一

如今建長七年乙卯解制の前日、義演書記をして書写せしめ畢んぬ。同じく之を一校せり。

右の本は、先師最後の御病中の御草なり。仰せには以前所撰の仮名正法眼蔵等、皆な書き改め、並びに新草具に都盧壹佰卷、之を撰ずべしと云々。

既に始草の御此の巻は、第十二に当れり。此の後、御病漸々に重増したまふ。仍つて御草案等の事も即ち止みぬ。所以に此の御草等は、先祖最後の教勅なり。我等不幸にして一百卷の御草を拜見せず、尤も恨むる所なり。若し先師を恋慕し奉らん人は、必ず此の十二巻を書して之を護持すべし。此れ釈尊最後の教勅にして、且つ先師最後の遺教也。 懷井 記之(原漢文)

注2

右の出家の後に、御龍草本有り。之を以て之を書き改むべし。仍て之を破るべし。

(原漢文)

注3

具寿烏波離、世尊に請ひたてまつりて曰さく、「大徳世尊、僧伽胝衣は条数幾か有る。」仏言はく、「九有り。何を謂つてか九と為る、謂ゆる

九条、十一条、十三条、

十五条、十七条、十九条、

二十一条、二十三条、二十五条なり。

其の僧伽胝衣、初の三品は、其の中の壇隔は両長一短なり、是の如く持すべし。次の三品は三長一短、後の三品は四長一短なり。是の条を過ぐるの外は便ち破納と成る。」

## 糞掃衣

前永平寺副監院 山田康夫

今年四月(昭和六十二年)行われた報恩授戒会に私の大変感激した事が二つあった。その二つ共が十五條の如法衣(糞掃衣)と云うお袈裟にまつわる話である。

私はこの感動的な物語りを是非全国の皆様に紹介したいと思つて筆を執つた次第です。

## ◇長野 池沢さん

既に『中外日報』にも関連記事が紹介されて居るが……。今年一月、私が東京の宗務庁に所用

があり出張した時、横浜の善光寺、黒田武志師の訪問を受けた。師は「山田さん、実は私の良く存じあげている長野の池沢さんと云う方が一年半かかって縫つた十五條の『遠山如法衣』を是非永平寺の大禅師さまに献納したいと思うのですが、是非おとりもち願いたいのです」と云うお話であつた。

「それは有難い事です。早速禅師さまにお取り次ぎ致しましょう」と、この事を上月監院を通じて禅師さまにお取り次ぎいただいたのであ

る。

禅師さまは大変喜ばれて、去る四月二十一日お授戒の前に此のお袈裟をいただき御礼の証に池沢家の御先祖の供養として、「御親香施食」を御親修されたのです。そして、「この有難いお袈裟は私が戴いたと云うよりは永平寺に戴いたと思うので永く本山の重宝として残そうと思う」と仰言られた。

ところで此のお袈裟献納の為、長野県や東京方面より百名余の団参の方が見え、禅師さまのお姿を拜んで唯々感激して居られた。

その晩、池沢さん御夫妻にお目にかかった時、奥様からこのお袈裟を縫うに到った身の上話を伺って私は「一子出家すれば九族天に生ず」と云う言葉があるが、正しく之だなあと深い感銘をうけたのである。

池沢さんの次男である資剛君は中学・高校をトップクラスで卒業、上智大学経済学部を卒業

して日本アイビーエムへ入社。成績は四年間毎年トップの営業マンであったが、ある時、五十億の商談で国産のファコムに値段の点で敗れた。本人にとって大きなショックで、しばらく悩んだ末、「金も要らなきゃ物も要らぬ。俺は人の心が欲しい」と発心して、松代の長国寺に吉田興山師をたよって出家してしまった。

両親の驚き、反対も押切って出家してしまっただので、親の方があわててしまったのである。

時に昭和五十三年七月十一日、資剛君二十六歳の時であった。その年、住職吉田興山師のお授戒が勤まり、その授戒を手伝って居た池沢さんの奥さんが吉田師の師匠沢木興道老師の「十五條糞掃衣」を初めて拝見して、この衣に魅せられ、何うしても把針をしたいと発願して、愛知県一宮市の常宿寺岡本光文尼を訪ね、懇切な指導を戴いて、漸く如法衣を縫うことが出来るようになって禅師さまに献上したお袈裟が九肩

目になると言うのであった。

先ず最初の一肩を出家した吾が子紫山（得度安名）の為に針を把つたと云う。やはり母親の吾が子を思う深い親心に頭の下る思いであった。そして十肩の如法衣の把針を悲願として九肩目を大禪師さまのお袈裟に取りかかろうと思つてゐる時に思いがけなくも素晴らしい衣財の提供者が現われたのである。

元成蹊女学校校長奥田正造先生の茶道の門弟田中清氏より永平寺の禪師さまのお袈裟ならば私の恩師奥田先生より形見としていただいた、黒紋付を是非使つて欲しいと申し出られたのである。

ここで奥田正造先生の経歴を簡単に紹介すると、氏は岐阜県高山の生れ、一高より東大を卒業、成蹊女学校の校長として多くの女子を教育した。法隆寺管長佐伯胤師に師事し、仏教を背景とした茶道により婦徳の養成に志し独特の

茶道を大成して、特に道元禪師の『典座教訓』を読み深く皈依された方である。誠に最適の衣財に巡り会い、池沢みなと大姉の真心こめた深信の針に依り、一年有余の歳月を経て把針された「十五條僧伽梨遠山糞掃衣」が見事に出来上つた。

四月二十一日、本山法堂に於て禪師さま御自ら奥田先生御夫妻、池沢悦二殿、衣財提供者田中清殿各々先祖菩提の大供養が勤修されたのである。同行の約百名余の御夫人方は皆、此の先生の教え子であり、此の盛儀に参列して、恩師の衣財から成つた十五條衣をお掛けになつた禪師さまによる御供養で感激一入であつた事であろう。そこここにハンカチで涙を拭う場面が見られたのである。

池沢さんはこう述懐して居られた。

「山田老師、息子がね、出家して一番変わったのは母親であり家内ですよ。それからというも





のภายในは毎朝六時に起きて仏壇で朝課を読むようになってきました。『観世音菩薩普門品・般若心経・参同契・宝鏡三昧・開山歷住諷経・大悲心陀羅尼』毎日の日課にしています。そこへ行くと親父の私はカラキシ駄目ですよ、呵々」と笑われた。然し何うして何うしてこの度の事も池沢氏の陰の力によるものが大であると思えたのである。

### ◇糞掃衣（正伝の仏法の証しとして）

これ程までにお袈裟が多く的心ある人々を感じせしめ、深い信仰生活に入らしめる原点は何か。それは正しく御開山道元禪師のお袈裟に対する御信仰に他ならない。

承応二年、道元禪師二十四歳の春、眞実の仏法を求めて中国に渡られ、生れて始めて見る異国の風物と文化に驚きと畏敬の念を持ち乍ら歩き廻った末、漸くにして巡り合った正師（如浄

禪師）に師事し一心に修行する中に正法に契当した。遂に正師と正法に邂逅することが出来たのである。

道元禪師はこの正師と正法との出合を殊の他有難くお感じになられ、此れは全く今生ばかりはなく前世からの善根力のお陰によるものだとお感じになって居られる。

『正法眼蔵袈裟功德』や『伝衣』の卷には、「宿善」とか宿殖般若とかの言葉がしきりに説かれている。

道元禪師が如法禪師より受けついた仏祖正伝の仏法とお考えになったものの中で、特に正法とされるものがこのお袈裟であったのである。

『袈裟功德』の卷頭に、

「仏から仏へ、祖師から祖師へ、まっすぐ伝へられた袈裟と法が、間違ひなく中国へ正伝した事は嵩山の達磨大師だけである」と述べられ、お釈迦様から二十八代目の達磨大師が間違ひな

く、正統としてのお袈裟と法をお伝へになった。そして、その正法が我が師如浄禪師に伝わったのであるから正しく正伝の仏法であると述べられている。

従ってお袈裟は仏様の心であり、仏様のお体であると信じられたのである。

事実、天童山で修行僧がお袈裟を頭にいたたいて「大いなるかな解脱げだうぶく、無相福田の衣、如来の教えを身につけたてまつり、広く諸々の衆生を渡さむ」と唱えて肩にかける姿（現在の永平寺の搭袈裟法）を目の当り見てただ感激して涙が止まらなかったと述べられている。

そして、このお袈裟を身につけることができれば龍も三熱地獄をまぬがれ、牛も角の先でふれただけで罪を減ずるのだと説かれている。

そのお袈裟には三種類あり、五條衣・七條衣・九條衣があり、九條衣以上を大衣と云い、大衣の中で最も清浄で尊いものは「糞掃衣」である。

糞掃と云ふのは、はきだめに捨てられたボロ布を洗って縫ったお袈裟のことでこれが最高の功德がある。何故ならば人間の欲心を捨て清浄無垢の心を育てるからである。然も、此のお袈裟を一大願心を起こして精進潔齋して一針一針真心をこめて如法に縫う時に無量の功德をいたたくことができるとお説きになっている。

何時の世でも、吾が子を思う母親の慈悲心には心うたれる。池沢みなど女史が吾が子の出家の縁によってお袈裟の尊さを知り、何時の間に常人の及ばぬ信仰の世界に入り、又多くの人々に深い感動を与えたことを尊く思うと同時にこれこそ現代に生きている仏教を痛感する次第である。

※大本山永平寺『傘松』より転載

## 母親の一念

長野市 池 沢 悦 二

二男の資剛が、「金も要らなきや物も要らぬ俺は人の心がほしい」

と発心して家族にも云わず、松代眞田家の菩提寺長国寺吉田興山老師の許へ出家してしまった。上智大学経済学部を卒業、日本アイビーエムへ入社、四年間社会人として勤務していた二男の突然の出家は吾が家にとって正に青天の霹靂であつた。

人間生きて行くためには衣食住の三要素が必ずである。食住は寺であるから何とかなるとしても、肝心なものは衣服である。在家では想像

もつかないお衣、お袈裟が常服であり、何にも判らない母親は長国寺を訪ねた。

頭を丸坊主にした彼は白の襦袢に作務衣を着て靜かに庭を掃いていた、そばへ寄って見ると足袋まで師匠のおふるである。師匠は「お母さん心配ありませんよ。みんな私のふるいので間に合せていますから」とのん気に笑っている。時に間に合せてもいいかも知れないがこれから何十年修行の間、彼が一生不自由なく着るものを作って協力してやるのが母のつとめだと思い、早速白いサラシの襦袢から作業が始つたのである。本人が今まで着用していた背廣から下着の類

まで、娑婆とのお別れだと云って友人や知人に  
みなプレゼントして長国寺に入山したもので、  
着るものには全くまいってしまつた次第です。

自ら選んだ道首にしん入をかけた道、命をかけた道を歩こうと決意した吾子の心根に、一番心打たれたのは母親だつたわけです。

長国寺の吉田興山老師は「お袈裟をかけて坐禪する——それでおしまい」と云う沢木興道老師の弟子であり其の教えを守る第一人者で、沢木老師共々律になつたお袈裟（如法衣）の縫い方をひろく在家出家の人々にすすめておられる人で、吾子のためにお袈裟を把針しようと思つた意した女房のよき師匠でもありました。昭和五十二年長国寺お授戒が勤まり其の折、吉田興山老師は自分の師匠であつた沢木老師愛用の十五条糞掃衣を持参、初めて拝見させてくれました。其のお袈裟の美しさ莊嚴さに只々心打たれ魅せられてしまい、どうしても把針したい。自分

の目の確かなうちに十肩の悲願を立てたのでした。興山老師のおすすめで一宮市常宿寺岡本光文尼和尚の許へ弟子入りし、其れから法衣を縫う事に精進するのでした。

岡本光文尼は沢木興道老師の最後まで師に仕えた尼僧さんで、名古屋の尼僧学林のお袈裟の先生をしている方で、春秋二回自坊を開放してお袈裟の縫い方を教えて下さる方で、全国から若い僧侶、尼僧さん、寺族の方、篤信の婦人、正に千差万別若い人から八十歳すぎの方々までが集つて来ております。

早朝四時半起床洗面、五時から坐禪（四分）、朝課を済ませ朝食（おかゆ玄米）。朝食後は如法衣の研究家久馬慧忠老師のお袈裟の講義二時間。午後からは夫々に自分の目標とする七条衣、九条衣、絳子にて一心不乱に把針に三昧する訳です。一週間この寺に泊まつての修行です（今でも行われています）。長野に帰りどうし

でも判らない所が出てくると、お願いして一宮から長野までお出ましを願ひ、努力を重ねました。すでに七条衣、九条、十三条、廿五条の大衣まで完成し、癒々念願の遠山十五条蓑掃衣に取り組む訳でありますが、其の第一作は息子「紫山」が北米開教師として渡米する壮行会の席上贖として贈呈したものでした。丁度其の壮行会に参加された總持寺副監院大海力雄老師は「これはすばらしい。お母さん、私もほしいよ。私も一肩お願いしますよ」と依頼され二肩目は大海老師に、

- 三肩目は紫山の受業師 吉田興山老師
- 四肩目はアメリカ禅センター 前角博雄老師
- 五肩目は秋田松庵主現師匠 渡辺昭雄老師
- 六肩目は横浜善光寺 黒田武志(大圓)老師
- 七肩目は私の菩提寺 佐藤智賢老師
- 八肩目は大本山總持寺貫首 梅田信隆禪師
- 九肩目は大本山永平寺貫首 丹羽廉芳禪師

- 十肩目は秋田補陀寺 鈴木鉄心老師
- 十一肩目は吉田天周院 黒柳祖道老師
- 十二肩目は大田原光真寺 黒田光純老師
- 十三肩目は地蔵庵主 鈴木祖光尼和尚

にと、当初十肩の悲願が總持寺の禪師さまから「十肩なんて区切らずにはてしなくおつづけ下さい」とお言葉をいただき無涯とご揮毫を贈り、更に発奮して遂に十三肩を実現した訳です。現在には細かな仕事なので蓑掃衣は休んで、直綴とか改良衣とか作務衣等々に針を進めています。

この様に吾が子の出家に依り一念発起して最高のお袈裟の把針に全精神を傾け、ご縁のある御住職に謹上するご縁をいただけただけの女性は本当に幸せな人だと思ひ、衣財集めや寺との連絡等使い走りに協力した私も、なんとか極楽浄土へ行けそうな気がします。ありがたいことだと感謝しています。

# 母親の一念 糞掃衣

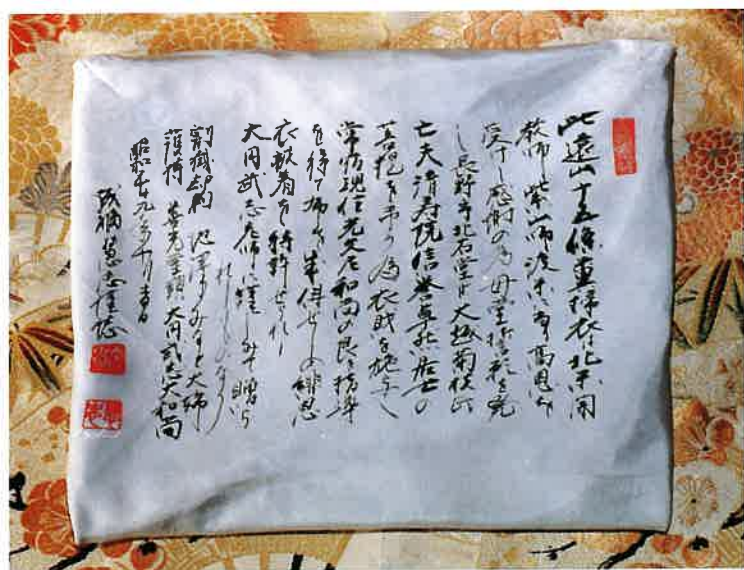


昌禅寺お授戒の折、昌禅寺に献上してあった十五條糞掃衣を着用され、須弥壇に向かわれる丹羽廉芳禅師さま



池沢みなと大姉把針の糞掃衣謹呈先

- 紫山（息子）
- 總持寺副監院 大海力雄老師
- 紫山受業師 吉田興山老師
- アメリカ力禅センター 前角博雄老師
- 秋田松庵主現師匠 渡辺昭雄老師
- 横浜善光寺 黒田武志（大圓）老師
- 菩提寺 佐藤智賢老師
- 大本山總持寺貫首 梅田信隆禪師
- 大本山永平寺貫首 丹羽廉芳禪師
- 秋田補陀寺 鈴木鉄心老師
- 吉田町天周院 黒柳祖道老師
- 大田原光真寺 黒田光純老師
- 地藏庵主 鈴木尼和尚







黒田方丈に謹呈されたお袈裟の部分

箱書き



# お袈裟の意義、現状、その将来

駒沢女子大学学長・文博 東 隆 眞

—  
お袈裟は、仏教徒の衣類のひとつであり、仏教徒としての標幟ひょうしであります。

仏教徒の衣類のひとつとか、標幟と言っても、中国、韓国、日本などの、いわゆる北方仏教、大乘仏教においては、出家僧侶も在家信者もお袈裟をまっています。スリランカ、タイ、ミャンマー（ビルマ）、カンボジア、ラオスなど

のいわゆる南方仏教、上座部仏教では、在家信者がお袈裟を身につけるなどということはないようです。チベット仏教においても、お袈裟は、お坊さんだけが被着はくせきしているようです。いづつから、どうして、このようなちがいが生まれたのでしょうか。

また、お袈裟は、だいたいスカーフのような大風呂敷きのような、大きな一枚の長方形の布になっている点では、北方仏教でも南方仏教で

も共通しています。しかし、その材料、形状、色彩、大きさ、作り方、とりあつかい方などに、ついてこまかくしらべてみると、むかしから、いろいろとちがいがあつてあります。どうして、このようになってしまっているのでしょうか。

わが国の仏教の歴史を考へる場合、飛鳥時代、六世紀から七世紀にかけて登場した聖徳太子（五七四―六二二）の存在を抜きにすることは出来ません。

聖徳太子は、親鸞聖人（一一七一―一二六二）によつて、「和国の教主聖徳皇」と口をきわめて稱揚されましたが、太子は、在家信者であつて出家僧侶ではありません。この在家信者聖徳太子は、お袈裟をかけて『法華経』や『勝曼経』を講説したので、天から宝華が降る奇端が生じたといはれます。

お袈裟を被着したという点を重視して、鎌倉時代の道元禪師（一一〇〇―一二五三）は、

聖徳太子を、「人天の導師」とか、「仏の使い」とか、「衆生の父母」であるとか、「正法眼蔵」しやうぽうげんぞう（「袈裟功德」の巻）で、賛仰してゐるのであります。

## 二

道元禪師は、『正法眼蔵』（「袈裟功德」の巻）で、「在家の人天なれども、袈裟を受持することには、大乘最極の秘訣なり」と述べています。在家信者がお袈裟を受持することは、大乘仏教のもっともすぐれたところだといわれるのであります。

日本の仏教で、仏教徒にとつてお袈裟が如何に重要であるかについて強調したお坊さんは、けつして数は多くありません。だれがお袈裟についてどのような考え方を抱いたか、どのようなことをしたか、いまは余裕がないので、べつこの機会にとりあげましょう。

ここでは、私は、道元禪師についてみたいのです。道元禪師は、日本仏教で、お袈裟について本格的にとりくんだ数少ないお坊さんの一人であります。道元禪師は、その代表的著作『正法眼蔵』のなかで、「袈裟功德」の巻と、「伝衣」の巻とを書き残していらつしゃいます。

題名に沿って申しますと、「袈裟功德」の巻は、お袈裟にそなわっている徳性（功德）を書いたものであり、「伝衣」の巻は、お袈裟の伝統、継承について示してあるとしなければなりません。しかし、その内容を見ると、この両巻の内容はほとんど似ています。

「袈裟功德」の巻には、正しいお袈裟の伝統は、インドの達磨大師から中国にもたらされたものであること、お袈裟の意義、お袈裟の歴史、お袈裟のかけ方、お袈裟の材料、洗い方、管理方法、作り方、種類などなど、くわしく述べてあります。「伝衣」の巻も、だいたいこのような

内容になっています。

さて、また、道元禪師は、「おほよそ袈裟は、仏弟子の標幟なり」と言っています。具体的には、五条衣（仕事、労働、旅行などのときに着る。自分の部屋にいるとき着る）、七条衣（修行をするときに着る）、九条衣（人びとを教化するときに着る）などの三種類のころもを指し、三衣えびといっています。又、標幟ひょうしというのは、単なる標識ではない、単なる衣類ではない、「毎日に頂戴したてまつるべし」とありますから、合掌して、お袈裟を頭のうえでいただくのである。なぜか。お袈裟は、仏教徒にとつて、「仏身なり、仏心なり」とあるように、お釈迦さまのおからだであり、おこころであるからです。お釈迦さまは、お袈裟なのであり、お袈裟はお釈迦さまであります。そういう意味での標幟なのです。ですから、「諸仏の恭敬帰依しますところなり」。もろもろの仏たちが、うやまい信じてきたのです。

「しかあれば、すなわち、袈裟を受持せんは、宿善をよろこぶべし」。

まさに、お袈裟は、解脱出来る功德をそなえている。ですから、「ふるくより解脱げだつふくと称す。業障ごうしやう、煩惱障ぼんのうしやう、報障ほうしやうみな解脱すべきなり」。お袈裟は苦しみ悩みから解脱する衣服であります。業障（やがて地獄に落ちる悪い行為が障りとなる）、煩惱障（むさぼり、いかり、ぐちなどのまよいが絶えずあらわれて障りとなる）、報障（苦しみの報いを受けることが障りとなる）の三つの障りなどは、みな解脱する事が出来るといわれます。

しかしながら、「もし袈裟を受持せんは、仏祖正伝を伝受すべし」。歴代の仏祖が正しく伝えてきたお袈裟を正しく受持しなければならぬ。ということとは、この当時、道元禅師の立場からすると、まちがったお袈裟もあるから注意しなさいということ。中国においては、達磨大

師（一五三〇？）から伝えられたお袈裟が正統である。仏陀跋陀羅尊者ぶつたばつだらそんじや、犍法師けんぼうし（三八四〜四一四）、法融禅師ほうじゆうぜん（五九四〜六五七）、あるいはインドや中国の経師、論師には、正しいお袈裟は伝わっていないという。道元禅師にとっては、お袈裟が正しく伝わるということは、仏祖単伝の正法が正しく伝わるということにほかならないのであります。

道元禅師は、後漢の明帝の永平年間（五八〜七五）に、はじめて中国に仏教が伝来されてよりこのかた、多くの名僧知識がインドと中国をしげく往来しましたが、これらの人びとは、ただ、経、律、論の三蔵さんざう（一切経。大蔵経）を皮相的に論議しているばかりで、仏法の真髄を学んでいたのではなかったと批判します。そうして、これらの人びとは、お袈裟をただ単に衣服とのみうけとめて誤った理解をしている、すなわち「これらのたぐいは、ひとへに衣服とのみ認じ

て、仏法の尊重なりとしらず、まことにあはれむべし」としています。まことに激越なことはが並んでいますが、道元禪師にとって、お袈裟は、衣生活とか衣文化の一つというレベルではなく、実に信仰生活そのものであるといった方がよいのでしよう。

これらの文章のなかに、道元禪師の、お袈裟に対する、あるいはお釈迦さまに対する、そして仏法に対する熱い想いを読みとることが出来ます。

このような道元禪師を高祖としていただく日本の曹洞宗でありますから、たとえば後代の江戸期には、面山瑞方禪師（一六八三〜一七六九）『釈氏法衣訓』の著者）、逆水洞流禪師（一六八七〜一七六六）『伝衣象鼻草稿』の著者）、黙室良要禪師（一七七五〜一八三三）『法服格正』の著者）、祖光来禪禪師（一七九五〜？）『福田帶遼』の著者）ら、お袈裟に格別の関心を寄せ

る宗侶が陸続と登場します。そして、その影響は現在まで続いているのであります。

### 三

道元禪師にはじまっておよそ八〇〇年になんなんとする曹洞宗の歴史のなかで、道元禪師のお説きになったお袈裟の伝承は、道元禪師以後、いったいどのようになっていっているのでしょうか。

この問題については、近年公けにされた久馬慧忠老師著『袈裟の研究』（大法輪閣刊）、川口高風教授著『法服格正の研究』（第一書房刊）、同教授著『曹洞宗の袈裟の知識』（曹洞宗宗務庁刊）、水野弥穂子先生著『道元禪師のお袈裟』（柏樹社刊）、関口道潤老師著『日本曹洞宗初期教団における法衣の研究』（恵林寺刊）など、すぐれた成果をぜひごらんいただきたい。

さて、私は、お袈裟に関して強い関心を抱きながら一向にその方面にくわしくないのであり

ますが、いま、右の研究書、解説書そのほかを拝読して、いまさらながらにおどろくことがあります。

まず、曹洞宗の由緒ある古刹に道元禪師のお手縫いのお袈裟とかご被着のお袈裟ということ  
で伝来しているものは、「袈裟功德」の巻を基準  
にして考えるとどうも疑わしいらしいということ  
とであります。これには本当におどろきます。

しかもまた、その道元禪師のお袈裟なるものが  
二五条衣であるそうです。この点も、少しひっ  
かかります。というのは、「伝衣」の巻には、「嫡  
嫡正伝」のお袈裟の種類として、九条衣のほか  
に、十一条衣、十三条衣、十五条衣、十七条衣、  
十九条衣、二十一条衣、二十三条衣、二十五条  
衣、三百五十条衣、八万四千条衣など、まだそ  
のほかにも諸種の大衣があるとされてはありま  
すが、「袈裟功德」の巻には、「袈裟、言<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>三  
衣<sup>一</sup>。五条衣、七条衣、九条衣等大衣也。上行之

流<sup>トモガラ</sup>唯受<sup>ニ</sup>此三衣<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>蓄<sup>ニ</sup>余衣<sup>一</sup>、唯用<sup>ニ</sup>三  
衣<sup>一</sup>供身事足<sup>レ</sup>」。要するに、すぐれた人は、五  
条衣、七条衣、九条衣など三種の袈裟を受持す  
るだけで、そのほかのお袈裟は蓄えないとある  
からです。

また、今日、「袈裟功德」や「伝衣」の巻のお  
示しに忠実に従って縫製したお袈裟を如法衣<sup>ニホウホウエ</sup>と  
よんでいるのを、私は耳にしています。しかし、  
この如法衣なるものが、沢木興道老師（一八八  
〇〜一九六六）の系統と橋本恵光老師（一八九  
〇〜一九六五）の系統と、そのほかの系統とで  
は、若干のくいちがいがあるように見うけられ  
ます。おそらく、それは、「袈裟功德」「伝衣」  
の両巻に書いてあるお袈裟の作り方に関する文  
章の解説の相違から生じた結果でありましょう。  
関係方面におかれては、一堂に会して、相互の  
研究と相互の理解と今後の方策を講じてはどう  
でしょうか。

なお、今日、多くの曹洞宗の僧侶は、もちろん私もふくめて、だいたい法衣店で購求した普通の七条衣や絡子ちやくす（五条衣を縮小したかたちのもの。胸にかけるようにした）などを着用しています。いわゆる如法衣を着用していない方が圧倒的に多い。

しかも、永平寺で修行した人と総持寺で修行した人と、いわゆる如法衣をかけている人とは、それぞれ搭かけ方に多少のちがいが見られるのは周知のとおりです。しかし、こういうことも、他宗他派の人には理解しにくいところではないでしょうか。

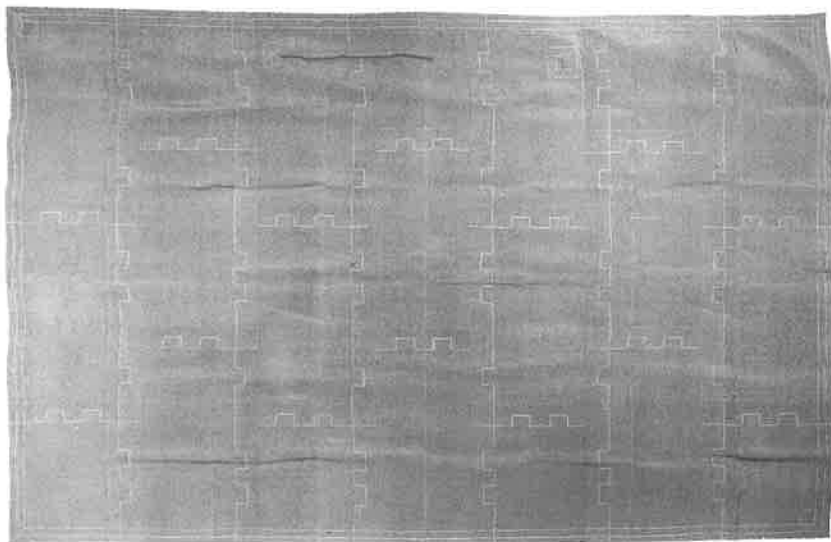
前後しますが、更につけ加えておきましょう。

さきにもご紹介したように、道元禪師は、在家信者がお袈裟を搭けることを奨励しておられます。しかし、道元禪師以後およそ七五〇年の曹洞宗の歴史のなかで、お袈裟はほとんどことごとく僧侶のものであって檀信徒のものではあ

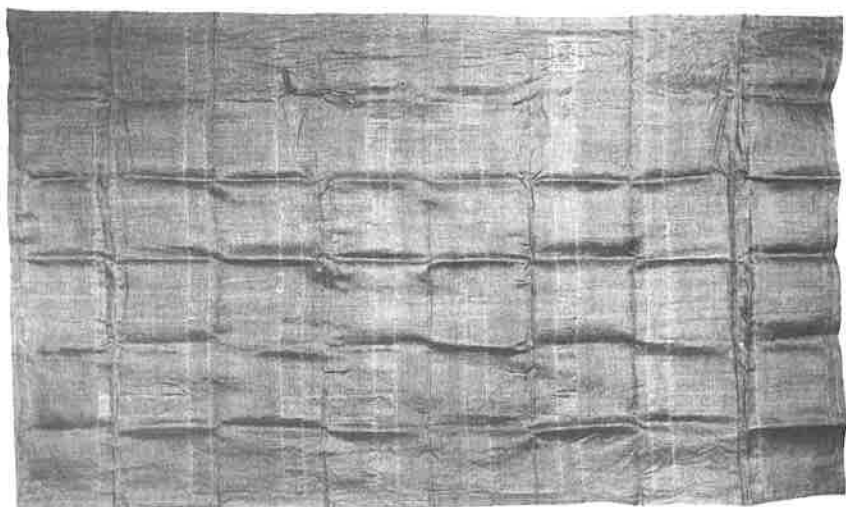
りません。道元禪師の「袈裟功德」や「伝衣」の両卷のお示しにしがたがって、檀信徒の方々も、絡子や半袈裟はともかくとして、五条衣や七条衣などのお袈裟を着てお寺の行事に参加したというはなしは寡聞にして耳にしたことがありません。もつとも「袈裟功德」、「伝衣」の両卷の教えにしたがって、お袈裟を縫うのは男性の僧侶にも見られないではありませんが、それは在家信者や尼僧さんに多いようです。それも曹洞宗の一部に見られる特別な現象であって、けっして一般化してはいないと私は理解しています。

なお、誤解をおそれずにあえて申します。道元禪師の「袈裟功德」、「伝衣」の両卷の教えにもとづく如法衣を尊重するのあまり、一部の者のなかには、如法衣にさほど関心がない者、如法衣を所持せずあるいは着用しない者に対して、彼らを内心軽視し蔑視する風潮が見られることです。それほどでなくとも、如法衣を着ている





七條割截 開葉・馬齒



九條割截 刺葉・松馬色

自分にある種の優越感を抱くことがあるようです。また、他宗他派のお袈裟を粗末に扱うなどという状況に出くわすことがある。

道元禪師のお袈裟尊重主義を高揚するのは大いにけっこうなことです。だからと言って如法衣以外のお袈裟を無闇に誹謗するとしたら、それは傲慢というものです。

くりかえして申しますが、あとで触れることですが、道元禪師の所説にとらわれてしまつて、他の伝承たとえば南方仏教、上座部仏教に伝わるお袈裟を邪道だときめつけて軽蔑するようなことがあつてもならないと考へます。道元禪師の教えも尊く正しいし、スリランカやタイの仏教の教えもまた尊く正しいとうけとめるところに、今日の仏教の歩む道があると思へます。

ところで、余計なことですが、私もわずかに数領のお袈裟を護持しています。それらはいずれも尊い因縁によつて私のところにたたいまお

さまつてゐる普通のお袈裟、法衣店がつくつたお袈裟であります。そのなかで、あえて、印象の深いお袈裟といへば、阿波の城満寺で渡辺頼応老漢（一八九〇〜一九八九）に就いて得度を許されたときにいただいた黒色の紬のお袈裟、それから師翁渡辺玄宗禪師（一八六九〜一九六三）の遺品の羽二重の白衣でつくつた茶色の七条衣、一九七八年（昭和五三年）、大本山永平寺に講師として招へいされたときいただいた謝誼でつくつた麻地の草木染めの七条衣の三領（三肩）です。今の私には、いうところの如法衣を被着するご縁が成就していませんが、右の三領の七条衣は、私にとつての尊い尊い仏衣なのであります。

#### 四

このあたりで、曹洞宗以外の他宗に目を向けてみましょう。

さきほどの如法衣ということですが、関口老師は、如法衣とは、「江戸時代中期における日本仏教各宗の袈裟研究家によって主張し、著用されたものであり、インドの釈尊依用のもの、仏教教団共通のもの」と信じられた袈裟」としておられます。

ここでいわれている如法衣というのは、前項で私が如法衣といっているのとはちよつとちがうのですが、それはそれとして、右の関口師の文章で思い出したのは浄土宗のお袈裟であります。たしか浄土宗のお方から如法衣ということばを聞いたことがあります。ただし、浄土宗の如法衣なるものを実際をこの目で確認したわけではありませんので、いずれその機をえたいと願っています。

私は、かつて高野山真言宗の金山穆照大僧正（高野山大学学長。高野山真言宗管長）が高野山で平生用いておられた麻地の木蘭色の七条衣

を手にしたことがあります。この七条衣は私がいふところの曹洞宗の如法衣に酷似していました。このあたりの関係はどうなっているのでしょうか。

また、これは伝聞の域を出ませんが、浄土真宗（真宗）の僧侶の被着するお袈裟は正統なお袈裟ではない。天台宗などのお袈裟とは似て非なるものだといえます。浄土真宗（真宗）の僧は、非僧非俗というか半僧半俗というか、とにかく出家僧侶ではないのがその理由だとかいのですが、ほんとうはどうなっているのでしょうか。

日本仏教の各宗が、一堂に会して、お袈裟の研修会を開くことがあってもよいようにおもいます。

浄土真宗（真宗）がいわゆる在家教団であるのかどうかはさておいて、在家教団と呼ばれている仏教の新宗教の一つに、孝道教団（横浜市）

があります。先日、孝道教団のお招きをうけてお釈迦さまのお誕生をお祝いする「花まつり」の式典に参上いたしました。そして、そのスケールの大きい見事な祭典に圧倒されました。おそらく日本一の「花まつり」と評してよいでしょう。

そこでは、有髪の信者さんたちが、男性も女性も茶色のお袈裟を洋服のうえにまとして行事に参加しておられました。私は、意外な場所でも、道元禅師のお示し、すなわち「在家の人天なれども、袈裟を受持することは、大乘最極の秘訣なり」と在家信者がお袈裟をかけることを強調されていますが、これが実現されているのを拝見した思いでした。現代の日本仏教において、この孝道教団のような例は、まだほかにもあるでしょう。

## 五

さらに海外の仏教に視点を転じてみましょう。平成三年の夏、私は、韓国の通度寺つどふぢに拝登いたしました。通度寺は韓国仏教を代表する大寺院の一つです。理事長黒田武志老師の横浜善光寺留学僧育英会いけいが、通度寺のよびかけに応じて、同寺に、金欄きんらん九条衣一肩、金欄安陀会あんだえ一肩、麻九条衣一肩、麻安陀会一肩、そして道元禅師の『正法眼蔵』九五卷（大本山永平寺蔵版。和装本）を贈呈するのに同会理事として同行したのでした。これは、一千数百年間にわたる日韓両国の仏教史上最初の出来事ではなかったでしょう。このこととの関係記事は「成寿」第18卷（一九九三年春季号）に出ていますから、詳細は省略しますが、そもそも黒田老師は、篤信者の縫製した糞掃衣ふんぞうえ（掃き捨てられた衣類でつづつたお袈裟で、最も功德があるとされる）などを大

本山永平寺の丹羽廉芳禪師（一九〇五—一九九三）ははじめ有縁のかたがたに人知れず捧呈されてきた奇特なお方です。

さて、通度寺には、韓国の国宝に指定されている「釈迦如来袈裟」が秘蔵されています。また、通度寺には、世界各地のお袈裟を一堂に集めて、これを展示し、お袈裟のこころを結んで世界の仏教徒が交流し、協力して、生きとし生けるものの平安と浄福をすすめていきたいという大きな誓願があつて、これに黒田老師が二もなくこたえたわけでした。

私は、その翌年も、黒田老師と再び訪韓して、松広寺に拝登し、ソウル特別市の祇園精舎の住持雪峰老師（尼僧）にたいそうお世話になりました。雪峰老師は、私どもに、僧伽梨（大衣のこと）二長一短九条というお袈裟を二領も恵与して下さったのであります。

また、私は、横浜善光寺留学僧育英会の育英

生志願者の現地面接と事業推進のために、平成四年（一九九二）に台湾とタイに出かけました。

台北市の龍山寺というもつとも古い有名な寺院に詣でますと、それは朝の八時すぎでしたか、香煙が立ちのぼり善男善女でにぎわう光景の凄さにはびっくりもし感動もいたしました。二、三百人の女性たちが黒い服のうえにお袈裟を着て、となえごとをしながら境内を遶行しているのです。その後、私は、香港やシンガポールに出かけて、華人社会の仏教寺院や施設を調査しました。そこでも台湾の龍山寺と同じように、在家信者がお袈裟をかけて各種の儀礼に参加しているのを確認いたしました。

タイのバンコク郊外のワット・パクナムは、数百人の僧たちが起居している瞑想修行で有名な大寺院ですが、お袈裟を身にまとうているのは出家の比丘にかぎりません。在家の信者は着用していません。信者が修行僧に供養するために、

境内の売店で托鉢用の用具などともにお袈裟を頒布しています。私は、この店で何がしかの供養をさせていただいて、タイ僧のお袈裟一式を日本に持ちかえったことでした。

ワット・パクナムの僧院の修行僧の個室に案内されて入ってみますと、洗濯したお袈裟が部屋の中央にわたした細い紐に掛けてありました。

アユタヤの古刹ワット・ヤイチャイモンコンの僧院では、洗濯したお袈裟が立木の小枝に掛けて乾かしてあり、それが微風になびいている光景に出会いました。それは、いまま私の脳裏に強く灼きついています。道元禪師がこの光景をご覧になったとしたらどのような感じになったでしょう。この僧院の僧にとって、お袈裟はまさに衣類の一種であり、その衣類を洗って干すことは、日常生活の一齣なのであります。ここには、僧の平常の生活そのものがあります。生活そのものとなっているお袈裟のすが

たがあると感じました。日本仏教のお袈裟は、主として儀式、儀礼のときに着用されることが多い。

お隣りのミャンマー（ビルマ）についてはどうかと思ひ、生野善応先生の『ビルマ仏教—その実態と修行』（大蔵出版刊）を拝見しますと、得度のとき師僧から授与される三衣のこと、坐具のこと、被着のころえ、お袈裟の功德などがくわしく紹介してあります。しかし、在家信者が出家僧侶のお袈裟を着るなどということは書いてありません。

話はいささか飛躍するかも知れませんが、スリランカ、タイ、ミャンマーなどの女性のサリに似た服装を見ると、左肩の上に長方形の布をかけ前後に垂らしています。仏像や僧侶が左肩にかけているお袈裟に類似しているかに見受けられます。私は、日本の和服はお袈裟の影響がきわめて大きいかねがね思っているのです

が、ひよっとするとスリランカ女性などの衣装の原型もお袈裟なのではないでしょうか。

## 六

国際化する現代世界において、仏教も国際的に広がっています。お袈裟もまた、ヨーロッパ、アメリカに広がっています。お袈裟は国際的な視野からとりあげてみなければならぬ段階に入っています。

一九七八年、私は、ヨーロッパ禅協会を創設した弟子丸泰仙老師（一九一四―一九八二）から、老師のお弟子となったフランス人女性アンヌ・マリ―（泰玉照蓮尼、当時二五歳）さんがアルプス山中の夏安居でつくった絡子をいただきました。

また、一九九五年夏、前角博雄老師（一九三〇―一九九五）が開いたニューヨーク市の近くのヤンカー市の禅コミュニティで、老師の高弟

グラスマン・徹玄老師のお弟子さんのメキシコ人女性が、糞掃衣にヒントをえてつくった布製のバッグをプレゼントしてくれました。

一九九六年三月二八日付の「中外日報」の広告には、京都の井筒法衣店が、お袈裟に関する全四巻のビデオを制作し、販売するとあって、大いに注意を寄せられました。その内容構成を見ると、第一巻「法衣伝来の道」海外に於ける袈裟の着装法へスリランカ・タイ・ミャンマー・韓国・中国・他、第二巻「現代各宗派の法衣」国内における法衣の歴史と現在の法衣へ天台・真言・浄土・真宗・曹洞・臨済・日蓮・各宗派の現状、第三巻「正法眼蔵袈裟功德」曹洞宗正伝の法衣及お袈裟の種類、第四巻「曹洞宗の袈裟信仰」曹洞宗のお袈裟の変遷と縫い方、となっています。仏教の国際化時代にふさわしい時宜をえたところみと言うべきでしょう。

ひるがえって、お袈裟は仏教徒の標幟であり

ます。くりかえしませんが、道元禪師の『正法眼蔵』『袈裟功德』、『伝衣』の両巻を拝読すれば、標幟の意味するところがよくわかります。

私は、お袈裟の功德を、海外の人々も理解してほしいと思います。そのための具体的な行動をこれからもつづけていきたいと思えます。

ここで飛躍した言い方になるかも知れませんが、重ねてしるしますと、私は、タイのワット・ヤイチャイモンコンの境内で見た立木の小枝に洗って干してあるお袈裟の光景こそ、お袈裟の原点だと思えます。「仏祖の家常は、喫茶喫飯のみなり」(『正法眼蔵』)という「平常心是道」の世界につながる世界です。

とまれ、日本仏教なかんずく曹洞宗において、一部にお袈裟の正統性とか歴史的経緯を厳密に追求する姿勢が強いように見受けられます。この作業も大切です。が、あまりこれにこだわると、後向きの学問に墮してしまつて、道元禪師

のご趣旨からかえって遠ざかつてしまうのではなからうかと危惧されます。それにお袈裟に対する信仰も意義のあることですが、これが高じて、いうところの如法衣のお袈裟ばかりを神聖視し、絶対視して他宗派の立場を認めないというようなことになってしまつてはいけません。二十一世紀への仏教の展望が開けてこないでしょう。このことをくりかえし強調しておかなければならない段階に入ってきているとおもいます。韓国の通度寺さまが企画されているように、世界中のお袈裟を集めて、これを展観し、お袈裟のこころをたがいに確かめあつて、世界平和のためにつとめていくということが、たとえば、もっとも肝要なことの一つではないでしょうか。そのような視野に立つて、お袈裟のこころを学んでいきたいと、私は、願っています。

(横浜善光寺留学僧育英会理事)



## (目 的)

佛教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする

## (派 遣 先)

1. Zen Center of Los Angeles (LA禅センター)  
"923 S.Normandie Ave LA. CA. 90006 USA"
2. Zen Mountain Center of New York (NY禅センター)  
"Box 197, Mt.Tremper, NY 12547 USA"
3. Wat Paknam (ワットパクナム)  
"Bhasichareon Bangkok 10160 Thailand"
4. 理事会において必要と認めるその他の国に所在する研究機関、並びに国内仏教関係大学及び寺院

## (派 遣 期 間)

平成9年4月より一年間

## (給 費)

アメリカ・タイ及びその他の国における滞在に要する  
必要経費並びにその往復旅費

## (提 出 書 類)

### 1. 論文(次項による)

○論題

- ①これからの国際交流と仏教の役割
- ②世界平和と仏教徒の誓願
- ③留学僧として私はこれを学びたい
- ④異文化の中で仏教を学ぶ

いずれか一題を選ぶこと400字詰原稿  
用紙5枚以上(A4版タテ書き)

- 2.保証人と連署した願書
- 3.卒業証明書
- 4.履歴書
- 5.推薦書
- 6.健康診断書

## (募 集 人 数)

平成9年度 2~3名

## (願 書 締 切)

平成8年12月10日、事務局必着のこと

## (発 表)

平成9年1月10日、本人に通知する

## 横浜善光寺留学僧育英会

〒234 横浜市港南区日野中央1丁目12番9号  
TEL.045-845-1371 FAX.045-846-2000

# 第 13 回 生

# 横浜 善光寺 留学僧募集

平成 9 年度・1997

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。

ご希望の方はご応募ください。

詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の  
規程並びに細則をごらんください。



**ZENKŌJI**  
**YOKOHAMA**

タイ・ワットパクナム住職

## ソムデット就任祝う祝賀会

### パクナム会の黒田会長ら参列

タイ国の首都バンコクのトンブリ地区にある、タイ最大の民間寺院ワットパクナムの住職が、最高位の大僧正に次ぐ高僧の位「ソムデット（権大僧正）」に就任し、その祝賀会が五月十一日、十二日の両日、ワットパクナムで国内外からの参列者を集めて盛大に開催された。日本からは同寺で修行した人たちの集まりの「パクナム会」（黒田武志会長）や、縁のある真如苑の代表らが参列した。

タイには、王室が建てて保護している王室寺

院（ワットルワン）と、庶民が建てた民間寺院（ワットラート）がある。ワットパクナムはチヤオプラヤ・メナム（いわゆるメナム河）の畔にあるタイで最大の民間寺院。瞑想修行の寺として知られ、戦後、ここで修行した日本人は約八十人にもものぼり、深い縁で結ばれている。

タイの仏教教団の構成は、最高位がソムデットプラサンカラート（大僧正）で一人。この下にソムデット（権大僧正）が八人いる。ワットパクナムの住職はプラタム・パンヤー・ボディ

Wat Paknam Bhasicharoen

Bangkok 10160

Thailand

16 April 2539 / 1996

Wat Paknam has arranged ceremonies to celebrate the elevation of our Lord Abbot to the rank of Somdet, with the new official name of Somdet Phra Maharejamangalacaraya.

The dates fixed for these ceremonies are 11 - 12 May 2539. Wat Paknam takes pleasure in inviting

Venerable Kuroda

for lunch on 12 May 2539 at 11 o'clock in the morning at the Sala Karn Parian, Wat Paknam.

It is hoped very much that you will be able to attend.

Yours in the Dhamma,

( พุทธโศภิต )

( Phra Devasudhi )

Deputy Abbot, Wat Paknam Bhasicharoen

という人で、これまではチャオクン・チャンピセート（中僧正）の位にあり、大長老会議のメンバーとして高僧の一人に数えられている。

祝賀会への案内はパクナム会の会長である曹洞宗善光寺の黒田武志住職のもとへ届き、黒田住職の呼びかけでパクナム会の会員ら十六人が駆けつけた。二日間にわたって祝賀会の模様を見た高野山堀川別院の佐々木弘伝主管（京都市）は「外国からはスリランカの長老やベトナム、カンボジア、韓国などから四十人近くの人たちが来ていた。日本からは弟子の私たちや真如苑の代表三人がゲストとして出席した」と話している。

佐々木主管によると、千人を超す僧侶による供養が行われ、昼食の時間をはさんで在家の信者らが次々に住職のもとに集まった。僧たちは短いお経を読み、供養のしるしに三衣が配られた。祝いに訪れた人たちは一般の在家信者とも

とより、首相や政府の高官らも列をなした。

二日間ともワットパクナムは手に香と燭と花をもった人たちの波であふれた。住職に直接会って祝いの言葉を述べたり、供養を受けたりできる人は限られ、三カ所に分かれて別の僧侶が住職に代わって対応した。

行列は朝早くから夜遅くまで続き、プラタン・パンヤーボデイ住職の徳望を物語っていたという。

祝賀会参列者芳名（敬称略）

佐々木弘伝・真言宗高野山堀川別院／京都市  
石附 周行・曹洞宗雙林寺／群馬県  
渡辺 清孝・曹洞宗高德寺／栃木県  
永崎 亮寛・真言宗高野山大学／和歌山県  
従野 公淳・日蓮宗本乗寺／横浜市  
浦上 隆康・真言宗巴陵院／和歌山県  
資延 憲英・真言宗真言寺／北海道深川市  
田中 智誠・黄檗宗正瑞寺／滋賀県  
山本 浄月・臨濟宗退耕院／岐阜県  
山田 春子・同 右  
三宮 陸穂・浄土宗優婆寺内／青森県  
大森 昭祥・曹洞宗大長寺／神奈川県  
遠藤太嘉志・東京都（前・アメリカン航空勤務）  
遠藤能理子・東京都中央区  
五十嵐千彦・東京都町田市（カメラマン）  
黒田 武志・曹洞宗善光寺／横浜市

# ワットパクナム住職がソムデットに



ブラ・タム・バンヤー・ボディ住職



お祝いに出席した僧侶



ソムデットと談笑する黒田方丈







お祝いの品を手渡す黒田方丈

ワットバクナム全景







中央に金色のお釈迦さま(ワットバクナム内部)



就任式に参加する地元住民

## 第十回総会を開催

◇ 横浜善光寺留学僧育英会（黒田武志理事長）は第十回総会を平成七年十一月五日午後二時から、善光寺「釈迦殿」で開催した。

善光寺育英会は昨年一月に第十一回生五人の採用を決定。これにより育英生の総数は関係国十六カ国・一地域、六十一人にのぼった。

総会に先だって、本堂で開会諷経と故・前角顧問の追悼法要が黒田理事長の導師で営まれた。法要後、東隆眞理事（駒沢女子大学副学長・学

長代理）が講演し、戦後五十年の日本を取り巻く内外の情勢を分析しつつ、仏教者としていかに生きるべきかを語り、新時代にふさわしい人材が育英会の中から育つことへの期待を述べた。

東理事は「戦後五十年をどう反省し、これらの五十年に向けてどう生きてゆくべきかが、あらゆる角度から問われている」とし、安定を欠いた世界情勢や、日本国内の兵庫県南部地震やオウム事件などを挙げて「世界は混沌として不透明であり、不安定だ。天災、人災その他、予想もしない事が起こっている。宗教界ではオ

ウム事件を契機にして宗教法人法改正の是非、また宗教とは何か、仏教とは何かが根底から問われている」と直面する現実の深刻さを指摘。

その上で「私どもは自分の足元を見つめながら、互いに仲良く生きていく生き方、世界平和の原理は、仏教を具体的にどう実現するかにあることを考えなければならぬ」と提言。

「私どもは、この育英会を通じて信仰の友人をもっている。その喜びを多くの人に伝え、世の中の安定と平和に尽くすことができればと願う。国際的な感覚をもった、活力に満ちた若い仏教学者や僧侶の育成が緊急の要件であろう」と所信を披瀝した。

また曹洞宗南米開教総監の大任を果たし終えてブラジルから帰国した森山大行前総監は、「開教総監の仕事を通じて、黒田理事長の蒔いた種が世界各地で芽をふいていることを肌身で感じた。各国の若い留学僧の方々が育英会から育つ

ていることに強い感動を覚えた」と育英会の果たしている役割の重大さを話した。

引き続き総会が開かれ、善光寺の富永豊重総代と越石周平護持会長が挨拶。宮本延雄理事（鶴見大学学監）は仏法興隆・世界平和の高邁な理想を掲げた善光寺育英会が希有の存在であることを力説し、「育英生の論文も素晴らしいが、推薦される方々の推薦文はもっと素晴らしい。この育英会がいかに素晴らしいかを物語っている。また育英会に往復の旅費が交付されるような奨学制度は他にないだろう。今後続く方々のために、この育英会を育てていただきたい。そして我々を叱咤激励していただきたい」と訴えた。



新美昌道事務局長（東京・福厳寺住職）を議長に選出して議事が進められ、まず黒田理事長

が出席者を一人ずつ紹介。議事は平成七年度の行事及び会計報告、第十二回育英生辞令交付式および記念講演と開山忌の件、仏教文化総合講座開設について、出版事業に関する件、その他が話し合われた。

行事報告では、とくに故・前角顧問の密葬と本葬、また東理事と黒田理事長が追悼取材のためアメリカの禅センターを訪問した様子が報告された。その中で東理事は、前角顧問の法嗣のグラスマン・徹玄師が仮称「マエズミ・クロダ大学」という仏教主義の大学を設立する構想を描いていることを発表した。

第十二回育英生は一月に採用を決め、二月十七日の開山忌に辞令交付式並びに記念講演を行うことに決定。また育英会の行事として、新たに仏教文化総合講座の開設が提案された。機関誌『成寿』第二十五号は駒沢女子大学と前角顧問追悼の特集号とすることや、育成生の論文

集第二巻が年内に刊行されることなども報告された。

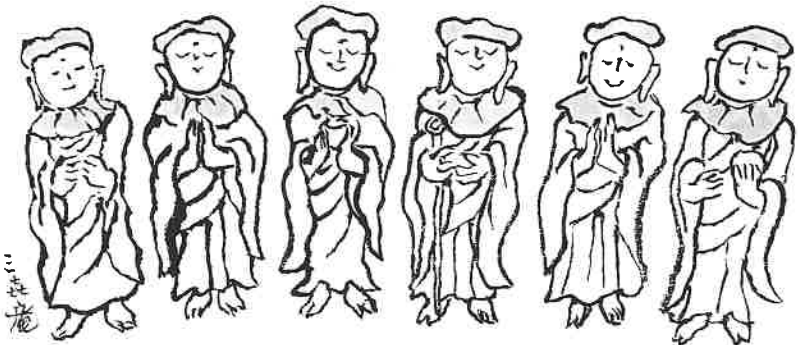
また、善光寺育英会の名誉顧問であるタイ国ワットパクナムの任職、プラタム・パンヤー・ボディー大僧正が十二月五日、タイ国王から最高位の「ソムデット」に任命されることが朗報として発表された。ワットパクナムは黒田理事長が青年時代に修行した寺で、大僧正とは親子のように親しい関係にある。

総会後、出席した育英生OBの岩波弘道（第三回生）曹洞宗宗務庁書記）、島崎義孝（第三回生）臨済宗・花園大学非常勤講師）、安藤嘉則（第六回生）曹洞宗・駒沢女子短期大学講師）の三氏が前角博雄顧問を偲んで、それぞれ卓話を行った。

その中で、岩波氏は「前角老師には、そっけないような印象を覚えたが、実は忍耐の人ではなかったかと思う。たったひとこと言うだけで、

あとはその人が育つのをずっと待ち続けていたのではないか」とその人柄を回想。

島崎氏は「苦勞をしてこられた方だと感じた。アメリカでは曹洞とか臨済にとらわれず、ここにある自分は何かを真剣に問うておられた。老師は忍耐が柔らかい形で出ていることを感じた。老師は果たして日本人だったのだろうか、アメリカ人だったのだろうか、あるいはコスモポリタンだったのだろうか。社会学で境界人という言葉があるが、老師はそのような人だった。老師は実父と苧坂光龍老師と安谷白雲老師の三人を師とされたが、私にとっては実父と故・盛永宗興前花園大学学長と前角老師が師である。二人の師を失ったことを私の慈悲と受けとめる。もう私を助ける人はいない。己の足で歩けということかと納得しかけている」と、失った人の存在の大きさを語った。



## 横浜善光寺留学僧育英会

# 育英生七人に辞令交付

## 「松明を掲げる人に」期待と激励

横浜善光寺留学僧育英会（黒田武志理事長）

の第十二回育英生七人（うち一人は継統）に対する辞令交付式が二月十七日午後二時から、善光寺で開催された。

式典に先だつて「釈迦殿」で、まず開山樞庵白純大和尚の年忌法要が、出班焼香により厳修された。導師をつとめた駒澤大学の鈴木格禅教授は「樞・庵・白・純」の名前を頭に並べた法語を作り、「樞香馥郁海東天 庵中道得法縁圓 白雲去来擁妙石 純一家風萬古傳」と唱えた。引き続きいて黒田理事長の導師により辞令交付の報告諷経が営まれた。

今回採用されたのは、スイス・ローザンヌ大

学へ留学の計良龍成氏（東京大学大学院人文科学研究所印度哲学印度文学専攻博士課程）、インド・マドラス大学ヴィシユヌ教学科博士課程に留学の三上俊弘氏（東北大学大学院文学研究科印度学仏教史学専攻博士課程）、イギリス・ケンブリッジ大学大学院社会人類学科マスターコースに留学の清水晶子氏（財団法人東方研究会専任研究員）、ドイツ・ハンブルグ大学に留学の胡建明氏（駒澤大学仏教学部禅学科Ⅱ中国人）、駒澤大学仏教学部研究員のナラダ・ラブガマ氏（スリランカ比丘）、愛知学院大学院仏教学仏教

史学専攻博士課程のギヤナ・ラタナ・スローモン氏（バンングラデシュ比丘）と継続採用された宇野恭章氏（インド・カルカッタ大学院博士課程）。（後に宇野氏以外の提出論文要旨を掲載）

法要後、宮本延雄理事（鶴見大学学監）が「二回の今回は十七人の応募があり、理事会で新しく六人、継続一人の方々にお願いすることにした」と経過を報告し、育英生の簡単なプロフィールを紹介。育英生の多くがすでに現地へ赴いているため、交付式への本人出席は胡建明氏とナラダ・ラブガマ氏だけとなったが、採用を喜ぶイギリスの清水氏からのFAXとインドの宇野氏からの手紙が披露された。

黒田理事長から育英生と代理の一人々々に採用証書と記念品が手渡された後、鈴木教授と東隆眞理事（駒沢女子大学学長）、善光寺の本寺である栃木県大田原市の黒田俊雄光真寺住職が、それぞれに育英生への期待と激励を込めて挨拶

した。

鈴木教授は次のように語りかけた。

「猫のひたいのように狭い私の家の庭に紅梅と白梅が咲いた。そこに雪が降り注いだ情景を見て、梅は寒苦を経て初めて清香を放つという言葉を思い出した。人間が、いろんな困難、苦しみ、悲しみを乗り越えて、深い味わいをもつことに例えられている。」

学問は地味で目立たない、石清水のようなものである。その学問が自分の手柄になったのはつまらない。黒田理事長は、そういうことを手柄にしろといって奨学金を出されたのではあるまい。何よりも道のためである。ドクターになることはそう困難なことではないだろう。もがき、あえぎ、うろたえて、行くべき道の見えない人たちの暗黒の魂に松明を掲げる人になりなさい。これが仏教者のもつ誓願であり、祈りである。

降三世明王圖



沙門  
三喜庵



学問を通して、無明に大いなる明かりをともす人になっていただきたい。それが御開山の、そしてここにおわす全ての方々の祈りに違いな  
いと思っ

ている」  
また東理事は、日本の大学・短大における国立と私立の割合、また私立における仏教系大学・短大の数を示し、「仏教系大学・短大の占める割合は私立の大学・短大の一〇％に満たない状況だが、約五十校という数は、日本に限って見られる現象であり、その影響力は決して小さいものではない」とその意義を強調。さらに「仏教は自己が自己を確認する宗教である。自己を明らかにし、自己を見つめることが肝心であり、このことを抜いて仏教はあり得ない。教育の根本も真実の人格を形成する人間教育であり、仏教と相通じている。学問は、世界の人々のために少しでも役に立たせていただくということではなくてはならない。死んだ学問ではなく、生き

た学問でなくてはならない」と力説した。

また、本寺の黒田光真寺住職は「善光寺の方丈がこのような仕事をしているのも、インドからタイへ行き、長く上座部仏教の修行をし、その後、アメリカへ渡って前角博雄老師のもとで研鑽を積んだ。そういう若い時に養った国際感覚と自らの体験から育英会を作ったのではないか。その裏には平和への祈りがあると思う。平和への祈りが人間として大切なことではないか。皆が同じ地球人であるという気持ちで精進していただくようお願いする」と激励した。

この日は育英会の理事会も開催され、曹洞宗大本山總持寺の監院として理事に就いていた齋藤信義前監院の退任に伴い、江川辰三新監院を理事に迎えることで一致。また東理事の駒沢女子大学学長就任祝賀会の計画や、機関誌『成寿』二十六号を袈裟と愛知学院の特集号とすることなどを決めた。

横浜善光寺留学僧育英会

## 第12回 育英生の論文(要旨)

◇留学僧として私はこれを学びたい

計 良 龍 成

### 中観派の空性論証——スイスでの研究計画について

私はローザンヌ大学のテイルマンズ教授の指導下で、インド仏教後期中観派に位置するカマラシーラの名著『中観明論』を研究するためスイスへの留学を希望している。

留学中は①カマラシーラ著『中観明論』第二章「論理による空性の証明」の基礎的文獻研究  
②カマラシーラ空性論証における論理とダルマキールテイ論理学との比較研究、二点を研究する予定である。

大乘仏教初の論師として活躍したナーガールジュナの空性思想を出発点とし、一切法の空性を徹底して説く中観派は、唯識思想の台頭とデイクナーガによる仏教論理学の体系の確立契機に、五、六世紀になつて学派としての意識が高まる。中期中観派のパーヴィヴェーカは空性思想を積極的に論証し、大乘仏教の一派としての地位を確立していく。後期中観派のカマラシーラもダルマキールテイによって再編成された

仏教論理学と、ダルマキールテイ以降の論理学研究、特にダルモットタラのそれを基礎にして、一切法の空性論証を試みている。

カマラシーラは博覧強記の偉大な学者であり、チベット仏教の形成に大きな功績を残した実践者でもある。『中観明論』は中観思想展開史において極めて重要な書物である。私の研究は後期中観派における研究の空白を埋めることになる。

それは中観派の空性論証における論理学的方法の展開を明らかにする意義を有する。カラムシーラの空性論証を研究することは、同時に空性思想における否定と否定判断を明らかにするという意義を有する。

将来は、カマラシーラの中観思想全体を解明した上で、思想史研究から思想研究に移っていきたい。

## ◇これからの国際交流と仏教の役割

三 上 俊 弘

### 古典からの相互理解——仏教伝道のあり方にモデル

人は国境を越えて行き来している。通信や交通手段の発達で地球を狭くし、もはや地球全体を視野に入れなければ経済も政治も語れない時代になった。しかし、単に人が行き来するだけが「国際交流」という言葉に値するのであろう

か。真の交流とは互いの文化を理解し合ったところで初めて可能となるものではないか。かかる意味での国際交流が果して現在、実現されているであろうか。

互いの文化の基層を形成するものに関心を持

たずして、相互理解は果して可能であろうか。

文化の基層をなすものとは古典である。ある民族の古典を知ること、その民族の戸籍ばかりでなく履歴を知るにも等しい。残念ながら、この意味では、アジアは日本人にとって、欧米以上に遠い国になってしまった。では彼我に共通の古典はなかったのか。歴史上、アジアの過半の国が、そのもとで文化を育んできたものは確かに存在する。それが仏教である。アジアにおいて日本が真に尊敬される立場を欲するのであれば、仏教という共有財産を活かすことこそ肝

要ではなからうか。そこから本当の意味での相互理解への道が開けよう。

仏教は長い歴史の中で、力に頼んだ布教は一度たりとも行なわなかった宗教である。だからこそ、民族の固有文化の精髓にまで感化を及ぼし得たのである。このような仏教伝道のあり方に、私は文化交流あるいは国家交流の最も理想的なモデルを見る思いがする。

仏教が国際交流の道具なのではない。仏教こそが真の国際交流を具現してきたのだと言っても、極言ではあるまい。

## ◇世界平和と仏教徒の誓願

清水晶子

### 恒久平和の誓願を——同じ人間との認識が大切

戦争は絶対悪である。ひとたび戦争が起これば、核兵器を使用する現代戦においては、世界

そのものが滅亡してしまう危険性がある。戦争は平和な世界を築き上げようとする人間の営み

を打ち砕く行為である。科学・技術がどれほど進歩しても、それを使用し、コントロールするのは人間である。人々が自分の国や民族にとらわれて、その利害のみを究極の目的に立てて、相手に譲歩する気持ちを持たない限り、行きつくところは争いであり、戦いである。

他者を思いやる気持ちから、慈悲の心が生ずる。原始仏教では、非暴力、不殺生、平和を愛する精神をもって、一切の生類に及ぶ慈悲を説いている。

私たちは国際社会の大きな連帯と影響の中で

生活している。そういう状況下では、各国、各民族が思想や習慣を異にしても、同じ人間であるという認識の上に立つことが大切である。お互いに相手の立場を認めて理解し合い、異なる文化に対して寛容でなければならぬ。

釈尊は、人間が他人に与える精神的・道徳的な感化力を重視して、強権にたよらない社会改革を理想とした。釈尊の説いた慈悲の精神は平和を樹立するための英知である。私たちは、この精神を誇り高く掲げて、不戦・恒久平和の誓願を世界へ向けて伝えたいと思う。

## ◇留学僧として私はこれを学びたい

胡 建 明

## 行学を後進に伝え——中国仏教復興の「火の種」

私は一九八九年七月二十一日、ちょうど「天安門事件」が発生した一カ月後、世間の無常を

痛感し、囂喧(ごうけん)たる上海を離れて寧波の天童山に投じ、監院修祥法師に剃度を請い願

って天童山の一員になった。天童山は中国有数の禅宗名刹で、歴代に高僧が輩出し、日本曹洞宗開祖道元禅師の得法道場として世界に知られている。しかし文化大革命の劫難に洗われた天童寺は、中国の全ての仏教寺院と同様に、衰微した状態になっている。

叢林制度の乱れや人材の欠如などの難問が横たわっている。宋明時代、天童山では千五百人の僧があり、五十年前の民国時代にも五百人の僧が住んでいたが、今は五十人の僧しかない。この不振の教勢を痛感して、私は日本に渡り、

仏教を学ぼうと決意した。幸い日本曹洞宗大本山永平寺監院南澤道人老師と天童寺で会い、日本への留学を実現させていただいた。

中国は今、インド仏教の研究つまりサンスクリット語、パリー語に基づく仏教研究は白紙の状態になっている。仏教復興の気運を盛り上げる中国にとって、インド仏教の研究は不可欠と

感じる。この空白を埋めるために、私は駒澤大学を卒業してドイツへ渡り、本格的なインド仏教を学びたい。ドイツで基礎的なインド仏教学を身につけたら日本に戻り、博士論文を仕上げつもりである。

学業を終えると永平寺僧堂に安居し、日本曹洞宗の僧侶として道元禅を学び、中日両国の架け橋になりたい。将来は中国仏教復興の「火の種」となり、異国から学んだ行学を後進に伝え、仏教のために自分を燃やしたい。



## ◇留学僧として私はこれを学びたい

ナラダ・ラブガマ

### 菩薩思想を研究へ——スリランカ仏教との相違点

私は大乘仏教における菩薩思想に注目し、「日本・スリランカ両国に浸透している大乘仏教の菩薩思想」のテーマで研究を進めていきたい。

大乘菩薩思想が発展した最も重要な国の一つに日本がある。日本に紹介された仏教は、大乘仏教および多くの儀礼的側面や哲学体系などを有した、より幅のあるコミュニオンであった。このような仏教の形態は、中央アジアや中国における価値概念や実践に繋がるものであるが、それら種々の要素を含んだ形で日本にもたらされたものである。

古代において大乘仏教がスリランカに伝播した際、大乘仏典に見られる八菩薩のうちのいくつかは、スリランカの仏教の中に入り込んだ。

上座部も大乘と同様、最も高い理想として菩薩思想を受容したことは、古代セイロンの首都、アヌラーダプラのマハー・ビハラーヤ寺院に伝わるジャータカの注釈書に明確な記述が見られる。

また、四世紀のシーリサンガボーディ王をはじめ、古代セイロンの王たちは菩薩の称号を付していたことが多くの碑文や書物の中に見いだせる。マヒンダ王四世は「菩薩だけがスリランカ(セイロン)の王になれるであろう」と宣言している。さらに、二人の在家者が善行を行なうと、仏陀の位に至らんことを誓願していることが、五世紀から六世紀の初めに著わされた貝葉によって知られる。

私の主要な興味は、日本の土壌に見いだされる菩薩思想の発展とその役割にある。日本で発

展した菩薩思想とスリランカのそれとの相違を  
検討していきたい。

## ◇世界平和と仏教徒の誓願

ギヤナ・ラタナ

### 十惑の根絶を實踐——釈尊が平和の基盤を達成

釈尊は、道徳原理を心理学的な基盤の上に位置づけた。これが「平和」の第一の基盤である。平和を探求する人は、道義を弁えた人ではなればならない。どうすれば道義を弁えることができるのか。釈尊は「悪を止め、善を為し、心を純粹にしない」という。悪業は貪りと怒りと無知から生ずるものである。

人の心を純粹なものにするためには、瞑想をしなければならぬ。これが「平和」の第二の基盤である。

第三の「平和」の基盤は慈悲である。仏教は

全ての生けるものを対象にしている。仏教の教えの基盤は、生きとし生けるものへの慈悲にある。

世界平和は、口に出して語るその心で、深く実践しなければならぬ。だから仏教徒は、慈悲行と瞑想の實踐を通して、平和を實現しようと努力する。敵に対する慈悲行が友を生む。人が慈悲行を實踐すればするほど、世界は安全で安らぎに満ちたものとなる。

仏教には二種類の瞑想がある。一つは心の安定、もう一つは法の觀想である。瞑想を通して、





心の発達に根ざした内観に到達すると、人は安らぎの最終段階へ進む。苦は何かを考え、苦の起源を考え、苦の滅は何かを考え、苦の滅に至る道を考える。これが人類に対する釈尊の教えであり、世界平和の基盤である。

十惑は人を強固に緊縛する。だから人には生命やものの真実が分らない。もし人が、この十惑を根絶することができるならば、世界の平和が達成できる。

ロンドン・ケンブリッジ・パリ

## 宗教文化の旅

明治大学助教授  
駒沢女子大学講師  
東方学院講師

阿部 慈園

そしてしばらくの養生をよぎなくされたからであつた。

黒田大圓理事長のおさそいをうけて台湾交流の旅に赴いたのは、平成二年十二月(十一日～十四日)のことであつた。それから五年と三ヶ月が過ぎて、久しぶりに海外に出かけるチャンスを得た。というのは、平成三年の晩春から初夏のころ左アゴに悪きものが発見されすぐ手術、

横浜赤十字病院の主治医林洋先生の出国許可をいただいて、忙しい春彼岸会法要の前であつたが、その準備を皆さまにお願いして、思いきつてロンドン・ケンブリッジ・パリに遊んだ(三月十日～十七日)。

今回の旅の目的は、大英博物館所蔵の仏像お

よびヒンドウの神像を拝すること、パリのルーヴルとギメ博物館を訪ねること、招待状をくださったケンブリッジ大学（キングス・コレッジ）のジョージ・パティスン教授と「キリスト教と仏教の対話」をすること、同地に在外研究中の明治大学教授山口泰司先生と善光寺海外留学僧派遣育英生である清水晶子さんに会うこと等である。以下、理事長のおはからいにより旅で見たこと聞いたことを少しく記めようと思う。

## 2

三月十日。JAL 401号機は、快晴の成田空港を十二時十五分に離陸し、ノンストップで約十一時間三十分を要して、ロンドン・ヒースロー空港に着陸した（現地時間で同日午後二時四十分）。日本との時差は九時間である。

ブリタニア・インターコンチネンタルといういかにもイギリス風のホテルにおちつく。部屋

は広く、ゆったりとしているが、暖房はひかえめだ。荷物は大小まぜて六、七個あったので、思い切って十ポンド紙幣のティップをボーイにわたしたら、ボーイは少しく驚いて「サンキュー」。

三月十一日、十時十五分キングスクロス駅からケンブリッジに向かう。五十五分を要しノンストップで同駅に到着。途中は霧で、車窓の景色はほとんど楽しめず。驚いたことに、乗車の時も、車中も、降りる時も切符の点検がまったくない。紳士・淑女として信用しているからという。もし無賃がばれたら、相当のペナルティを払うという。（ただし帰りは、車中で少しくリンゴのほっぺの青年車掌の点検をうけた）

ケンブリッジ駅ホームで山口先生の出迎えをうける。ほぼ二年ぶりの再会を喜ぶ。先生の車で、街なみおよびいくつかのコレッジ（college）をカレッジと現地の人々はいわないという）を

案内していただく。ここには二〇ほどのコリッジ(学寮)があり、そのうち(1)キングス、(2)トリニティ、(3)セントジョーンズが三大コリッジである。これらが兼併統合してケンブリッジ大学(University of Cambridge)と称する。なお、アメリカのカレッジとちがい、イギリスのコリッジは、大学から大学院博士課程までをカヴァーする。

街と大学の印象を同行の家内の手記に托そう。

車窓から見るケンブリッジの街はまるで絵のようで、なつかしく心がおだやかになる。出口保夫著『イギリス四季暦』の雄大氏のイラストが頭にうかぶ。時間が止まってしまったような街。大木と緑の芝、スノードロップ(雪のしずく)の白、クロッカスの紫と黄、ヒヤシンスと水仙はいまだつぼみ。静まりかえった大学構内。窓という窓に勉

強している学生の影。ケム川にはおしどり・かもめ・白鳥。北海から直接吹きつける風は冷く、頭の芯をキーンと痛くさせる。

夕方、街から車で三〇分ほどのイリーター大聖堂を訪う。何と六七三年の創立と聞く。近くのパブのドロツとしたギネス・ビール(エール)も美味しかった。

同夜は山口先生の奥さま手づくりのおいしいビーフシチューをいただく。清水晶子さんとお嬢さんの菜生子さんも寮からかけつける。先生宅で拝宿させていただく。

三月十二日。清水さんが留学するルーシー・キヤヴェンディッシュ・コリッジ(Lucy Cavendish College)を訪ねる。寮の前庭には桜の花とみまがうほどのアーモンドの木がかれんなピンクの花を咲かせていた。清水さんは昨年九月に同コリッジの大学院コースに入り、本年八月末まで



清水晶子女史と筆者

ルーシー・キャヴェンディッシュ・コリッジの校章



に一万二千字よりなる「インドのジャイナ教諸派の儀礼の比較研究」(A Comparative Study of Ritual Practice in Different Jain Sects in India)と題するエム・フィイル (M.Phil.) 論文をまとめつつある。寮生活の良さを彼女はいう。

「僚友は困っていると何かと親身になって助けてくれます。特に英語についてクラスメートは助けてくれます。ノートも貸してくれます。ただし、個人的な領域には決して踏みこみません。慎しみ深く、いらぬおせっかいを焼きません。大人の間関係を持します」と。清水さんは、朝から晩までの研究三昧で日本にいる時より、より若々しく見えた。

山口泰司先生は一昨年(平成六年)四月より二年間の在外研究のチャンスを得てケンブリッジ大学のキングス・コリッジの客員研究員かつ、ハイ・テーブル (High Table) のメンバーとして、比較宗教学とりわけ科学と宗教との関係、

その境界領域と接点を求める研究をされている。具体的にはダニエル・デネットの科学哲学とインドのオーロビンドの宗教哲学の比較研究である。

先生の愛娘・菜生子さんもウルフソン・コリッジの神学・宗教学科の学部一年在学中で、(1) 倫理学、(2) ユダヤ教、(3) キリスト教とヒンドウ教の対話の三コースを採り、外国語として古代ヘブライ語を週三回学んでいる。近い将来『旧約聖書』を原語で読めるようになるためという。

筆者とパティスン教授 (Professor Dr. George Pattison, Dean of Chapel and Director of Studies in Theology) との対論のほんの一条もいそえておこう。ケンブリッジが誇る高名な教授方の写真が飾られた、風格のある教授控室で質素な昼食をいただいきながら、

「曹洞宗の教義の特徴とは何ですか?」  
とまず聞かれた。山口先生に助けられつつ、た

どたどしいインドアクセントの強い英語で、

「悟りを目的とした修行ではなく、証上の修  
です。師から弟子へ法(真理、ダルマ(dharma))  
が、一器の水が一器に移されるがごとく伝え  
られます。そのダルマとは、いわば何も引か  
ず、何も足す必要のないものであります」

と説明した。教授は間髪を入れず、

「では、発達も発展もないのですか」

と切りかえす。小生は、

「完結し、完全なものならば、発達も発展も  
必要ありません」ややあって「あたかも『バ  
ガヴァッド・ギーター』の目的のための行為  
ではなく、行為のための行為、スヴァダルマ  
(svadharma)としての行為、ヴィシユヌ神  
に捧げられた行為に似ています」

と答えた。教授はむつかしい顔をされていたが、  
少しはわかったように、わたくしには見えた。

### 3

三月十二日午後四時、ロンドンに戻る。タク  
シーで大英博物館 (British Museum) に乗りつ  
ける。五時までの一時間弱、東洋室のインド・  
コレクションを急ぎ見る。明日もまた来ること  
にする。夜は、やはり明治大学からロンドン大  
学へ在外研究のために滞英中の三上昭彦先生  
(イギリスの教育制度の研究)のお話をうかが  
いながら夕食をとにする。ブリタニア・ホテ  
ル再泊。

三月十三日の午前および午後の二時すぎまで、  
ふたたび大英博物館で時をすごす。インド・コ  
レクションを再覧する。奈良康明先生編集『N  
HK大英博物館 インド・仏教美術の開花』(日  
本放送出版協会)所収の写真の現物を目のあた  
りにすることができ、感激もひとしお。アマラー  
ヴァティーよりの欄楯等はガラス扉とびらでさえぎら

れていて、かいま見るのみであった。

同室の中央アジア・コレクションもつぶさに見た（長沢和俊編『同 中央アジア・東西南の十字路』参照）。加えて、ロゼッタ・ストーンに手を触れることができたのはうれしきことであつたが、エジプトの棺とミイラ特に年若い王子のミイラを見た時は「ここまで持って来なくとも」と痛ましく胸つぶるる想いがした。

三時には、ロンドン大学の教育研究所に赴き、三上先生から同研究所の図書館を案内していただいた。この研究所は教育学に関しては世界一の規模を誇っているという。つづいてアジア・アフリカ研究センター、ソアーズ (SOAS, School of Oriental and African Studies) の図書館にも連れて行っていただく。同日本研究センターのコーディネーター、クレア・ドールン女士よりプロスペクタス等の資料をもらう。鎌倉・豊島屋の「明暗」をおみやげにとわたした

らひどく喜んでくれた。彼女は二年間、九州に留学したという。東方学院講師の津田真一先生（本年四月より国際仏教学大学院大学教授）が平成七年一月から三月までこの客員教授をつとめたが、そのことを知っているかとなぞねたが、はかばかしい答えはかえってこなかった。同夜もブリタニア・ホテル泊。明日はあこがれのパリだ。荷物のパッキングに一時間もかかってしまった。

#### 4

三月十四日。バッキンガム宮殿で記念写真を撮り、ウエストミンスター大聖堂にお参りして、ウォータールー駅に向かう。ウォータールーはベルギー・フランスのワテルローに相応する。同駅からユーロスターに乗り込む。ドーヴァー海峡を海底トンネルで通過するのはほんの二十分かっただけであつたが、その乗り心地は絶



妙であった。パリ・ノル（北）駅までには三時間ほどを要した。

ニッコー・ド・パリ・ホテルで荷をほどこき、身体を休めていると、部屋の電話がけたたましく鳴った。萩原伊玖子さん（夫君は前欧州東銀支店長）である。

「明日お会いしてもよいのですが、もしよろしければ、ブローニユの森を散策しませんか？ 六時三〇分にはホテルにうかがいます」

と。萩原さんは明治大学の宮内（萩原）芳子助教授（仏文専攻）の義理のお姉さん。小生が宮内先生に「今度パリに行きます」といったら「では兄嫁に会ってください」とわざわざパリに連絡をとってくださった。彼女と小生とは平成三年四月明大奉職の同期の桜である。

ホテルのロビーで、萩原さんとは昭和六十二年中村元先生を団長とする、東方学院韓国宗教

文化の旅で一緒したことを思い出した。彼女はとうにそのことに気付いておられたが、当方は失礼してしまった。パリに来てまで、中村先生のおかげ、東方学院のご縁を感じて家内ともにもありがたく肝に銘じた。

たそがれのブローニユの森の散策。くれなずむ細長い人造湖をぐるりとまわりながら、光りに照らし出されるエッフェル塔の時々眺望は幻想的でした。湖のそばのごく簡易なレストランで、彼女からフランス料理の手ほどきをうけながら、パリ第一夜を芳醇なワインの酔いとともになすました。

三月十五日。ギメ博物館の本館は修復中で入館不可であったにもかかわらず、B・フイーエ（Fouille）先生の特別のはからいでクメールのジャヤヴァルマン七世の胸像やターラー女神像等を拝することができた。また、『日本の開国―エミール・ギメ あるフランス人の見た明治』

(創元社、原題は“Grand le Japon s'ouvrit au monde”)の著者の一人、尾本圭子先生に同館で会い、持参した同書にサインをいただいた。別館の日本コレクションは二時間を費やして、萩原さんの懇切丁寧な説明をうけながらつぶさに見ることができた。近くのチエルニスキ博物館のマンダラ等も圧巻であった。

その夜は、萩原さんよりかつて修道院であった所に建てられたというレストランに招待された。エスカルゴと鴨の料理に堪能した。すでに桜咲くニッコー・ド・パリに戻る。明日の夜は、シャルル・ド・ゴール空港から成田へ。ふたたび荷物のパッキングに精を出す。

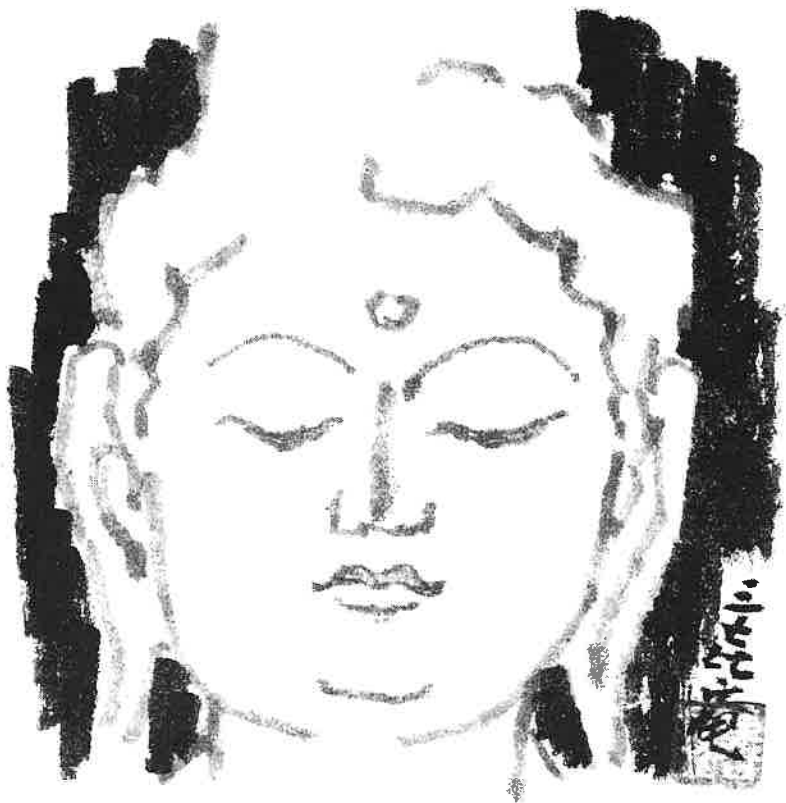
三月十六日。ルーヴル博物館へは家内と二人で行く。モナリザの微笑とミロのヴィーナス像に会えればよい。モナリザの絵にはガラスのおおいがかけられていたが、本物はやはりちがう。いく度かシャッターを押したのだが、帰国後の

現像写真の中にはモナリザ夫人はなかった。ミロのヴィーナス像はちゃんと写っていた。ガラス等のおおいがまったくなく、触れようと思えば触れることができる。オリジナルのヴィーナスはやはりすばらしい。

ルーヴルを出て、セーヌ河ぞいの道を散策しながら、シテ島まで歩くことにした。途中、たぐさんの簡易の本屋さんを横目にしながら、ノートル・ダム大聖堂に着く。一一六三年の着工でその後二五〇年をかけて完成した。「バラ窓」と呼ばれるステンドグラスは、自らを仏教徒であることを忘れさせるほどだ。寺院のすぐわきにある喫茶店(カフェ・ノートル・ダム)で、家内はカフェとケーキ、小生はビールを注文し、少しく腹ごしらえをして、いよいよ帰国の途についた。

(横浜善光寺留学僧育英会参与)

(一九九六・四・一一)



# ワットパクナム寺 表敬訪問団随行記

竹内正躬

私は十数年前から上座部佛教國『タイ』訪問を念願として居りました。この間、バンコック観光旅行に参加する機会はありましたが、私の願いとする佛教國で王国『タイ』を見聞する旅とは無縁のものでした。

今回、神奈川第二宗務所第五教区主催の「ワットパクナム寺表敬訪問団」結成を知り、率先参加を申し入れました。ところが、出発直前に家

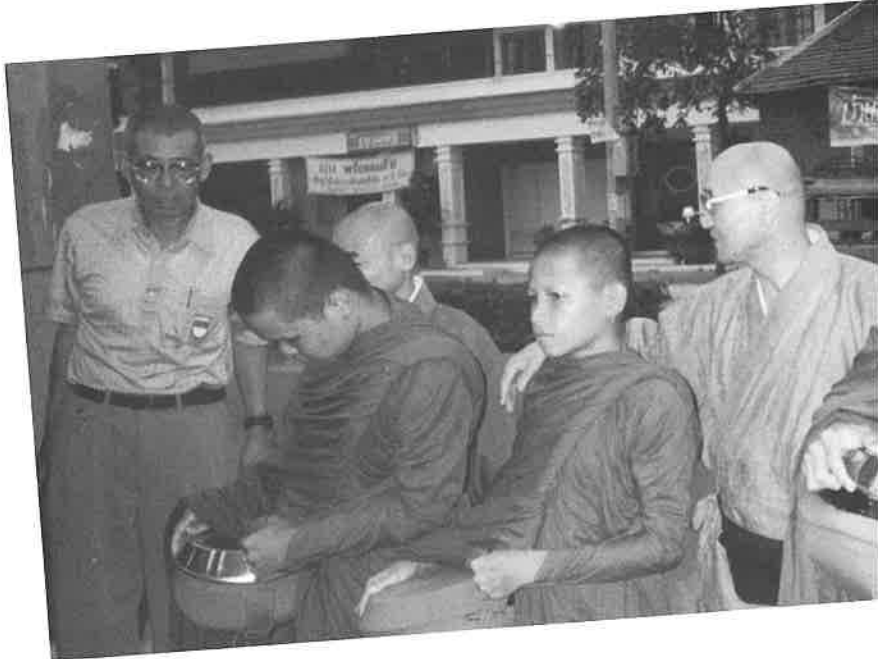
右・筆者



族がこの参加を知り、八十九歳の高齢であり同行の人々に迷惑をかけるからと中止するよう申してきました。私は一寸躊躇しましたが、お粥のパック五ケ・御茶のパック五ケ・小型の電気ポットを用意しての出発となりました。

出発初日、バンコック空港で国内機に乗り換え古都チェンマイ市の宿舎に夕刻に到着。ホテルのロビーに天皇・皇后陛下の宿泊記念写真が飾られて居り驚きの声が挙がりました。

翌朝は四時起床。ホテル前の小径で托鉢僧を待つ事数分。裸足で首から穀物を入れる頭陀袋と両手に鉢を掲げて、僧侶達が音もなく暗闇の中から浮き上がってくるような感じでした。用意した紙幣を鉢の内に入れると合掌にて受け当方も合掌にて応え、言葉は不要で所謂阿吽の呼吸と言うか一瞬にして視界から消えていった。托鉢行を見送るという念願の体験をしました。寺院五時にドイステップ寺院に向かいました。



から「北方のバラ」と称されるチェンマイ市を一望できる筈でしたがかすみの中でした。

熱帯樹林の山頂に金色の舍利塔をはじめ、朝日に燦然と輝く堂塔は、まさに聖地と思わせる幻想の天地でした。ドイステップ寺の入口から車を乗り換えメオ族の集落を経てチェンマイ市内へ戻りました。チェンマイ寺院では、大勢の市民が天を仰いで、七十年に一回という金環蝕を観測していました。わたしにとりましても初めての経験で、難値難遇の好機会でした。午後、国内便でバンコクに戻りシャングリラ・ホテルに投宿しました。

翌日は、ワットパクナム寺を表敬訪問しました。十時に、大殿と云うべき大広間に到着し、三百人程の修行僧と昼食を共にしました。修行僧は二尺程高い所で、私共はテーブルで同じ食事をとりましたが、一段下の床の上では、約百人位の市民が、ある者は正坐し、ある者は胡坐

で、この食事を見守っておりました。これらの人々は本日の食事を寄進した人たちです。

食事の後、僧侶が読経し、退場する際、人々は合掌して見送り、この時の表情は、とても満ち足りたものでした。わたし共は僧侶の後から退場しましたが、聞くところによりますと、これら市民の人達は残飯を一匙ずつ載いて帰ったとの事でした。それからこの大広間から、本堂にあたる大塔に移りました。この堂内の正面には、金色燦然と輝く高さ数米程の本尊釈迦牟尼仏があり、この前で、団長を導師に全員で般若心経を読経し表敬訪問の祈りを捧げました。引き続きいて、団長が任職に訪問の挨拶を言上した所、先方より歓迎の言葉と記念品を頂き、私共は満ち足りた気持ちで訪問の行事を終えました。仏教は、タイ国の国教で僧侶は国民の畏敬的のです。男子は中学校卒業より大学卒業の間必ず一年間仏門に入り修行する様です。少年僧か



筆者(左)とパクナム寺住職(右)

ら最高位の老僧まですべて同じ淡木らん色の法衣を纏い、所持品や外見から、私には僧侶の階級を見分ける事はできませんでした。堂内はすべて石畳で、僧侶も一般市民も裸足で顔面を床に擦り付け体を大地に投げ出すいわゆる五体投地の拝礼を三回おこなっており、釈尊在世の証跡を見る思いでした。私はひとりで本堂に戻り、再度、本尊釈迦牟尼仏に礼拝を致しました。仏様の口元にはかすかな微笑が見られ、「老僧良く来たな」と言っている様であり、私の妄想と思いつながら退山しました。

今回の旅行の最終日、古都アユタヤ訪問は河川出水のため中止となり、残念の余韻を残し、無事成田に帰ってきました。

# ワットパクナム寺表敬訪問団随行

## 思い出の句

伊藤 美智子

黄衣の僧あふれチエンマイ秋安泰

菩提樹の蔭をくぐれば秋気澄み

日蝕に秋のメオ村総学者

月光を奏でるプールの水沫き

紫蘭咲くホテルロビーは別世界

悠久のメナムを染めるビルの灯

土囊を足探りゆく秋出水

マーブル寺三部合唱読経澄み

エメラルド寺風鐸秋空ささやけり

ラマヤーナ壁画をなでる秋日和

秋衣釈迦参拝団に笑みたもう

秋暑し僧の瞳は釈迦牟尼仏





# ワットパクナム寺 表敬訪問団随行記

竹内正躬

私は十数年前から上座部佛教國『タイ』訪問を念願として居りました。この間、バンコック観光旅行に参加する機会はありましたが、私の願いとする佛教國で王国『タイ』を見聞する旅とは無縁のものでした。

今回、神奈川第二宗務所第五教区主催の「ワットパクナム寺表敬訪問団」結成を知り、率先参加を申し入れました。ところが、出発直前に家

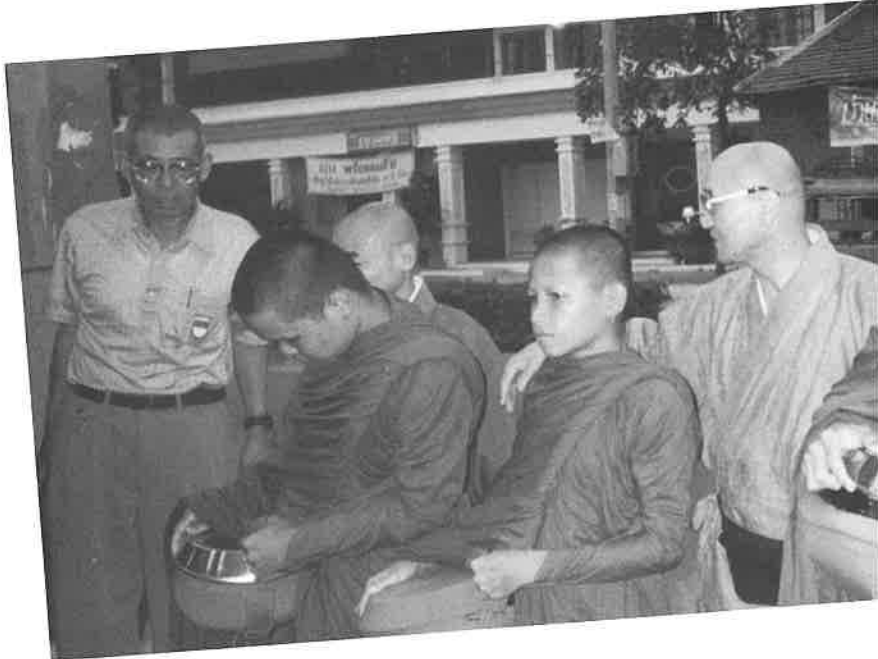
右・筆者



族がこの参加を知り、八十九歳の高齢であり同行の人々に迷惑をかけるからと中止するよう申してきました。私は一寸躊躇しましたが、お粥のパック五ケ・御茶のパック五ケ・小型の電気ポットを用意しての出発となりました。

出発初日、バンコック空港で国内機に乗り換え古都チェンマイ市の宿舎に夕刻に到着。ホテルのロビーに天皇・皇后陛下の宿泊記念写真が飾られて居り驚きの声が挙がりました。

翌朝は四時起床。ホテル前の小径で托鉢僧を待つ事数分。裸足で首から穀物を入れる頭陀袋と両手に鉢を掲げて、僧侶達が音もなく暗闇の中から浮き上がってくるような感じでした。用意した紙幣を鉢の内に入れると合掌にて受け当方も合掌にて応え、言葉は不要で所謂阿吽の呼吸と言うか一瞬にして視界から消えていった。托鉢行を見送るという念願の体験をしました。寺院五時にドイステップ寺院に向かいました。



から「北方のバラ」と称されるチェンマイ市を一望できる筈でしたがかすみの中でした。

熱帯樹林の山頂に金色の舍利塔をはじめ、朝日に燦然と輝く堂塔は、まさに聖地と思わせる幻想の天地でした。ドイステップ寺の入口から車を乗り換えメオ族の集落を経てチェンマイ市内へ戻りました。チェンマイ寺院では、大勢の市民が天を仰いで、七十年に一回という金環蝕を観測していました。わたしにとりましても初めての経験で、難値難遇の好機会でした。午後、国内便でバンコクに戻りシャングリラ・ホテルに投宿しました。

翌日は、ワットパクナム寺を表敬訪問しました。十時に、大殿と云うべき大広間に到着し、三百人程の修行僧と昼食を共にしました。修行僧は二尺程高い所で、私共はテーブルで同じ食事をとりましたが、一段下の床の上では、約百人位の市民が、ある者は正坐し、ある者は胡坐

で、この食事を見守っておりました。これらの人々は本日の食事を寄進した人たちです。

食事の後、僧侶が読経し、退場する際、人々は合掌して見送り、この時の表情は、とても満ち足りたものでした。わたし共は僧侶の後から退場しましたが、聞くところによりますと、これら市民の人達は残飯を一匙ずつ載いて帰ったとの事でした。それからこの大広間から、本堂にあたる大塔に移りました。この堂内の正面には、金色燦然と輝く高さ数米程の本尊釈迦牟尼仏があり、この前で、団長を導師に全員で般若心経を読経し表敬訪問の祈りを捧げました。引き続きいて、団長が任職に訪問の挨拶を言上した所、先方より歓迎の言葉と記念品を頂き、私共は満ち足りた気持ちで訪問の行事を終えました。仏教は、タイ国の国教で僧侶は国民の畏敬的のです。男子は中学校卒業より大学卒業の間必ず一年間仏門に入り修行する様です。少年僧か



筆者(左)とパクナム寺住職(右)

ら最高位の老僧まですべて同じ淡木らん色の法衣を纏い、所持品や外見から、私には僧侶の階級を見分ける事はできませんでした。堂内はすべて石畳で、僧侶も一般市民も裸足で顔面を床に擦り付け体を大地に投げ出すいわゆる五体投地の拝礼を三回おこなっており、釈尊在世の証跡を見る思いでした。私はひとりで本堂に戻り、再度、本尊釈迦牟尼仏に礼拝を致しました。仏様の口元にはかすかな微笑が見られ、「老僧良く来たな」と言っている様であり、私の妄想と思いながら退山しました。

今回の旅行の最終日、古都アユタヤ訪問は河川出水のため中止となり、残念の余韻を残し、無事成田に帰ってきました。

# 『ダナ・パーラミター』

## 禅マウンテン・モナスタリーにおける社会福祉活動の報告

横浜善光寺留学僧 遠藤博因

去る平成七年十二月十六日、禅マウンテン・モナスタリーにおいてダナ・ダイナー（コミュニケーション・ギャザリング）と称する社会福祉活動が行われました。ご承知のようにサンスクリット語のダナという言葉は、日本語の檀那という言葉にもなっているように、本来の語意は施しや布施を意味します。そして、ダナ・パーラミータ（波羅蜜）とも言われるように、我々佛教徒の実践徳目の一つでもあります。またこの

ダナという語は英語ではドネーション（寄付）と訳されており、発音が似かよっているところが興味深いところでもあります。

さてこの催しは今年で八回目を数え、禅苑の近隣に住む経済的に恵まれない人々を招いて、クリスマスの楽しい一時を過ごしていただくというのが目的です。準備には約一ヶ月前からこの禅苑の雲水修行者、長期参籠者が中心となって、福祉施設への案内、隣接地域の公共揭示

板へのポスター貼り、またこの催しに協賛していただけるよう地域の団体や個人に金銭や品物でのドネーション（ご喜捨）を呼びかけました。その結果約百五十にものぼる企業・商店・個人の方々からの金銭や品物（食料品や生活用品）でのご喜捨をいただきました。また数日前より約二十名の参禅会員のボランティアが加わり、ダイニングホールの飾りつけ、プレゼント（ご喜捨による衣類や日用品、子供の玩具など）の包装、当日の食事の下準備等に追われました。

当日は昼と午後四時の二回に分けて、二地域より人々を招きました。お昼は、車で四十分程のキングストンという街より、バス会社のご喜捨により大型のスクールバスを二台運行してもらい、午後の四時も車で二十分程のウッドストックという街より、バスとワゴン車で人々を招き迎えました。集まった人々はナーシングホームと呼ばれるいわゆる老人ホームの方々、また

州より生活援助を受けているロイインカムのの方々、そして一般にシエルターズと呼ばれるホームレスの方々。シエルターというのはホームレスの人々に一晩ないし数日間夜の宿泊のみを提供する施設でありアメリカではよほどの田舎を除き、公共、私設ともどもごく一般的にあるそうです。またホームレスの人々は、このような施設を点々としているというのが現状であるようです。お昼と夕方あわせて約三百名の方々が集まり、一人一人紙皿を持って給仕のテーブルに並んで、ダイニングホールで食事をし、ボランティアによるクリスマスソングのバンド演奏などで賑やかな一時を過ごしていただきました。

この行事を通してアメリカ社会のほんの一面ではあります。が体験することができ、この禅苑の雲水修行者や参禅者の皆さんからも、この国が抱える人種や貧富の格差の問題について聞く

ことが出来ました。まだまだこの地域に住んで  
いながら、ここに来ることも出来ない、情報も  
得ることも出来ないでいる人々もたくさんいる  
ということですよ。



我々は「上求菩提、下化衆生」という誓願を  
唱えながらも、いかに実践するかということに  
ついてはなかなか答えができませんが、改ためて  
考えさせられる経験となりました。

# 育英生論文集の第二集を發行

——横浜善光寺留学僧育英会——

海外に留学僧を派遣して人材の育成をはかり、仏教の振興、世界の平和に貢献しようとして、十二年前に留学僧育英会を設立し、これまでに七十人にのぼる留学僧を海外に派遣または日本への留学生を受け入れてきた善光寺（黒田武志住職＝理事長）は、このほど育英生の第二論文集を發行した。写真。平成三年に第一論文集を發行しており、第二集はその後の第八回生から第十一回生の論文や育英会の佐藤俊明常務理事、東隆眞理事（駒沢女子大学学長）の韓国・タイ訪問記、育英生OBの寄

稿論文、理事長である黒田住職の「十二年の歩み」などを掲載している。

黒田住職は巻頭に「なぜ留学僧育英会をつくったか」を執筆。若き日に日本を托鉢行脚し、苦難の中で「生かされている」ことに氣付いた貴重な体験が人材育成・仏教振興・世界平和の大誓願を促したと述べている。「わたしが若い僧侶を見ると、どうしてもあのころの自分と照らし合わせてしまいます。どんなにづらい体験も、みじめな体験も、すべて修行となり、肥やしとなる。あの時の感動を





多くの人々と共に味わいたい。そんな気持ち  
が、わたしに『育英会』をつくらせたのです。」  
と。

鶴見大学の高崎直道学長と愛知学院大学の  
小出忠孝学長が序文を寄せている。高崎学長  
は、この事業を「日本の仏教にとって大いな  
る光明」と讃え、小出学長は「代償を求めな  
い大慈悲」の精神をそこに見ている。善光寺  
所蔵の故・中川一政画伯の書、今年三月に逝  
去した伊藤三喜庵画伯の挿し絵、写真家・樋  
口英夫氏のアンコールワットの写真が目を楽  
しませてくれる。三千部を印刷し、宗門内外  
の関係機関や大学などに約二千部を配布した。  
編集・印刷は中外日報社。A五判・三一八ペ  
ージ、頒布価二千円

## 論文集発刊に寄せて

——お便りありがとうございました——

庭野 日鏡先生 立正佼成会会長

謹啓 薫風の候、益々ご清祥の御事とお慶び申し上げます。

さて、この度は、横浜善光寺留学僧募集要項並びに論文集をご送付賜り、篤く御礼申し上げます。

国際的視野を持った人材の育成は、當に時代の要請です。すでに十五年前に、このように意義ある育英会を設立された黒田先生の慧眼、心から敬服致しております。一層のご健康とご活躍をお祈り致します。

まずは右、書状を以てお礼のご挨拶を申し上げます。

合 掌

清水谷 孝尚先生 浅草寺貫首

この度は「論文集II」をご恵与下され仏恩のほどまことに厚く御礼申し上げます。御無沙汰のみお許し下さい。日頃のご活躍只々敬仰しております。「対談」の中の「無量無辺の方便があるけれども、人の悩み、苦しみを救い抜く……」のお言葉「肝銘」の極みであります。

齋藤 文夫先生 参議院議員

拝啓 時下緑風の候、いよいよご清栄のことと拝し、大慶に存じ上げます。

さてこの度は、留学僧の論文をご惠贈下され、誠に有難うございました。

黒田先生の仏教を通じて、世界と人類の平和のためにご尽力されるお姿に、心から敬意を表するものであります。

先生のご努力が、やがて、世界中に燎原の火となって、世界を照す日が必ず到来するものと確信いたしております。

末筆乍ら、先生の益々の御活躍とご健勝をご祈念申し上げます。

敬 具

芦辺 謙禅老師 耕雲寺・東京都世田谷区

此の度は大変貴重な留学僧の論文集を御惠送賜りまして、有難く厚く御礼申し上げます。早速順次拝読させて頂いておりますが、大変貴重な体験を通じての論文ばかり、頭の下がる思いで拝読いたしております。それよりも何よりもこの育英会を主宰されておられる御老師様の御体験こそ正に感激いたしました。

人生には御苦勞と御忍耐があつてこそ御発展と御隆昌があると伺っておりますが、御老師こそその御努力が今日の国際的な御立派な大事業が実を結び、多くの人材を輩出させておられることと存じ、心から尊敬の念を禁じ得ません。本当に御苦勞様です。

氣候不順な折柄、御法体くれぐれも御大切に。

合 掌

横尾 太寿先生 横浜市

先般は育英会論文集をお届け下さり、厚く御礼申し上げます。留学生個人個人のものとはもとより内容も大変な充実ぶり感激いたしておりますが、偏に御老師のご指導よろしきを得てのこと、と常ながら敬意を表しております。

さて、桐ヶ谷寺様からのご案内で、故前角老師の一周忌がめぐって参りました。月日は水のように流れてまことに早いものでございますね。四十年の昔日を想いうた、寂寞の念深まるばかりであります。是非出席いたし親しく御焼香させて頂きたい所ですが、丁度、院台自坊の開山忌が重なり他出いたさねばなりません。まことに申しわけないことですが、本学（鶴見大学）の宮本学監が出席とのことですので、同行二人の本意を以て御焼香下さること、いさゝか安堵いたしております。

大学も五月末をもって新生本山一泊参禅会が終り、また決算理事会も終え、厳しい経営環境の中で和合敬愛の意を用いて学事進行に邁進いたしております。

右意中をお伝えいたし要用のみ擱筆いたします。

村岡 弘義様 ナリス化粧品社長

平素より当社には色々とお厚情賜わり誠に有難く厚く御礼申し上げます。

先般、留学僧募集要項ならびに育英生論文集を御送付賜わり、確かに拝受致しました。日々人材の育成を通じ仏教の振興に御尽力されて深く感銘を受けております。

どうか方丈様をはじめ皆々様の御活躍と御健康を心よりお祈り申し上げます。

安齋 伸先生 上智大学教授

お元気で御活躍のことお喜び申し上げます。

黒田老師の国際的、国内的 仏教化活動には心から敬意を表せていただきます。

また、今般は貴寺育英会の論文集を御恵送頂き厚く御礼申し上げます。心して拝読させていただきます。

アメリカの民主主義はご承知のように神のものと自由と平等に立脚しておりますが、我が国の民主主義は神仏のものと民主主義とはなっておらず、人間の民主主義の次元にとどまっておりますので、政治上位の宗教法の制定問題で、信教の自由と脅かされており、宗教的倫理を欠いた政財界の混乱と大欲は目を覆うばかりであり、家庭の崩壊、教育の偏向と末期的症状を示しております。

このような状況で方丈の活躍は頼もしき限りで伝統宗教教団も方丈を見習ってほしいと願っております。

今後の御活躍を期待しております。

大野 栄人先生 天寧寺・愛知県名古屋市

此の度は『横浜善光寺留学僧育英会論文集』第二号をお送り下さいまして、厚く御礼を申し

上げます。

延べ六十八件に育英金を支給され、私方の愛知学院大学もお世話になっておりまして心より御礼申し上げます。

一 御寺院でよくこれだけの善行ができるものと、ただただ頭の下る思いがいたします。円高で日本へ留学してくる学生たちは、経済的に困っております。留学生にとって善光寺様は、まさしく仏の慈悲そのものでございます。私も困った人には援助しておりますが、全ての人にと  
いうわけにはゆきません。

私もやつと任職になりましたので、晋山式を終えたら、宗教法人の社会福祉事業として、留  
学生のための専用の住居を大学の近くに建設したいと考えています。

これから暑さに向って参りますので、どうか御身御自愛下さいませよう切にお祈りいたして  
おります。

合掌

林 博明先生 東京都葛飾区

『横浜善光寺留学僧育英会』の論文集を御恵贈賜りありがとうございます。貴重な研究員  
の論文を拝読してきますと、方丈様の情熱と意気が感じられます。法燈を継続してくれること  
を信じています。

お釈迦さまの教えを人々が素直に聞き入れてくだされましたら素晴らしいのに、人間は風  
土・文化の相違でむずかしいが、一步一步布教することだと思ふ。今回は対談を興味深く拝読

しました。

時節柄、お身体に御自愛して下さることに、更に育英会の益々の御発展を祈願致します。

久保田展弘様 千葉県船橋市

この度は『横浜善光寺留学僧育英会』論文集第二号、ご恵与賜わりましてまことにありがとうございます。うございます。

先生の若き日のご体験、改めて感慨をもって拝読いたしました。

「生かされていることに気づく」そして「どんな体験も修行である」は、私自身につきつけてかみしめるお言葉です。また、留学僧の方々ならではの、さまざまなお体験も心ひかれて読ませていただいております。どうぞ今後ともご教導賜わりますようよろしくお願い申し上げます。先生のご健康と一層のご活躍をお祈り申し上げます。

松岡 睦雄様 山口県柳井市

先日は素晴らしい留學生の論文集を御恵贈頂き、誠に有難うございました。

檀家二千五百を擁する大寺で、檀務、寺務も想像以上に御多忙、煩雑と思われませんが、それを克服されて、留学僧育英会の偉業、そして次々に素晴らしい本を出版され、そのための長文の執筆、編集、監修等々、まさに超人的な激務と思われませんが、只管に尊い道を歩まれておられるお姿に唯々頭の下る想いでございます。

昨年来、オウム真理教の事件が世間の耳目を集め、同時に既成宗教に対する信頼、期待が大きく揺れているとき、黒田老師を始めとする、真の宗教家が蒔かれた求道精神の種子が芽生え、それをたゆみなく育てられる御努力が実り、芽生えた苗が確実にスクスクと育っている様が見受けられ、日本仏教未だ亡びずの想いを強く感じ居る次第でございます。

今後、も激務のため、健康を損なわれることの無きよう呉々も御自愛下され、益々御健勝にて聖務に御精励下さるよう、心よりお祈り致します。

波多野牧通様 神奈川県茅ヶ崎市

一昨日、五月十五日に育英会論文集第二巻拝受致しました。何時も心にかけていただき深謝致しております。

手に取りまして、五月十五日は、確か、尊敬致しておりました前角御老師遷化されて丁度一年目ではないかと存じ、奇しき御法縁とつくづく感慨にふけた次第です。

本年二月頃、ロスアンゼルスの徹玄老師のグリーンディングカードをいただき、故前角老師の遺影がございましたので、お写真を机上に飾りご老師をしのんでおります。

永平寺の『傘松』に本年正月号から、東京北区昌林寺東堂の郡司博道ご老師が、小生宅の家系図を参照され、波多野家七代考を論述されました。

郡司先生は、これ亦奇しき縁で小生の小学校の先輩であり且つ、私の大叔父の菩提寺でもありましたので、ご挨拶にあがりましたら、三年ほど前の私の『傘松』誌上の文をお読みいただ



いており、それ以来、親しくさせていただいております。そして先生の念願である道元禅師のご研究に及ばずながらお手伝いをしており、『傘松』誌上にふれられておりますので、ご笑覧下さい。

論文集を手にして、黒田様にお会いしたように感じて、長々と書いてしまいました。

渡辺 照夫様 神奈川県

『横浜善光寺留学僧育英会』論文集を恵送賜わり有難くお礼を申し上げます。まだまだ残頁の読後感ではありますが、方丈様の使命感、留学僧の学究、情熱に心打たれるものがございませす。

今後のご継続、衷心より念じて、お礼のご挨拶と致します。

佐藤 幸恵様 宮城県仙台市

先日は論文集お送りいただきましてありがとうございます。

日々の活動が実を結び、形となってあらわれる喜びはひとしおのことと我が身も励まされる思いで読ませていただきました。ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

田中 清高・かほ里様 神奈川県藤沢市

この度は素晴らしい論文集を御送り下さいましてありがとうございます。

始めの方丈様の育英会をつくられるにいたるまでのお話しを書かれた文を読んで、とても感動いたしました。本当に私たちはほとけ様に「生かされている」のであり、「どんな体験も修行」なのであると心にしみいる思いがいたしました。

また育英生の方々の燃えるような熱意とひたむきな御努力を論文を通して強く感じる事ができました。お一人お一人がほとけ様の御心を大切に御自分ができる事を一生懸命になさっていらして素晴らしいと思いました。しかし御苦勞も多いのではと、呉々もおからだを大切になさってほしいと祈りました。

ありがたい御本を本当にありがとうございました。

大濱 正様 万葉洞・東京都中央区

此度は善光寺留学僧育英会論文集を惠送有難うございます。

十二周年、本の中身にも増して大変なご苦勞の積み重ねを心から思います。ゆっくり拝読させて頂きます。

三喜庵先生の仏画のさし絵と中川先生の書と拝見しながら画の素晴らしさと禅僧の墨蹟のよな感じを受け、此の文集にとってもマッチしていて良かったと思います。三喜庵先生が亡くなってお淋しいことと思います。

季節の変わり目どうぞ自愛下さいませ。お礼までに。

藤田 一照様 アメリカ合衆国

「論文集」を送っていただきありがとうございました。多彩な人材が育英会に集って来ていることをあらためて認識しました。今後とも一層発展充実していきますように祈念しております。こちらはお陰様で皆息災にしております。新緑の美しいさわやかな季節を迎えました。前角老師の一周忌法要無事済まされたことと想像しております。最近、徹玄グラスマン師が禅の本を出版され好評のようです。近いうちに読もうと机の上に置いてあります。どうぞお元氣でお過ごし下さい。

合掌





前角老師の大志を  
継承されんことを

長野市四福寺  
藤本幸邦老師様

成寿 拝読 尊兄前角博雄  
師の追悼の諸文を読み、偉大  
な僧宝であられたことを知り  
ました。

尊師と力を合せ正法の興隆  
につくされ国際未路の曹洞禅  
を展開されました事惜みて余  
りあります。

来る二〇〇〇年は道元禪師  
御生誕八百年に当ります。正  
法眼蔵を世界にと念じ居りま  
すが、前角師の大志を尊師が  
継承されんことをお願い申し

上げます。

博雄大和尚大寂定中  
当去来

拝具

善光寺サミットもすんで

長野市善光寺大勸進  
小松老師様

過日、善光寺サミットには  
お忙しい処ご参加を賜り厚く  
御礼申し上げます。速に留学  
資料及び「成寿」ご送付下さ  
いまして有難う存じます。

京都へは週に一度帰山して  
居ります。相国寺の有馬頼底  
師とは昵懇の仲にて仏教会で  
はともども苦勞致しました。

どうか今後共よろしくご交情の程願ひ上げます。先は厚く御礼申し上げます。

何卒御法体おいたいの程

合掌

北米布教の  
礎を築かれた前角師

東京都世田谷区  
山内舜雄様

今般度重なる拙著出版に際し、丁重なる御厚志を頂き深謝申上ます。

旧草七十五帖もあと一卷の第七を以て完稿となりまします。思えば長きご支援を心から感謝致す次第であります。

それにしても前角博雄師の

遷化は北米布教の文字通り主幹にて無念の至りです。遙かに御冥福を祈念すると同時に貴師の重担の益々重からんことを想い、今後の御活躍を期待しております。

想えば前角師渡米の節は、確か昭和二九〇三十年と思ひますが、白純老師は本山副監院にて小生鶴見学園に在り、その縁にて宗務庁からの渡航費を、現鶴見大学副学長横尾太寿師と二人分受領して山下汽船の出張所に払込んだ記憶があります。一人分たしか八万円で、貨客船にて船は横浜からが積荷の都合で神戸へ変ったことも憶えております。

あれから四〇年の歳月が夢幻の如く過ぎ去りましたが、前角師はまことに後世に遺るべき偉業を北米の地にのこされました。戦後における北米布教の礎を築かれました。これも、亡き白純老師の御遺志が遠く北米の地に開花したものだと思ひます。

時節がら法体御健祥にて御消光のことを切念して攔筆します。合掌

自由自在の  
論議なつかしく

東京都世田谷区  
吉津宜英様

この度は、「成寿」第二十五

巻をお届け下さり、心より感謝申し上げます。それにつきましても、前角博雄老師の突如の御遷化は誠に痛恨の極みでございました。私は、昭和六十年に一年間アメリカにおいて研修をさせていただきましたが、その年の十一月の全米の宗教学会に参加し、ロスアンゼルスLos Angelesの禪センターを訪れ、初めて前角老師にお会いしました。また、昭和六十三年に UCLAUniversity of California, Los Angelesでの学会に参加したときも、大変歓待して下さいました。その後、老師が日本に御滞在のおり、桐が谷寺さんの方で同僚の石井修道さんとともに大いに御馳走に

なり、また大いに歓談し、老師の自由自在の御論議を拝聴したことをなつかしく思い起こしております。今回の「成寿」を拝見し、前角老師の御活動の流通分は大きな流れとなって、滔々と流れていることを知りました。有り難うございました。

有り難い  
ご縁を忘れず

東京都世田谷区  
田上太秀先生

お人柄並びにご活躍、ご教化の大なることを教えて頂きました。小生もかつて、ロスアンゼルスに一年間滞在しました折、ロスアンゼルス禪センターを訪ね、大和尚に懇切なるご接待を受けたことを想い出しました。法戦式にも随喜させていただきました。想い出はつきません。有り難いご縁をいつまでも忘れることができません。ご冥福を心から祈っております。

『成寿』冬季号を拝受、拝読させていただきました。

故前角博雄大和尚のご逝去を追悼する特集号で大和尚の

前角老師の  
急逝まことに残念

千葉市  
岩崎 博様

皆々様にはお健やかに  
お過ごしのことと拝察致して居  
ります。成寿二十五巻と平成八  
年度の暦をお送り頂きまして  
有難う御座いました。

前角老師の急逝を知り大変  
驚いて居ります。国際的にご  
活躍され、立派な業績を残さ  
れましたが、まだまだこれか  
らという時に誠に残念に存じ  
ます。方丈様のお悲しみも如  
何ばかりかとお察し申し上げ、  
はるかにご冥福をお祈り申し

上げます。

幼い頃の事を  
思い出しました

茨城県相馬郡  
西方あさ様

成寿をお送り頂きまして有  
難うございました。

「亡き博雄さんの写真が載っ  
ているよ」と叔母から言われ、  
読ませていただきました。幼  
い頃（学生時代）の博雄さん  
の事が思い出されます。もう  
何年も前に週刊誌でしたか、  
アメリカ人の奥様と一緒に紹  
介されたのを見た事も思い出  
されました。私も六十四歳、  
来春は一つ歳を重ねます。戦

争をお互いに通り、青春時代  
も今の時代とは違ったもので  
した。同年代を送った者とし  
て、亡くなられた事は淋しい  
思いが致します。

博雄さんのご冥福を心より  
お祈り申し上げます。

御兄上様の分まで

ご活躍を

横浜市  
石川多加子様

成寿冬季号、其の他諸々の  
お心遣いをいただきまして御  
礼申し上げます。

方丈様の巻頭のお言葉中、  
御兄上様ご逝去のこと初めて  
おうかがい致し唯々驚くばか

りでございます。ご帰国中に  
急逝なさいましたお話、御無  
沙汰申し上げておりました私  
半年後に此の様なお便り申し  
上げますことをはづかしく思  
いつつ、書かせていただきま  
した。

成寿のご本の中で、兄上様  
の御立派なお心とお仕事をう  
かがいますと、おうかがいす  
ればする程に残念な極みです。  
何度かお目にかからせていた  
だきました御母様の面差しに  
似ていらつしやるお写真、も  
つたいない事でございます。  
唯々御冥福を祈らせていただ  
きます。

本年は日本の国にとつても

いろいろな不幸な出来事の多  
い年でした。十二月の新聞紙  
上で上智大学での「生と死を  
考える会」のセミナーの一端  
の記事を読ませていただきま  
したが、こうした折に「大衆  
のための仏教の教え」を説い  
ておられる方丈様にお会いし  
たことを常に幸と致し、不勉  
強ながら心強く感じさせてい  
ただいております。老化現象  
でヒザ等を痛めまして失礼を  
重ねておりますが、どうぞ方  
丈様には益々ご健康で、御兄  
上様の分までご活躍のほど祈  
り上げます。

お志の尊さ  
身にしてみても

東京都港区  
山口 修様

京都より戻り「成寿」拝見  
いたしました。いつまでもお  
心にかけて頂きありがとうございます  
ございます。毎号巻頭の美しい  
珍しい写真に魅せられ、珠  
玉の文章ぞろいに感銘を受け  
ております。今号でも「宗派  
を超えた仏教の人材育成」と  
いう文に想い新たなるものが  
ございました。私の勤めてい  
る大学は浄土宗ですが、かね  
ておせわを受けた者からいろ  
いろ伺っており、お志の尊さ



を身にしみて感じてきました。いまの世では僧籍にある者でも本当に学ぼうとする者は少く嘆いていますが、数人であつても正しい道に進んでくれる者があればと期待している此頃です。駒沢女子大の話、そして前角師の偉大なる業績、ありがたく拝読しました。今後いつ迄もご壮健にて仏教界にご貢献遊ばされるよう祈つてやみません。

成道会に  
成寿を拝受

埼玉県川越市  
今泉源由老師

本日は成道会。成寿二十五

巻を拝受し感慨もひとしおです。駒沢学園の隆盛、前角老師の御徳、善光寺様の益々のご教化活動、衷心から敬意を覚えます。先般善宝寺様で大八木老師にお世話になってまいりました。諸先輩老師方のご活躍ご精進にとてもかなわないと己れのふがいなさを思っています。

ご尊躰堅固を祈念申し上げます。ありがとうございますました。

益々のご活躍を

栃木県宇都宮市  
大嶋 正様

成寿二十五巻、有難く拝受、拝読いたしました。この度は国際的に仏教の伝道教化に多大のご功績を残されたご令兄前角老師のご急逝、先ず心よりお悔み申し上げます。何時もながら、記事にはたいへん勉強させられますが、今回の馬場康一氏の記事は、貴君の現在の素晴らしい姿がよくわかり、又、同級性伊藤博君（私の受持だった）のミヤンマーの紀行文も、彼から一度便り

をもらったことがあるだけに、たいへん懐かしい思いで読みました。三喜庵先生の仏画も何時も魅せられております。兎に角、教え子たち、みんなが立派になればなる程、あの頃が懐かしく思い返されるものです。

世の中変って、LP、EPが出たての頃、高価な盤をもとめて、クラシックを楽しんだのが夢のよう。今は格安で手に入るCDでまだ音楽を楽しんでいます。来年はあなた方も大高卒後四十年、十年会で会えたらなど思いますが、生憎月おくれお盆中だから無理でしょうね。書くことは一

杯あるけれど、この位にします。私は何時の間にか七十三です。今のところは無事消光といったところでです。

末筆ですが、どうぞご自愛のうえ、ちよっとおかしくなっている世の中のために、益々ご活躍なされるよう祈ります。

心強い  
方丈様のお考え方

千葉県我孫子市  
山崎康弘様

「成寿」冬季号をお送り賜りありがとうございます。

先ず、故前角老師が禅仏教の新しいあり方とそのご布教

のために実に多くの御業績を残されたかということ、そして如何に多くの方々から愛惜の念を持たれつつ御他界をなされたかということが良く判りました。僕にとりましては、ほんとうに一時の事でございましたが、ロスアンゼルスでございましたが、懐かしお逢いたした時のことを懐かしく又、有り難く想い出した次第です。改めて前角老師の御冥福をお祈り致します。

ばばこういち氏との対談の記事を拝見致しました。方丈さんの御意見、お考え方を心強いと思います。本当に片端ですが、多少なりともお手伝いをさせて頂きたいと思いま

す。我々の年代は、古代のインドの人生観によりますと、「林住期」にあるのだそうです。これは家庭や日常の経済活動を一時離れて、森を逍遙しながら、別の新しい価値観を求める人生のステージという様な意味ですが、こうした年代にさしかかって改めて人生を考え、修しているところです。今後方丈さんのお手伝いをさせて頂きながら、一方で又学ばせて頂きたいと思っております。家内の作品の記事をご掲載頂き、ありがとうございます。小生の方は相変らぬ会社勤めの一年でございましたが、家内の方は超多

忙な一年でございました。来年はどうなりますか。

今後ともご指導を賜りたく、どうぞよろしくお願い致します。

お目にかかれないうまま  
永久にさよなら

千葉県四街道市  
大貫叶子様

いつもご本をお送りいただき有難うございます。先頃は博雄老師のご逝去、あまりの突然の訃報に言葉もありませんでした。おくれはせながらお悔み申し上げ心よりご冥福をお祈りいたします。博ちゃんには四十年位お会いできま

せんでした。光真寺のご兄弟の皆さまには何事かでもない限り（全員には）お目にかかれませんが、まさかお目にかかれないうまま永久にさよなら等とは。お写真を拝見し、少しは年齢的に変りましたが昔のままのお顔で、今さらながらなつかしく拝顔させていただきました。ご兄弟の中には武志さんに一番よく似ていらしたですものね。そのうち大田原のお墓にお参りさせていただきます。どうぞお身体大切に。



開山忌と辞令交付式に  
招かれて

横浜市  
土屋武彌様

昨日は開山忌並びに留学僧  
海外派遣辞令交付式へのお招  
きを賜り厚くお礼を申し上げ  
ます。開山忌では仏教儀式の  
厳かな雰囲気とご先人様のご  
業績・ご遺徳を深く拝見させ  
ていただくことができました。  
また、辞令交付式では仏教の  
振興を図り世界平和・人類の  
発展を願って留学僧の派遣・  
受入れを實行され、十二年間  
も継続されておられる信念には  
感銘させられました。

私事ですが二十一歳の時、

大学からペンシルバニア州立  
大学へ留学する勧めをいただ  
いたことがあります。私自身  
は行きたくて行きたくて仕方  
がなかったのですが、身体が  
弱って年々年老いていく父、  
父親に代って働く母を見て断  
念したことが想い出されまし  
た。辞令交付を受ける若い  
方々を眼前にして、この方々  
はどのような環境下におられ  
るのかを考えながら、是非と  
も立派な業績を挙げられるこ  
とを祈念しておりました。

式典の後には酒食の会を賜  
り洵に有難うございました。  
初めてお目にかかる方々とも

親しくお話しをさせていただ  
き、妻共々心和むうちに帰宅  
させていただきました。

今日は起床しますと外は辺  
り一面真つ白な雪景色。昨日  
の余韻も覚めやらぬ胸中に、  
朝食の話題に花が咲きました。  
昨日は十分なお礼も申し上げ  
られず失礼をしてしまいました  
たが本状をもって重ねてお礼  
を申し上げます。

ご住職様には益々のご活躍  
をお祈り申し上げます。

今年は亡夫七回忌

東京都板橋区  
扇元靖子様

皆様にはお元気でいらっしやいませうか。いつもいつも御心にかけていただき「成寿」有難うございました。今年には亡夫の七回忌に当り、七日に法要を致します。早いものですね。方丈様にお世話になったことがつい最近のようになっています。お陰様で何とか日々忙しく過しております。他事ながらご安心下さいませ。時節がら呉々も御身お大切になさって下さいませ。

遺言により献体

後日心をこめた供養を

千葉県流山市  
鈴木康子様

いつもお世話になっております。父渡邊辰治は本年二月二十二日肺炎のため永眠いたしました。遺言により家族のみにてお別れをいたし、横浜市立大学医学部に献体をいたしました。まだ一年以上時間がかかるようですが、大役を果たして戻って参りました時は、心をこめた供養をいたしたいと思っております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

善光寺様の益々のご発展と

皆様方のご健勝をお祈り申上げております。

特集で知った

前角老師のご活躍

東京都中野区  
中村正信様

成寿をお送りいただきありがとうございます。毎号共益々充実した内容にていろいろと勉強させていただいております。

唯この度成寿により初めて知ったのですが、御兄様の前角老師のご他界であります。広く世界にご活躍のご様子がお特集により知り、誠におくれ

ましたがここに深くお悔み申  
上ます。故人の御冥福をお祈  
り申上ます。

こうした立派な方が早く世  
を去ることは悲しいことです。  
いたらぬ我々を御導き下さる  
貴重な方々の大きな御活躍を  
期待するものです。

心に強く印象  
人間としても  
禅僧としても本物

東京都新宿区  
野火 晃様

成寿を拝受、拝読。はじめ  
てお兄上、前角ご老師の急逝  
を知り、本当にびっくりいた  
しました。

私がたった一度だけご老師

にお目にかかったのは、数年、  
いや、もう十年近く前になり  
ますか、ご息様方の上座部  
仏教得度式のお祝いに、金花  
舎の加藤子明氏と二人、善光  
寺に伺った折でした。

あの時私は粗忽にも、ご老  
師を黒田方丈様と一瞬勘違い  
して、トンチンカンなご挨拶  
をし、

「弟とお間違えではないかと  
存じますか：」

やさしい笑顔に思わず赤面。

「ご兄弟、あまりに似ていらっ  
しゃるもので」と、あわてて  
自己紹介をやり直すへまを演  
じました。

そのあと、数分お話しをい

たしましたが、ああ、この方  
は、人間としても、禅僧とし  
ても本物——一流の人物だ  
と、心に強く印象づけられた  
記憶があります。まだまだお  
若く、それにお丈夫そうでし  
たのに、と、残念でなりませ  
ん。もつとも、こんな感慨も、  
私のような凡夫ならばこそ。  
『生死の中に仏あらば、生死な  
し』

ご老師は今も、只管打坐。  
生死を超えて、坐って、いら  
っしゃることでしょう。

心よりお悔やみ申上ます。

盛大な祝賀会  
ご任職のお徳が忍ばれて

タイ国  
小谷亀太郎様

先日、ワット・パクナムの  
任職ソムデット昇進祝賀会に、  
皆様お揃いでおいで下され、  
ロンポー・ソムデットも大変  
御満悦、御慶びの様子でござ  
いました。

誠に盛大な祝賀会で、任職  
さんのお徳がしのばれました。  
その節には私にまで数々のお  
みやげ頂戴致し、厚く御礼申  
上げます。今後は余りお氣  
をお使いにならないようお願い  
い申し上げます。どんな事でも

走りつかいは喜んでさせて頂  
きますので、御遠慮なくお申  
出下されたくお願い申し上げま  
す。

先は右御礼申上げた一筆  
呈上申し上げます。

懐かしまれ愛されつづけ  
仕合せな前角さん：

東京都新宿区  
加藤子明様

前角老師特集の「成寿」有  
難うございました。全頁すみ  
からすみまで読ませて頂き、  
誠に懐かしく、さまざまなか  
とが想い出されました。特に  
秦禪師や志保見さんと前角さ  
んが会われた折々の場面が、

会話の発声からその表情まで、  
まるで昨日のことのように想  
い出され、いっそう無常の感  
を深くしました。禪師も志保  
見さんも、このような特集誌  
があるべきだったなあと、当  
時考え至らなかったことが悔  
まれました。成寿のおかげで  
前角さんは末永く人々に懐か  
しまれ愛されつづけます。仕  
合せな前角さんです。

前角老師の生きざまを  
自分の鑑に

アメリカ合衆国  
藤田一照様

『成寿』をお送り下さり有  
難うございました。多数の



方々の追悼文や前角老師生前のお写真を拝見し、回数こそ多くはありませんでした、故老師との出会いを思い出しました。これまでの御苦勞がやっと形となって実りだし、次のステップへとという時に、我々アメリカで禪に関わる者にとっては、本当に惜しい方を亡くしてしまったものです。老師の生きざまを自分の鑑にしていかねばと思っております。

法燈は、永遠に  
継承されることを信じて

東京都葛飾区  
林 博明先生

「成寿」第二十五号をご恵

送賜わり有難うございました。

前角老師の突然の遷化を知り驚いています。今日まで知らず、大変失礼致しました。

心から哀悼の意を表し、ご家族、兄弟の皆様の御心痛をお察し申し上げます。残念です。

四十年余り文化・風土の異なる地で開教師の任命を受け、精魂をそそがれました道念は、大変であったことでしょう。

今日の禪ブームの一大拠点を築かれたことに只々感謝してあります。この法燈は、永遠に継承されることを信じています。

今回の「成寿」第二十五号

からの所感から、一人の人間の行いがこんな世界の人々に感動を与えるのか。…常に自覚のある生活をし、これらの人生を歩んでゆきたいと心得ています。

兄を亡くした悲しみは  
更に深く

東京都  
ポール牧様

「身をけづり人に尽さんすりこぎのその味知れる人ぞ尊し」

兄に下された黒田老師のこの言葉の慈しさには、涙がとめどなく流れて、止めるを知らませんでした。心より深

く感謝を申し上げます。

日を重ねる毎に兄の遺してくれたもの、あまりにも多く、その悲しみは更に深くなるばかりです。

生前兄に賜りました御老師の御法愛を想うとき、兄と重ねて御老師に至ります。時間の許されるをえらび親しくお逢いしたく存じます。

その日の近からんことを切に願いつ、萬謝に代えて

立派なお仕事に  
畏敬の念

東京都八王子市  
鶴岡桂子様

森山老師からおさそいを頂

き、先日の不動明王大祭に参加させて頂きまして、有り難うございました。日常の喧騒を離れて、心安らぐ一時を過ごすことが出来ました。

黒田先生、森山老師とも、真の仏教を説かれ、立派なお仕事をなされていらつしやることに、ただただ畏敬の念を抱きました。

今後共、何卒御指導下さいます様、お願い致します。



## 留学育英生からのたより

### スイス・ローザンヌ在住

第12回育英生 計良 龍成

黒田 武志 理事長様

拝啓 昨年中は、たいへん御世話になり、本当にありがとうございました。今年も宜しくお願い致します。

さてこの度、『成寿』冬期号と中外日報の記事を送って頂きありがとうございました。米で仏教主義大学を設立するという構想を聞き、素晴らしいことだと思いました。計画が実現できますよう期待しております。

私の方は、ローザンヌに来てから二か月が経ち、ようやくこちらでの生活の勝手も分かってきたところです。先月中旬から授業が始まり、Tom J.F. Tillemens先生に『中観光明論』を一緒に読んでもらってます。私はこちらに来て初めてTom先生と会ったのですが、学問的には非常に厳しい先生ですが、人柄はとても気さくで、何でも話せる方なので、ほっとしました。何年間、ローザンヌに滞在することになるかまだ分かりませんが、早く言葉を覚え、実りある良い時を過ごしたいと思います。横浜善光寺育英会をはじめとして、私に留学の機会を与えて下さった方々に心から感謝いたします。

それではまた、機会を見つけてお便りを差し上げたいと思います。

黒田理事長と善光寺に集う皆様の、ますますの御健勝と御活躍をお祈り申し上げます。

敬具

1996年1月1日

## 留学育英生からのたより

### ドイツ・ライプチヒ在住

第9回育英生 佐藤 誠司

拝啓 黒田理事長様 如何がお過ごしでしょうか。私はこの12月、1月と、大学の勉強に加えて、引越し、風邪をこじらせるなどで、つついとお手紙を差し上げるのが遅れてしまいました。申し訳ございません。

引越につきましては、私のアパートは地下にあったのですが、冬になりましていよいよ寒さと湿気が酷くなり、体調が常に悪くなり、加えて壁や天井が剥げ落ちるなど、とても住めるような状態ではなくなり、引越することに決めました。しかし、契約期間以前の引越となりますので大家と対立してしまいました。私は自分の権利がどこまであるのかを知らなければならず、弁護士や役所などを回らざるを得なくなりました。お蔭様で或程度納得のいく和解を得ました。貴重な留学の時間を失ったのは悔やまれますが、こういうことに疎い自分には良い薬だったかもしれません。また、法律相談や引越の際には、日本人、ドイツ人を始め、アフリカ人、カザフ人など、多くの友人に助けをもらい、本当にその有り難さを感じました。

只今住んでいるのは大学の寮です。ドクターコースの学生は本当は寮に入ることが出来ないのですが、ライプチヒのアパート事情の悪さ、このままでは研究が進まないということを訴えて、一部屋をもらいました。これからまた落ち着いて勉強出来ると、ほっとしております。

さて、私は3月、日本に帰ろうと思っております。その際は是非とも理事長にお会いして、留学の経過をご報告致したいと思っております。

敬具

1996年2月7日

# ご寄付御礼

〈育英会寄付者〉

山田屋本店殿	百万円
服部 憲武殿	百万円
村上 晃殿	五十万円
天野屋石材店殿	十五万円
阿部 慈園殿	十五万円
中村 淳子殿	十二万円
瀧澤 武雄殿	十一万円
越石 周平殿	十万円
宮林 明彦殿	十万円
細井 勉殿	十万円
北館良之助殿	十万円
瀧澤 孝子殿	八万円
奥村 公規殿	五万円
高崎 直道殿	五万円

黒田 トシ殿	五万円
小林 海暢殿(泉涌寺)	四万円
佐々木弘傳殿	参万円
宮田林産(榊)殿	三万円
小川 光生殿	三万円
関口 哲勇殿	三万円
青木よしの殿	三万円
鈴木 紀元殿	三万円
黒河内貞子殿	二万円
潮 音 寺殿	二万円
碩 水 寺殿	二万円
芦辺 鎌禅殿	二万円
内山 款偉殿(正眼院)	二万円
松山 假伊殿	二万円
宿屋 忠孝殿	二万円
伊藤伊勢次殿	二万円
西方 あさ殿	一万円
村松 晴雄殿	一万円

飯田 利行殿	一万円
鐙 喜裕殿	一万円
小玉 大圓殿	一万円
河野富美恵殿	一万円
川村 隆信殿	一万円
内海 忠男殿	一万円
鳥屋原百合子殿	一万円
岡本順太郎殿	一万円
吉原木工所殿	一万円
住田 米子殿	一万円
石井 良昌殿	一万円
平松 侑子殿	一万円
林 博明殿	一万円
田中 清高殿	一万円
広野 義成殿	一万円
桜井 和子殿	一万円
大金きよの殿	一万円
斉藤 兼英殿	一万円

〔成寿賛助〕

瀧 福 寺殿	一万円
国広 敏郎殿	一万円
平岡 寿代殿	一万円
村上 博中殿	五千円
松岡 睦雄殿	五千円
井上 葉智殿	五千円
佐藤 幸恵殿	五千円
齋藤 邦義殿(善寶寺)	五万円
赫多 正円殿	二万円
芦辺 鎌禅殿	二万円
宮本 延雄殿	二万円
五十嵐千彦殿	一万円
伊藤 仁志殿	一万円
広瀬 トミ殿	一万円
渡辺 嘉子殿	一万円
(株)つかもと殿	一万円

黒田 トシ殿	一万円
河野富美恵殿	一万円
石川 孝禅殿	一万円
阿部 慈園殿	一万円
太田 好信殿	一万円
原 秀男殿	一万円
村上 博中殿	五千円
桜井 輝夫殿	五千円

## FOREWORD

This summer, we had little rain in the rainy season, so that the shortage of water was serious. I think that the environmental disruption is one of its main causes, so we must regard the earth as our precious asset, and devote to protect the environment more positively.

The environmental disruption is caused by our daily lives, so we must reflect on this point, and cooperate in protecting it with people all over the world before twenty first century.

At the front gate of Eieiheiji-temple, there is a monument Rev. Kumazawa carved the following haiku, “One hundred million people draw the scanty remnants of water from the bottom of a dipper”. I hope not to waste even a drop of water which quenches the thirst of many people’s mind and body, and must to thank the mercy of the nature.

Mr. Sankian Ito who had drawn illustrations for the front covers and writings of *Seiju* since the first issue, died on March.

He gave guidance to everyone with integrity and

did everything with endeavor. He was also a leading figure in architectonic circle and a pioneer of the Southern school of Chinese painting, with high estimation for the originality of his new style. I thank and pray deeply his soul may rest in peace.

This volume has put together a special issue on Aichi Gakuin University and surplice.

Aichi Gakuin University, as the training school of priests and teachers in Sotoshu, devotes to build fine characters with its own doctrine, "The unification of austerities and learnings, the repayment of kindness and gratitude". Aichi Gakuin University is a prestigious school in the western Japan ranked with Komazawa University in the eastern Japan.

The surplice is one of the most precious things for priests.

—The surplice is not only mind but also body of Buddha.—

"Putting on great surplice of deliverance and virtue, that is, the teaching of Buddha, let's make all living things enlightend."

I hope to devote myself, with this vow, to the prosperity of Buddhism and to the world peace.



## 編集後記

▼『成寿』第26巻をお届け申し上げます。善光寺方丈様は三十年間にわたり、お袈裟を数多くの方々からお作りいただきました。そこで今回はお袈裟の特集号にいたしました。

▼お袈裟は僧侶にとりましては、最も貴いものであります。本誌では日本の一流の先生方にそれぞれのお立場でご執筆頂きましたので、今までどこにも見られなかったような内容の濃い誌面となりました。そのため、に多少専門的になりましたことを、お含みおき下さい。

▼学園めぐりは愛知学院大学です。善光寺留学僧育英会では愛知学院大学から海外に育英生を送り、又海外から育英生が愛知学院大学にお世話になっているという縁の深い大学で

あります。海外からの育英生の座談会では皆さんがいきいきと発言しておられ、嬉しく思いました。次回は鶴見大学を予定しております。ご期待下さい。

▼次号は、三月に亡くなられた故伊藤三喜庵先生（善光寺檀徒総代）の追悼号とさせていただきます。

▼育英会参与、三心会（駒澤大学同級会、黒田方丈も会員）幹事長・倫勝寺住職馬場道男老師が四月に遷化されました。育英会にご尽力賜わり、厚く御礼申し上げますと共に、ご冥福をお祈り申し上げます。

▼五月下旬に、育英会論文集第二巻を発刊いたしました。第一巻にも増して各方面から大きな反響をいただいています。発刊に関して賜りました皆様のあたたかいご支援に、誌上より御礼申し上げます。

▼読者の皆様からいつもたくさんのお便りをお寄せ頂き、ありがとうございます。季節のお見舞、お礼状、心あたたまるお話しなど、出来るだけ本誌でご紹介させて頂きたく思っておりますが、紙面に限りがありますので、失礼の段おゆるし下さい。

▼厳しい残暑も終り、九月は秋彼岸の月です。ご先祖様を心から大切に、一日が充実して喜びに溢れるような日常生活を送りたいものです。

成寿 第二十六号

平成八年九月一日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野中央一丁目十二番九号

電話 〇四五(八四五)一三七一

FAX 〇四五(八四六)二〇〇〇

印刷所 神奈川新聞社出版局





横濱善光寺